

下りて待ち給へ。某尋ね来るべし」とて雲に乗りて出行きけり。斯て多時待てども飯らざりければ、三藏は飢渴に迫り、悟淨を呼びて曰ふは、「八戒食を求めんとて出行き、未だ歸り來らず。我飢渴に忍びがたし」悟淨聞いて、「貧道尋ね来るべし」と、同く雲に打乗りて出行きけり。三藏は唯獨となり、倉皇として待居給ふ處に、行者水を持ちて出來り、「師父此水涼しくて亦濁なし。先是を吃み給ひて飢を止め給へ。我再度行きて齋を求め来るべし」三藏大いに叱つて曰く、「假令渴して死すとも汝が水を喫むべきや。趁早に持歸るべし」行者曰く、「師父倘我をめし領れ給はずば、決して西天に到り給ふ事協ひ難からん」三藏の曰く、「西天に行れざるは儂が管する事にあらず。疾々飯りされ」行者面色變りて、三藏を罵言つて曰く、「汝狼心の潑禿子、十分に我を羞辱る。思ひ知れよ」と云ひも敢ず、鐵棍を押把りのべて、三藏の背上を強大に打ちければ、三藏は眼昏み地上に倒れ、死生半生の動靜なり。行者懽喜び、一箇の包袱を奪ひ取り、勛斗雲に打乗りて、去方知らず失せにけり。斯て八戒は、山の凹かなる處に人家あるを見つげ出し、偕は上首此山に遮られて人家見えざりしと覺えたり。僥倖なるかな、彼處に到りて齋を乞來らん、と行脚の僧に身を變じて、一軒の家に到り齋を乞ひければ、裡より一人の老婆出來り、一鉢の齋を與ふ。八戒懽喜び、やがて本相を顯し、原の道に立飯る途中にて悟淨に行逢ひ、

又水を汲持ちて、二人一同に立歸り師父を見れば、三藏は塵埃の中に倒れふし、白馬長く嘶き、邊りに行囊は見えざりけり。八戒驚き、「是は必定、揚老が男子の餘黨爰に來りて、師父を打殺し、行囊を奪ひ去りしならん」悟淨聲を發つて、「師父々々、疾く氣を蘇け給へ」と叫び歎く。八戒も萬般と介抱したりければ、三藏漸く甦りて、苦氣なる聲にて曰ひけるは、「今の程行者歸り來りて、我に纏ふ。吾堅執に追出だしたるに、渠怒りて我を一棍に打倒し、行囊を把つて逃去りたり」八戒聞いて大いに罵つて曰く、「此潑猿、怎麼ぞ斯のごとく无禮なるや。我今渠を尋出し、包袱を拿返さん」悟淨が曰く、「儂怒ることを止めて、且人家を求めて師父を安歇せ、宜く介抱いたし、其後渠を尋ねるとも遅からぬ事ならずや」八戒是に遵ひ、「嚮に齋を乞ひし彼老婆が家に頼むべし」とて、夫より師父を馬に乗せ進せ、かの人家に到り懇に頼みければ、老婆信やかに粥を煮きて三藏に侷む。兩人も飯を吃しける時、三藏悟淨を呼びて、「汝趣く行者を尋出し、行囊を把返し來れ。方知返し與へずば、南海菩薩に是を訴へ、菩薩を請じ奉りて是を求め歸るべし。管々渠と争ふ事なかれ」悟淨命を受けて雲にうち乗り、三日三夜にして東洋大海を過ぎ、彼花果山水簾洞に到る。此時行者は高き石の上に座し、衆部の猴ども前後左右に群り居たり。行者手に一通の文を持ち、高らかに讀上げるを、悟淨何事やらんと聞居れば、唐

の太宗皇帝より三藏に給はりし關文を讀むなりけり。悟淨堪へかねて近く進み、「師兄、汝師父の關文を讀んで何にかするや」行者頭を擧げて是を見て、「汝何者なれば爰に来れるや」と喚びければ、衆部の猴ども駈集りて、竟に悟淨を捉へて行者が前に扯居るたり。行者大いに喝つて、「爾何者なれば、漫に此處へは來りしぞ」悟淨心中に、「渠故意と見知らぬ風をするならんと思ひ、孝恭しく禮をなし、「我師父悞つて師兄の性暴々しきを恨み、終に追放ち給ふ。師兄是を怒りて、師父を打倒して擔兒を把り給ふ。今より疾販りて、再度師父を扶けて俱に西天に赴き、經を把り給ふべし。倘又俱に行く事協ふべからずば、萬望行囊を我に給はるべし。師兄今名山に在りて、快く樂みを極め給ふ。怎的又外に求むる事あらんや」行者嘲笑つて曰く、「汝行囊を求むる事は、關文を望き故ならん。我唐僧を扶すば、爲何西天に到り經を求むる事を得んや。我今安排手當をなし置きたれば、明日爰を打立つて、立地に西天に到り、經を取つて販るなり。汝倘疑はしく思はど、我が準備を見すべきぞ」と小的們に分付けて、「疾く師父を請じ來れ」と云ひければ、小猴ども起り入りて、一隻の白馬を牽出せば、一人の三藏、一人の悟淨、又一人の八戒、行囊を擔ひて出来る。悟淨是を見て驚き、大いに怒り、寶杖を廻して飛蒐り、彼假悟淨を唯一討に打殺せば、一隻の猴の妖精なり。行者 是を見て大に怒り、鐵棒を廻し打

つてかよる。衆部の小猴ども、悟淨を捉へんと駈來る。悟淨は急ぎ起り退き、雲に打乗り逃げたりける。彼行者更に是を追す、又別に變化に馴れたる小猴に命じて、悟淨が形に變ぜしめ、尙西方に赴くべき準備をこそは爲しにけれ。斯て悟淨は、東洋大海を放れ、南海落伽山に到り、木父に逢ひて禮を施し、菩薩に見えたき由を告ぐる。木父則ち悟淨を伴引ひて菩薩に得見しむ。菩薩曰ひけるは、「爾唯今何幹有て此處に來れるや」悟淨身を平臥して拜し畢り、頭を擧げて彼事を告げんとする處に、菩薩の身邊に行者が居り在るを見て、悟淨大いに憤り、乍ち寶杖を把つて打たんとす。行者更に手を動かさず、身を外して菩薩の御後邊に隠れける。菩薩是を見給ひて、「悟淨漫りに手を動かすことなかれ、爾何の故を以て行者を打んとするや。且備に仔細を語れ」悟淨喘氣喘々的、行者が唐僧を打倒したる事より、水簾洞にて假三藏を装構へし事ども一遍し、「貧道此事を告げ奉らんとて參りし處に、行者疾くも筋斗雲に乗りて我より嚮に爰に來る。極めて辭を乖巧にして執飾り、其身の善き様にのみ訟へ告し候はん」菩薩聞しめして、「爾人を恨る事を止めよ。悟空此處に來りて四日に及ぶ。一時も我が身邊を去らず。いかんぞ假を構へ經を拿らんとする事有らんや」悟淨が曰く、「既に今水簾洞に一人の孫行者あり。爲何猥りに菩薩を欺き奉りて胡説の事を告し上げんや」菩薩重ねて曰く、「既に斯の如くならば、

悟空ごくうと俱ともに彼處かしこに倒たらば、自ら分明ぶんめいならん」行者こんげ是これを聞いて、急いそぎ悟淨ごじやうと打列うちつた立ち、菩薩ぼさつに雲しほ時辭しじし別わかれ奉たてまつり、雲くもに打乘うちのり花果山水簾洞くわくわざんすゐれんどうにぞ赴おもむきける。

○二心攪にしんおほいてんちをかくらんす亂らん大乾坤たいけんこん 一體難いつたいしんじやくのつをしゆしがたし修しゆ眞寂滅しんじやくめつ

孫行者そんげやうじやは悟淨ごじやうと打列うちつれて雲頭うんどうを起おこり、頓やがて花果山くわくわざんに到いたり、雲くもより下くだり見るに、忽たちまち一人の行者こんげ、石臺せきだいの上に座ざして群猴ぐんこうと俱ともに筵宴しゆえんをなす。其容衣帶そのかたいたいより鐵棒てつぼうに至いたるまで、亦また更に分毫ぶんごうも差たがはず。行者こんげ是これを見て大おほいに怒いかり、鐵棒てつぼうを把とつて進すすみより、罵ののして曰いはく、「爾なんぢ奈何いかなる妖精あやまじなれば、我姿わがすがたに變化へんげして我兒孫わがこどもらを奪うばひたるや」彼行者かのげやうじや聞きも敢あへず、鐵棒てつぼうを振ふつて打うつて懸かる。眞しんの行者げやうじやも同おなく鐵棒てつぼうを閃ひらめして、兩人頓りやうにんやて九霄きやうせうの雲内うんないに打昇うちのぼつて、百餘ひやくよ合がぞ戰たたかひける。悟淨ごじやうは洞ほらの中に駈入はせいりて、小群妖こほけものを追散おひちらし、行囊にものを尋たづねども更さらに見みえず。唯一條たひひすぢうの白布簾はくふせんありて洞ほらの門もんを遮掛おほひたり。悟淨ごじやう十分利害じふぶんりがい、また雲くもに乗のつて空中くうちゆうに到いたり、悟空ごくうが戰たたかを援たすけんとするに、那個いづれを實じつの行者げやうじやとも分わかち難がたければ、漫またりに手てを下くだす事能ことあたはず。二人の行者こんげ悟淨ごじやうに向むかひ、「爾なんぢ力を助たすくるに及およばず。蚤はやく歸かへりて師父しふふに此由このよしを告まうすべし。我今われいまより南海菩薩なんかいぼさつの前に到いたり、眞まことと假にせとを分わかつべし」悟淨ごじやう是これを聞いて、没奈何びつなかく又雲くもに打乘うちのりて三藏さんざうの居給ゐ方かたへぞ立歸たちかへる。兩人の行者こんげは戰たたかひな

がら南海落伽山なんかいらくかせんに到いたりけるに、護法諸天ごほふしよて、おほいおごろ大おほに驚おどろき、斯かくと菩薩ぼさつに注進ちゆうしんしければ、菩薩ぼさつ立出たて給たまひ、二人を叱しかつて曰たまは、「爾等なんぢら爭あらそ」行者こんげ答こたへて告まうしけるは、「此この妖怪あやまじ、老孫らうそんが姿すがたに變へんじ、眞まことも假にせも分わかちがたし。願ねがはくは菩薩ぼさつ慧眼けいがんを延のべて能よく是これを分わかたせ給たまへ」一人の行者こんげも云處いふところまた斯かくの如ごとし。菩薩ぼさつ是これを見給みふに、實じつに眞假しんがさらに分わかちがたし。爰こゝを以もつて且かつ善財童子ぜんざいどうじと木叉もくしかとに命めいじて、二人を引分ひきわさせ給たまひ、密ひそかに諸天しよてんに曰たまひけるは、「吾今われいま緊箍咒きんこくじゆを唱となへて、頭かしらの疼いたむを眞まことの行者げやうじやとし、疼いたまざるを假にせとせん」衆位しゆゐ「然しかるべし」と答こたへ奉たてまつれば、菩薩ぼさつ頓やがて緊箍咒きんこくじゆを唱となへ給たまふに、二人の行者げやうじや一齊いつしやう、「頭疼かしらいたし、頭疼かしらいたし。念ねんずる事ことなかれ、念ねんずる事ことなかれ」と叫さけびける。菩薩ぼさつ口くちを止とめ給たまへば、二人の行者げやうじやは又上首じやうしゆの如ごとく、一齊いつしやうに成なりて相戰あひたふ。菩薩ぼさつ今いまは詮方せんかたなく、二人に向むかひて曰たまは、「爾なんぢ往昔おんむかし大おほいに天宮てんきゆうを騷さわしたれば、天上てんじやうに到いたりて事ことを分わかつべし」二人の悟淨ごじやう是これを聞いて、また戰たたかひながら半空はんくうを越はりて南天門なんてんもんに到いたる。爰こゝにも又諸神しよじん達たち出いで給たまひ、二人同おなじ悟淨ごじやうが打呀たつかふを見て呆臉あきれ呆たてて立たち給たまふ。行者こんげ曰いはく、「此この妖怪あやまじ、老孫らうそんが容かたちに變へんじ、眞假しんが更さらに分わかちがたし。願ねがはくは諸神しよじん是これを分わかち給たまへ」又一人の行者げやうじやも同おなじ事ことを訴うたふ。諸神しよじんも爲詮せんかたなく、引列ひきつれて玉帝ぎよくていに見みえしめ、備つに是これを奏問そうもんすれば、玉帝ぎよくてい仔細さいしゆ聞きしめし給たまひ、托塔天王たくたてんわうに命めいじて、「照魔鏡せうまきやうを取來とりて渠們かれらを照てらし本相ほんさうを顯あらすべし」と曰たまふ。天王命てんわうめいに應おうじ、照魔鏡せうまきやうを把來とりて渠們かれらを照てらし本相ほんさうを顯あらすべし」と曰たまふ。天王命てんわうめいに應おうじ、照魔鏡せうまきやうを把來とりて渠們かれらを照てらし本相ほんさうを顯あらすべし」と曰たまふ。

り、是を照し見給ふに、則悟空が姿二人一容に移りて、衣帶鐵棒に至るまで分毫も違はず。玉帝又是を分つ事能はず、殿外に追出し給ふ。二人の行者一齊くいふやう、「吾們今より師父三藏の許に行きて此虚實を分つべし」と云ひつゝ、亦空中を戦ひながら三藏の居給ふ方へと走り行く。

此時悟淨は、三藏の許に回りにて、花果山にての動靜を具に語り、師徒三人疑ひ恐れ居る處に、忽ち空中に吶喊响聲聞えて、二人の行者戦ひながら三藏の前に來る。三藏是を見て、八戒と悟淨に命じて、儂們兩人の行者を捉へて引分けよ。我緊箍咒を唱へて、頭の疼むを眞の行者とし、疼まざるを假として、端的に是を分つべし」八戒悟淨尤と同じ、二人の行者を捉へ、「儂等争ふ事を止めて、師父の計を待ち給へ」三藏口の中に緊箍咒を唱へ給へば、二人の行者一齊に臥轉び、「頭疼む、頭疼む。念ずる事なかれ、念ずることなかれ」三藏口を止め給へば、二人の行者が曰く、「吾們又閻王の廳に到りて其の發放を待つべきなり」と、上首の如く鐵棍を把て相戦ふよと見たりしが、竟に姿を見失ふ。此時八戒、悟淨に向ひ、「儂水簾洞に到りながら、行囊を拿來ざるは奈何なる故ぞ」悟淨が曰く、「吾も是を尋ねたれども、唯一條の瀑布のみ有りて、外には眼に遮る物もなし」八戒が曰く、「汝知すや、白簾布の後に洞あり、其飛泉を潛りて

洞に入るなり。原來我能路開を知りたれば、今より行きて行囊を捉來らん」とて、頓て雲に打乗りて華果山さして急ぎけり。

却説二人の行者は戦ひながら終に陰山の後に到る。山中の鬼ども驚き恐れ、急ぎ十殿大王へ報ず。大王地藏王菩薩に告げ、地藏王菩薩より森羅殿上に奏し送る。大王出給へば、衆位の陰兵多く伺公して是を見に、狂風滾々として、二人の行者戦ひながら森羅殿の許に到る。閻王進み出て曰く、「大聖何事ありて我幽冥を騒がすや」行者が曰く、「此妖怪吾姿に變じ、假と眞を分ち難し。此故に今閻王の查看を願ふ。疾く此妖怪が魂魄を奪ひ、一星混亂する事を脱れしめ給へ」一人の行者も又斯の如く告る。閻王大いに驚き、頓て管簿判官を召して件一に點化あるに、假より行者が名字なし。抑地藏王の乗給ふ獸は、些時の間に四大部洲の怪異を悟る物なれば、是に命じて二人の行者を窺はせ給ふ。此獸森羅殿上に匍匐して、姑く有りて頭を擧げ地藏王に向ひて告しけるは「妖怪が名悟れりと雖も、今眼前にては説ひがたし。倘是を除かんと欲せば、管ず如來に見えしめ給へ」地藏王是を悟り給ひ、行者に向ひて命せけるは「儂等兩人形一容にして更に二個なし。倘是を分たんと欲せば、雷音寺如來の前に到り、其黑白を明めよ」二人の行者是を聞いて一齊に吆喝きて、「行くともなく、吾們趁早西天に到り、如來に見え候はん」と又躍



眞假
 二悟空
 空中戰



りあがつて戦ひながら、走つて竟に西天に到る。此時如來衆位の御弟子を會め、説法をなし給ふ。如來の妙音廣長舌、列位耳を傾け心を清し、孝恭しく聽聞す。既に御説法終る頃、天華繽紛として普く降り、音樂半空に響き渡る。如來大衆を顧みて曰く、「爾們都て一心、且看よ二心争ひ來る」大衆眼を擧げて是を見に、二人の行者天に叫び地に喚きて、雷音寺に戦ひ來る。個の金剛止る事能はず。二人の行者俱に亂嚷きて臺下に到り、如來の御前に蹲踞、上首よりの事ども備細に訴へ奉り、「願くは佛祖憐憫を垂れ給ひて、我々が爲に邪正を辨じ給へ」如來二人の悟空が姿音聲まで一容にして無二なるを御覽あり、疾く是を分曉り給ひ、其謂れを説かんとし給ふ處に忽ち觀音菩薩雲に乗りて來り、如來を拜し見え給ふ。如來曰く「觀音尊者、爾看よ、彼二人の行者は那個か是真ならん」菩薩答へ給ひけるは、「向日我山中にも來り候へども、委く是を辨へがたし。是に依りて如來に告げ奉らんとて參りぬ。萬望渠を分たせ給へ」如來笑つて曰く、「爾法力廣大なりと雖も、たゞ周天の物を知りて周天の種類を知らず一菩薩是を聞き給ひて、「願くは周天の種類を仔細示し給はんや」と曰ふ。此時如來說いて曰く「周天の種類を十類五仙といふ。所謂天地神人鬼五虫あり。五虫は便ち羸ルカフ鱗ルモノ毛ケアル羽モアル昆ハダカ是なり。彼一人の妖怪の行者は、天地神人鬼にも非ず、亦五虫にも非ず。別種にして、號て四猴混世菩薩と云ふ。其四猴の第一を靈明石猴と云ふ。能く變化に通じ、天の時を知り、地の理を察す。第二は是赤尾馬猴。これ陰陽を悟り人事を知り出入をよくなす。第三は是通臂猿猴。日月を把り千山を縮め、休咎を辨ふ。第四は是六耳獼猴。よく音を聞き理を察し、前後の事を知る。此四猴、十類に入らず兩間の名を列ねたり。吾今此假悟空を見るに、眞の悟空と形同く、聲音も一容たるは則ち是六耳獼猴ならん」と曰ふ。悟空に化たる彼獼猴は、如來の本相を説出し給ふを聞いて大に驚き、胆慄き急に逃んとする處に、如來大衆に命じて捉へさせ給ふ。大衆一同に捉圍み給へば、彼獼猴忽ち變じて蜜蜂兒となり、空中へ飛昇るを、如來鉢盂を把つて投げ給へば、蜜蜂兒は此裡に覆れ、地上に撥と落たりける。大衆獼猴を見失ひ、此彼處と尋ね、只管騒ぎければ、如來笑つて曰く「妖怪那ぞ逃る事を得んや。吾鉢盂の裡にあり。看々大衆」と曰ひつと、鉢盂を把除れば、六耳獼猴は本相を顯し、再度逃げんとする處を、大聖行者鐵棍を廻して、竟に是を打殺しけり。此故に四猴の中、今此一種絶えしとかや。如來行者に命せけるは、「我爾疾く行き唐僧を助けて爰に來り、經を把つて正果を得べし」行者頭を叩いて曰く、「我師父今既に吾を追放ち給ふ。願くは如來鬆箍咒を唱へて吾緊箍を拔しめ給へ。俗に戻りて眷屬們と俱に生を養ふべし」如來曰く、「爾怠慢の心を發すべからず。我今觀音に命じて爾を送り

三編卷之二

返さん。唐僧の承諾ざる事を怖るゝ事なかれ」と曰へば、行者合掌して恩を謝し奉る。觀音菩薩は、如來の命を受けて、行者と俱に雲に乗給ひ、三藏の舎り居らるゝ老婆が家にぞ到り給ふ。此時悟淨は、觀音菩薩の來り給ふを見て、急ぎ師父に斯と告ぐる。三藏驚き立出でて是を拜す。菩薩曰ひけるは、「唐僧、向日備を打ちたるは、六耳獼猴なり。如來是を悟り給ひ、悟空に命じて殺させ給へり。今又悟空を送り飯し、備を援けて西天に到り經を把しめん事を示し給ふ。爾再度怒り恨むる事を止めて行者を伴ふべし」三藏頭を叩いて恩を謝し「情愿で尊命に違ひ候はん」と答へ奉る。此時東の方より、狂風滾々として、八戒行囊を把飯り來り、雲を降り菩薩を見て拜をなし、「某華果山に到りし處に、果して唐僧八戒悟淨を見る。是を件一に打殺し候へば、都て皆猴の妖精なり。然して行囊は把來り候。亦彼二個の行者は奈何なり候や」菩薩則ち、如來の假行者が本相を見顯し給ひ、行者に打殺させ給ひし事を、仔細に語り給ふ。八戒權喜、師徒諸俱に只管謝し奉る。菩薩又雲に乗りて、別れを告げて歸り去り給へば、三藏師徒は天に向ひて禮拜し、老婆にも深く謝し禮を施し、此處を立出でて、只管に路を急ぎ、西に向ひて進み給ふ。

三編 卷之三

○唐三藏路阻火焰山

孫行者一調芭蕉扇

斯て三藏は、亦行者を得て心權喜び、四人愈西方へ進み、夏月の炎天を過ぎて又三秋の霜景に逢ふ。師徒路を急ぐ處に、忽ち熱氣人を蒸すが如し。三藏の曰く、「時今秋の冷氣に向ひ、怎生斯様に熱氣あるならん」此時路邊に一構の房舎あり。三藏馬より下りて門内に入れば、一人の老人出來りて曰く、「長老は那里より來り給ふや」三藏の曰く、「貧道は東土大唐より西天に到り經を求るの僧なり。一行四人此處まで來り候」老人聞いて、頓て三藏を家の裡に請し入れ、茶飯を侷めて管待しける。三藏問て曰く、「此處秋に逢うて那ぞ却て炎熱の氣あるや」老人が曰く、「此處火焰山と唱す山あり。春となく秋となく、四季共に皆暑し」三藏又問ふ、「其火焰山は何方に有りや」老人が曰く、「彼山は爰を去る事六十里にして、西天に到る大路なり。此の山八百里が間、四方盡般火焰にて、一寸も草生する事なし。若此山を越んとすれば、假令鐵の軀なりとも、忽ち化盡けて水となるべし」三藏老人が詞を聞いて大いに心驚き、色を失ひ座し給

ふ。行者老人に對ひて曰く、「爾此處に寸草も生ぜずといふ。怎生して五穀を殖ゑて一命を繋ぐや」老人が曰く、「倘五穀を殖んと欲する時は、鐵扇仙人の寶貝、芭蕉扇と云ふものを借用ふ。彼芭蕉扇をもて一度搦けば火を鎮め、再度搦けば風を生じ、三度搦けば雨を降す。我輩五穀を殖ゑんとする時は、渠が芭蕉扇を借ることなり。然れども酬謝を備へざる時は、渠決して扇を借さず。爰をもて毎年美しき紙に書を認め、猪羊鵝酒を備へて仙山に到りて、拜して是を借り、然して五穀を殖る。穀實りて後は又火を生じ、原のごとく火焰山となるなり」行者が曰く、「其仙人の巢穴は何といふ處にて、此處より幾句の行程あるや」老人答へて、「是より南に當りて翠雲山と號けし山あり。山中に芭蕉洞とよべる巖窟あり、彼仙人爰に住す。行程凡千五百里なり」行者笑を含んで曰く、「氣得々々。我則ち其扇を借來りて、火を搦ぎ消して此山を越べきなり」と忽ち雲に打乗りて、南をさして出去りけり。老人大いに驚き、「此長老、雲に跨り霧に登る、寔に是神人なり」とて、彌唐僧を恭敬ひける。

斯て、行者は少時の間に翠雲山に到り、雲を下りて見るに忽ち一人の樵夫に逢ふ。行者問うて曰く、「此山翠雲山なりや」樵夫答へて曰く、「則ち翠雲山にて候」行者又問ふ、「鐵扇仙人の芭蕉洞は何地に有りや」樵夫又答へて曰く、「芭蕉洞はありと雖も、鐵扇仙人といふものなし。但

し鐵扇公主といふものあり、羅刹女とも名づく、則ち牛魔王が妻なり」行者是を聞いて大いに驚き、心裡に思ふやう、是又我敵なり。向年、我羅刹女が養子紅孩兒を降伏したり。既に嚮の日破兒洞にて渠が伯父に逢ひし時も、其恨を以て水を遞與へじと争ひたり。今又紅孩兒が母親に逢ひ、彼寶貝を借らんといふとも、怎生借べき道有んや。今此期に臨んで十分利害。然りと雖も、是を借らでは西方に行く事能はず。且試に是を借んと云ひて、倘肯せざる時は亦別に思惟も有るべし、と頓て洞の前に到り、「牛大哥門を排け」と呼はりければ、裡より一人の女怪門を開きて、「何者ぞ」と問ふ。行者曰く、「我は東土大唐より西天に到り經を求るの沙門孫悟空といふ者なり。當今火焰山を越んとして、爰に來つて芭蕉扇を借んと欲す。爾早く公主に告よ」女怪是を聞きて裡に入り、公主に報ず。羅刹女は孫悟空の三字を聞くより、忽ち大いに怒り、三口の寶劍を引提けて、「孫悟空何れに在りや。首を渡せ」と呼はつて洞門の外に出来る。行者禮を施して曰く、「嫂々、老孫爰に在りて禮を行ふに、那ぞ敦圍き給ふや」羅刹女が曰く、「爾吾をして嫂々とよぶ。怎的爾が嫂々ならんや」行者が曰く、「尊府牛魔王と吾と、往昔義を結んで兄弟と成れり。公主は牛大哥の令正なれば、怎麼嫂々と稱せざらん」羅刹女が曰く、「爾潑猴、夫等の親み有りながら、猥りに紅孩兒を害し、今又爰に來つて擅に扇を借んと云ふ。



らんちやが
 羅刹女
 せせりん
 芭蕉扇
 とうとあや
 悟空扇



吾怎生借すべけんや一行者曰く、「嫂々元來の仔細を知らず、誤つて吾を恨み給ふ事なかれ。令郎紅孩兒、吾師父を捉へて蒸喰はんとす。僥倖に觀音菩薩、紅孩兒を弟子となし給ひ、當今正果を得て善財童子となり、天地と壽を同うす。嫂々吾に謝禮をこそ云ひ給はめ。却つて吾を恨むるや」羅刹女が曰く、「此潑猴、舌に誇る事を止めて、我一劍を喫ふて見よ」と一道に伐て蒐る。行者鐵棒を以て架止め、天晚に到るまで戦ひけるにぞ、羅刹女些し戦ひ勞れ、密に芭蕉扇を取出し、行者に向ひ一度颯と搦ぎければ、忽ち大風吹發つて、行者が軀を空に吹きあげ、影洩る形もなし。羅刹女是に勝を得て、洞中に歸り入る。行者は芭蕉扇に搦れて、空高く舞昇り、飄々蕩々として、風に落葉の負るが如く、流に花の散浮くさまに漂ふ事一夜にして、漸々天曉近き頃ほひ、一座の山の巔に落著きたり。行者多時ありて心を定めて此山を見るに、是則ち須彌山なり。行者嘆息つき、「偕も嚴しき芭蕉扇の奇特かな。此山より火焰山までは行程何計有るやらん。昔日我此處にて、靈吉菩薩に求めて黃風怪を降伏せしが、且菩薩に對面して行程を問ふべし」と山を下りて禪院に到り、靈吉菩薩に見えて拜しければ、菩薩出迎へて禮を施し、「大聖經を把るの功終りしや。恭喜々々」と曰へば、行者頭を打振りて、「未だ曾て功終らず」靈吉菩薩曰く、「然ば何幹ありて我山には來り給ふぞ」行者、火焰山に阻てられし事より、羅

刹女が芭蕉扇に搦がれて計らず爰に來りし由を談りければ、菩薩笑つて曰く、「渠が芭蕉扇は、崑崙山混沌開くる時、天地と俱に生ぜし處の一種の寶具にして、大陰の精葉なり。此故に能く火を亡す。倘人を搦ぐ時は、一息に八萬四千里を漂はす。火焰山より爰までは只五萬餘里の行程なり。往昔如來、吾に一粒の定風丹と、一柄の飛龍杖を授け給ふ。飛龍杖は既に、黃風怪を降伏せし時、是を用ひて妙を顯したり。吾今彼定風丹を爾に授けん。是を帶ぶる時は、彼が扇に搦ぐとも一寸も動く事有べからず」と彼定風丹を授け給へば、行者大に僮喜び、拜謝して是を受け、糸針を借りて衣の襟に縫ひいれ、菩薩に別れを告げ、筋斗雲に跨り、暫時の間に翠雲山に駈歸り、鐵棒を以て門を打破りければ、羅刹女駭き、「此猴實に奇術あり。吾扇を以て人を搦ぐ時は、忽ち八萬四千里を漂はす。渠爲何して早く廻り來りしや。吾今兩三扇搦ぎなば、再度歸り來る事有べからず」と劍を扯提け門外へ跳り出で、「此潑猴、又來つて死を求るや」行者笑つて曰く、「嫂々、吝き事を止めて扇を吾に借し給へ」羅刹女嘗つて曰く、「潑猴、爾わが子を陥し入れ、其讐をさへ未だ報はず。爲何今扇を借さんや。疾く劍下の鬼となれよ」と、兩刀を廻して伐て蒐る。行者鐵棒を振つて相迎へ、五七合戦ふ處に、羅刹女密に芭蕉扇を取出し、行者に向ひて搦ぎけるに、行者身に定風丹を帶びたれば、端然として更に搖す。又列ねて搦ぎけれ

ども、愈動く光景もなし。羅利女慌得扇を収め、洞の中に越り入つて門を厳く關しけり。行者身を變じて蟪蛄虫となり、門の縫裏鑽より潛り入り、裡の容子を伺ひけるに、羅利女小的を呼んで、「吾今口乾きて堪へがたし。疾茗湯を拿來れ」と云ふ。小妖的急ぎ茗湯を汲來る。行者是を覗き見るに、茗の泡多く有りけるにぞ、行者忽ち一箇の謀計を思ひつき、飛來つて茗の泡の間に潛入りしを、羅利女は是を知らず、兩三度に喫乾しける。行者は既に羅利女が腹の中に入つて、頓て聲を出して呼つて曰く、「嫂々吾に扇を借さんや」羅利女大いに驚き、「儂那處に在つて言をいふや」行者が曰く、「我嫂々の腹の中に在り。吾今儂に辛き目を見すべきなり」と腹の中に本相を顯し舞跳りけるにぞ、羅利女疼に堪へず、地の上に倒轉びて苦しむ、「孫叔、吾一命を免せよ。命を助けよ」と叫びける。行者是を聞いて、「吾大哥の面に愛て、儂が一命を許すべし。疾く扇を吾に借さんや。儂不肯と云は此通り」と再度腹の中にて騰跳り騒ぎけるにぞ、羅利女聲を發ちて苦み叫び、「扇は速かに借すべきなり。儂跳る事を止めよ」行者是を聞いて跳りを止りければ、羅利女は、急ぎ小的に命じて芭蕉扇を把來らせ、「孫叔いざ扇を借すべし。疾く出よ」と歎きける。行者咽の處まで出でて、口の中より扇を持來るを見届け置いて、「儂口を開け」と呼はりける。此聲を聞いて、羅利女口を張りひらく。行者蟪蛄虫となり、口より飛出で、芭蕉

扇の上にとり、忽ち本相を顯して扇を受取り、「嫂々感激」と云ひすて、忽ち雲に打乗りて三藏の居給ふ方へぞ回りける。三藏は行者が扇を持ちて歸りしを見て大に懼び給へば、行者は始終の光景を仔細談話りつ、頓て師徒四人、此家の老人に別を告げて立出で、西に行くこと四十里計り、漸々に熱氣甚しく、行者が曰く、「師父且馬より下りて、我が此火を搦ぎ消し、風雨の發るを待つて、然して山を越え給へ」と頓て彼扇を持つて火焰山に登り到り、力に任せて一度搦げば、山上火光烘々として盛になり、再度搦げば更に百倍となり、又搦げば火千丈計りになり、行者兩烘の毛を焦し、慌忙ふためき三藏の方へ駈歸り、「師父疾く逃給へ。火が燃來り候」と高聲に叫びければ、三藏驚き、急ぎ馬に打乗りて、師徒四人逃歸る事二十里計り、漸々にして些しき山の蔭に憩みける。行者扇を投捨て、三藏に向ひて云ひけるやう、「不濟事々々々。彼尊畜、われを欺きて偽物を借したるや。此扇をもて火を搦げば、搦ぐに列れていよく火盛になる。倘疾く逃すんば、總身残らず燒盡すべかりしを」と太息ついでぞ怒りける。

○牛魔王罷戰赴華筵

孫行者二調芭蕉扇

此時一人の老人、獨の小的に齋を齋せ來り、身を屈めて禮をなし、「寡人は火焰山の土地神に

て候。聖僧師徒に齋を獻らんとて持來れり、願くは是を受け給へ」行者土地神に問うて曰く、「此火焰山の火は、那の時に消ゆべきぞ」土地神が曰く、「此火を滅んとするには、羅刹女が芭蕉扇に非ずんば協ひ難し」行者が曰く、「我既に其芭蕉扇を借來りて搦ぎたるに、火勢増々盛なり」土地神笑つて曰く、「此扇は眞の芭蕉扇にあらず」行者又曰く、「奈何して眞の芭蕉扇を求めんや」土地神が曰く、「眞の芭蕉扇を借らんと思はど、且牛魔王に求め給へ」行者が曰く、「然らば此火焰山の火は、牛魔王が放つ處なるや」土地神が曰く、「曾て然あらず。此火は孫大聖自ら放ち給ふ處なり」行者大に怒て曰く、「儂漫言を吐くべからず。我何ぞ此火を放たんや」土地神が曰く、「大聖未だ此火の謂を知り給はず。原此處に箇様の山は無かりしなり。五百年前の年、大聖天宮を騒せし時、太上老君の八卦爐中にて燒殺さんとし給ひし時、大聖丹爐を踏破り、火の中を逃出たり。其時に丹爐落碎けて降り、此山となれり。此故に内に火氣を包み、終に一座の火焰山となる。吾則ち彼丹爐を司る處の道人なりしが、老君我が懈怠にて儂に丹爐を破しめたるを怒り給ひ、此處に追下し、火焰山の土地神となし給へり」行者が曰く、「儂眞の芭蕉扇を牛魔王に借れよといふ。然れども牛魔王、今翠雲山に在らず」土地神が曰く、「牛魔王は羅刹女が夫なれども、今は彼處に在らず。今積雷山魔雲洞に一個の狐王あり、渠富貴にして

百萬の家私あり。近き頃狐王死して跡を繼ぐべき子なし。獨の女兒ありて玉面公主と號く。家富み榮ゆると雖も、是を焰管する人なく、牛魔王が神通廣大なるを聞いて、玉面公主親自招いて夫となす。亦牛魔王も、玉面公主の美色に愛て、今は羅刹女を捨てて魔雲洞に居住する。然らば大聖彼處に到り、牛魔王に逢ひて眞の芭蕉扇を得給ひ、是を以て火を鎮め給はど、一つには師父を扶けて彼山を越え給はん。二つには永く火を除きて、此處の僥倖なるべし。三つには吾又天に歸り、老君の教を聞く事を得べし」行者が曰く、「積雷山は何れの處にありや」土地神が曰く、「是より南方に當り、行程およそ三千里にして彼山に到るべし」行者聞いて八戒と悟淨を呼んで曰く、「吾今より積雷山に到り、扇を借來るべし。儂們能く師父を護れ。且土地神を歸すべからず」と云捨てて雲に打のり、南を指して駈行きける。

半時計りにして、忽ち彼山に到りつき、雲より降りて松陰の細道を過行くに、一箇の石門有りて、「積雷山魔雲洞」と云ふ六個の大字を鐫付けたり。行者門外に在りて動靜を伺ふ處に、裡より一人の佳人出來るを見るに、寔に是沈魚落雁の粧、閉月羞花の容貌あり。忽ち行者を見て大いに驚き、急に逃入りて門を關し、奥に入りて牛魔王に向ひ、「吾今日偶門を出でて花を捻んと思ふ處に、一人の和尚門外に停立み我を伺ふ。其模様、面髭臉にして恰も雷公の如し。我

既に驚死せんと致ししなり」牛魔王是を聞いて、「賢妻怕る事なけれ。吾其禿子を見て来るべし」と混鐵棍を拵提けて門外に走り出で、「爾那厮なれば、我が門外に來り、伺ひ覗きて无禮をなすや。趣く立去れ」と呼はりければ、行者進み寄て禮を施し、「長兄貧道を忘記れ給ふや」牛魔王行者を熟々と打視て、「爾は齊天大聖孫悟空ならずや」行者聞いて、「老孫則ち孫悟空なり。別れてより久しく音信も爲ざりし故、今日故意々々來りて訪ね候なり」牛魔王吐つて曰く、「爾謊話の不腆口をいふ事なけれ。向年我が紅孫兒を害し、今何の向顔ありて吾に見ゆるや」行者曰く、「長兄誤つて吾を恨る事なけれ。令郎神通廣大にして、吾渠に近づく事能はず。何ぞ渠を害せんや。唯其時、令郎我が師父を捉へて其肉を蒸喰んとせし故に、觀音菩薩是を勸めて歸復なさせしめ、當今善財童子となりて菩薩の身邊に侍る事を得たり。然るに今何を以て吾を恨み給ふや」牛魔王が曰く、「既に斯の若くならば、爾が一命を免すべし。趣早に歸りされ」行者が曰く、「吾師父、今火焰山にて火氣に蒸れて行く事能はず。長兄の芭蕉扇を借て用ん事を思ひ、嫂々の許に到り懇に求めたれども、堅執にて借し給はず。此故に長兄を拜して彼扇を借用んと思ひ、是まで参りたり。長兄慈悲を垂れ給ひ、嫂々の許に告げて萬望扇を借し給へ。用ひ畢らば趣早に返し奉らん」牛魔王大に怒り、「諸は我が寶貝を借んが爲に來りしよな。不容々々。且我が

一棍を喫へよ」とて劈心に打て蒐る。行者も鐵棒を指しかざして、七八十合戦ひける。此時山の上に人聲有りて、「牛爺々、吾が大王筵宴を設けて貴王を待ち給ふ事久し。趣早に來り給へ」牛魔王是を聞いて行者に向ひ、「吾今朋友の方へ筵席に呼れ行かんとす。此故に爾を助くるぞ」と云捨てて越り行き門に入て堅く關し、玉面公主に謂て曰く、「今來りし髭臉和尚は、孫悟空といふ者なり。吾遠く追退けたれば、今は來るべからず。我今朋友の許へ筵席に呼ばれ行くなり。爾寂しくとも、酒を喫んで心を慰め、我が販るを待ち給へ」と云置きて、壁水金睛獸に打乗りて、雲霧を發して出去りけり。行者は山頭に隠れ居て、牛魔王が西北を指して出行くを見て、彼が行向を伺ひ見んと思ひ、一迅の風と化して、牛魔王が迹を慕ひ追行く處に、怎ち一座の高山に到る。爰にて牛魔王を失視ひけるにぞ、行者本相を顯し、路を求めて尋ね行けば、山中に一箇の深淵あり、一邊に大なる石碣を建て、「亂石山碧波潭」と云ふ六箇の大字を彫付けたり。行者心に思ふやう、牛魔王必定此水中に行きたりと覺ゆ。渠が友とする者、管ず蛟龍鼉鼈の類ならん。怎生して我水中に潛り行きて尋ね見ばや、と思惟しつ、竟に一個の蟹と變じ、水底に潛り入りて見れば、忽ち一箇の宮殿あり。廊下に壁水金睛獸を繋ぎおき、牛魔王は殿の正中に座し、老龍王と對座ひ、若干の水怪蛟龍ども、皆輪座に列居て、觴の指扣してぞ在りにける。

行者忽ち一箇の謀計を思ひ付き、身を變じて牛魔王となり、邸下の金睛獸を解放ち、是に打
 乗りて原の淵に越り出で、頓ち翠雲山に駈行き、芭蕉洞に到りければ、羅刹女が小妖的ども是
 を見付け、急に奥に走り入りて、「爺々尊還」と呼はりければ、羅刹女懼び出對ふ。行者金睛獸
 を下りて一邊に控在ぎ、裡に入りて座す。羅刹女は眞の牛魔王と思ひ、恨み泣いて曰く、「大王
 何とて新なる妻を寵愛し、斯く吾を捨て給ふや。今日又怎麼なる風吹てか、此處へは回り給ひ
 しぞや」行者笑つて曰く、「儂を捨るには有ざれども、彼玉面公主吾を迎へて後、種々の幹忒繁、
 閑しさの餘りに久く彼處に止りたり。近頃彼孫行者といふ者、火焰山を越えんと欲して、吾が
 寶貝芭蕉扇を求ると聞く。倘來りなば、這厮を捉へ微塵になし、我兒の讐を報はんと思ひ、此
 故に歸り來れり」羅刹女が曰く、「大王いまだ知り給はずや。吾既に彼猿めに命を失はんとせし
 なり」行者故意と驚きたる氣色にて、「彼潑猴、いつの程にか此處に來りつるぞ」羅刹女、昨日
 戰ひし趣、また我腹の中に入りて惱し、扇を借したる事ども仔細と語りければ、行者の牛魔
 王、胸を叩いて嘆息し、「儂誤つて吾寶貝を渠に借したり。爲何して把返すべき」羅刹女聞い
 て、「管ず氣遣し給ふな。我渠に借したるは偽物の扇なり」行者聞いて、「然ば眞の扇は那處に置
 きたるや」羅刹女が曰く、「扇は深く藏め置きたれば、更に罣慮有るべからず。且悠々と座して

酒なりと喫み給へ」と、夫より小的に分付けて宴を開き、酒肴を多く拿出させ、羅刹女が曰く、
 「大王新なる色に心を移し、我結髪的情を忘れ給ふ事なかれ」行者杯を把つて、「我久しく外
 に在つて、儂に家中の幹を治めさせ、多く焦慮を致させたり。且儂に一觴を侑めん」とて酒
 を汲んで與へければ、羅刹女懼んで是を喫し、又行者に侑めしかば行者も數杯を傾けて、指
 つ押つ汲交し、興酣閑に及びけるに、羅刹女は既に春情十分に發り、只管淫戲れかよるを見
 て、行者が曰く、「儂寶貝を何處に藏め置きたるや。彼悟空は神通廣大なる故、渠尙形を變じ
 來り、奪ひ去る事も有んかと、吾甚だ安堵かず」羅刹女打笑ひ、頓て口の中より扇を吐出しけ
 るに、其大いさ杏葉の若し。行者手に取りて打視り、「斯の如く小なる扇、爲何ぞよく八百里の
 火を消さんや」羅刹女驚いて言しけるは、「大王此程、玉面公主に魂を奪はれ、吾家の寶貝の
 妙有る事を忘れ給ふ。倘是を大きくせんと思ふ時は、左の手の大指にて扇の柄を堅く押へ、
 呶噓呵吸嘻吹呼と唱ふる時は、其丈一丈にも二丈にもなる。那ぞ八百里の火を怕れんや」行者
 聞いて大いに懼懼、忽ち扇を口に含み、「感激」と云捨てて本相を顯し、門外へとび出でけれ
 ば、羅刹女は是行者なる事を知つて大いに怒り、多時言をも發ふ事能はず、彼方を睜んで嘆息
 す。行者は頓て山上に登り、口より扇を把出し、羅刹女が教し如く、呶噓呵吸嘻吹呼と唱へけ

れば、果然此扇二丈計りの大いさとなりけり。行者心中大いに懼び勇みける。然といへども是を原の如く縮るの法を知らざれば、詮方なくて、其儘にて肩に扯撻ぎ、三藏の居給ふ方へぞ急ぎける。

○猪八戒助力敗魔王

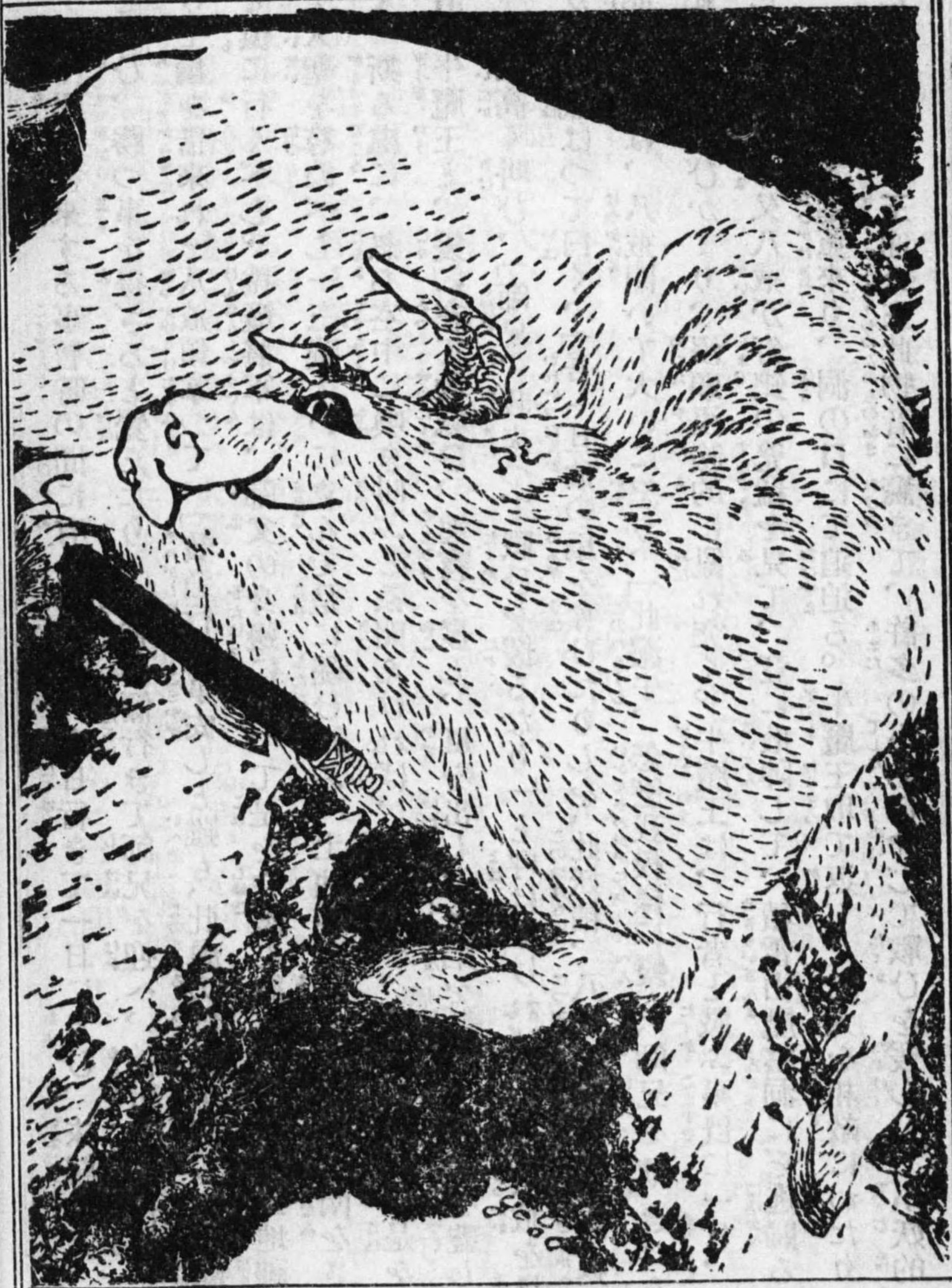
孫行者三調芭蕉扇

却説牛魔王は、碧波潭に在りて龍王と筵宴をなし、宴席終に果てければ、暇を告げて歸らんとす。龍王則ち送りて出づ。牛魔王、嚮に廊下に拴ぎ置きし金睛獸在らざりければ、爰彼處と尋ね搜す。龍王是を見て、「牛爺の金睛獸、何處へか失せたり。誰も知らずや。嚴く查看せよ」と呼はりける。衆位の水怪跪踞いて、「我們尊宴の初めより、場處に有りて酒殺を獻じ、或は樂を奏す。此故に一人も外に出ず。原來別人の來りしをも見ず。唯一隻の怪氣なる蟹の來りしが、更に見知らぬ斯なり。彼蟹何時の間にか失せけん。金睛獸も其頃より見え候はず」牛魔王是を聞いて忽ち分り、諸は彼孫悟空、蟹と變じて此處に來り、吾が金睛獸を盗み、又吾が形に變じて此獸に打乗り、翠雲山に到り、羅刹女を欺きて芭蕉扇を奪はんとするの計略に疑ひなし、と思ひければ、頓て老龍王にも荒増此事を物語り、別を告げて碧波潭を走り出で、雲を發して、

飛ぶがごとくに翠雲山に越り行き、芭蕉洞に到りければ、羅刹女は臥轉び、胸を打つてぞ叫び居る。又一邊に金睛獸の繋ぎ在を見て、牛魔王高聲に呼はつて、「夫人、悟空は來らざりしや」と問ふ。羅刹女は、牛魔王と見るよりも、走りよりて摑みつき、「我爺の罰あたり、怎麼情愿を忘れ、金睛獸を猴めに奪れ、渠爾が容と變じ、爰に來りて寶貝を尋ぬ。我那ぞ渠が變化なる事を知らんや。寔に爾の來れるぞと思ひ、寶貝を出したれば、那厮奪ひ取つて逃失せたり。實に吾悔くて死んとす」牛魔王が曰く、「爾且逼くことなかれ。我彼猴めを追ひかけて、忽ちに打殺し、皮を剥ぎ骨を割みて爾が爲に斷念すべし」と羅刹女が帯びたりし寶劍を把つて走り出で、火焰山の方へ追行きける。不多時行者に追付きけるが、行者は更に是を知らず、芭蕉扇を肩にかけて、怡顔悦色にて、三藏の居給ふ方へ急ぎ行く。牛魔王是を見て、今渠と戦ひたりとも、なかく容易くは返すべからず。倘却つて那厮我を搦ぐことあらば、八萬四千里を吹飛ばされて、愈難爲に及ぶべし。今先謀計を以て取返さん。唐僧の徒弟に八戒といふ者あり、是猪の妖精にて、昔日我出會ひてよく知れり。我今渠が容と變じ、此猴を欺くべし、と忽ち身を變じて八戒が模様となり、前へ回りに行者に向ひ、聲をかけて、「師兄奈何して遅かりしぞ。師父爾が歸りの久き故に、怕くは妖怪が手列大きにして、寶貝を奪ひ難く、倘難爲にや及ぶらん、

備行きて力を助けよ、と曰ひて故意々々吾を遣し給ふ」行者笑つて曰く、「管ず費心ふことなかれ。我已に扇を奪ひ來れり」牛魔王わざと嬉しき風情にて、「師兄怎麼して容易く奪ひ給ひしぞ」行者原よりの容子を件一に語りければ、牛魔王が曰く、「然らば師兄さぞかし勞れ給ひたらん。我今師兄に代りて扇を擔ひ候はん」行者怎生假的なる事を知らんや、頓て扇を八戒に付與しければ、牛魔王、何かは知らず口に咒文を唱へけるに、彼芭蕉扇にはかに縮み、杏葉の如くなりけり。此時牛魔王本相を現し、「潑猴我を認りたるや」行者驚き是を見に、是則ち牛魔王なりければ、亂跳他で大いに怒り、雷の若くに爆燥吼え、鐵棒を揚げて打つてかよる。牛魔王敢て戦を交へず、芭蕉扇を出して行者を搦ぐ。行者個より身に定風丹を帯びたれば一寸も揺かず、仁王立に成て渠が搦ぐに任せけり。牛魔王も又驚き、慌了まどひ、寶貝を口に入れて呑み、二個の寶劍を回して行者に伐つてかよる。行者も鐵棒を閃して相戦ひ、互に半空中に在つて、精心を抖搜し、惡戦する事三百餘合、更に卻く心もなく、命を限と闘ひけり。却て説、三藏は路の一邊に座し給ひ、火氣に蒸されて口渴き、心焦ちて忍び難く、土地神に對ひ、「我尊神に問ふ。彼牛魔王が法力と行者とは何か勝らん」土地神が曰く、「彼牛魔王神通廣大にして法力無邊。正に是孫大聖とは平手的の敵手ならん」三藏聞いて、行者は道を行く事に

なれて、三千里を往來する事暫時の間に有りと雖も、今日行きて一日に及び、未歸らず。必定牛魔王と戦ひ、勝つ事を得ざると覺えたり。八戒、備行きて師兄を迎へ、尙敵と戦ひ在らば、力を扶けて扇を借來れ」八戒領掌つて、「貧道行く事安しと雖も、此處の行路を知らず。願くは土地神と俱に行くべし。捲簾將軍は、師父の身邊に在つて是を守護し給へ」吾は今土地神を路開として大聖を尋ぬべし」三藏大いに喜んで是に隨ひ給ふ。土地神は八戒を伴ひ、南をさして急ぎ行く。斯る處に、忽ち空中に喚き叫ぶこゑ聞えければ、八戒驚き、雲頭に立つて是を見れば、行者と牛魔王と、爰に在て攻戦ひ、雲霧を發し、風を出し、火焰を散し、祕術を盡して争ひたる。八戒高く叫び、「師兄、我來つて戦ひを援るなり」と呼はりければ、行者八戒を見て、戦ひながらに喘はつて曰く、「吾一旦彼の扇を奪ひたりしを、此妖精、八戒に化來つて把返したり」と語りければ、八戒聞いて大いに怒り、「此潑牛、怎麼我模樣に變じ、師兄を欺きたるぞ」とて釘鉈を把て飛びかゝり、没頭没臉的に亂れ突く。牛魔王は、行者と戦ふ事既に一日、力勞れ弱りたる處に、今又八戒が釘鉈の兇猛を見て、竟に敗陣して、積雷山魔雲洞にぞ逃歸る。行者八戒、跡に續きて追蒐來り、洞の口にて追迫る。牛魔王取て返し、二人を相敵にわたり合ひ又散々に戦ひけり。玉面公主此物音に驚きて、許多の小的に命じて戦ひを援しむ。小妖的ども



牛魔王
悟空

命を受けて、個々鎗刀を回して打つて懸る。牛魔王大いに喜び、聲を發つて指揮すれば、一同に把圍み、餘さじとこそ責めたりけれ。行者は手足開く、竟に戦ひ善しからず。八戒も釘鉞を撃ずり、圍を破りて逃出でければ、行者も筋斗雲に打乗りて空中に逃昇り、土地神等と一處に集り、怎麼はせんと商量す。土地神が曰く、「大聖天蓬、怠慢する事なけれ。師父途に在つて待兼ね給ふ。個々再度洞門を破り、他と戦ひを交へ給へ。我又引領れし處の陰兵を以て、力を援け候はん」行者八戒、「尤なり」と云ひて、陰兵と一齊に、再度洞の門前に到り、行者鐵棒を揚げて門を微塵に打碎く。牛魔王は、玉面公主に始終の光景を説語り、少時足を休むる處に、忽ち行者門を破りたりと告來る。牛魔王驚き、又混鐵棍を把つて走り出で、行者八戒を相敵になして、相戦ふ事百餘合、竟に力盡き、敗北し、洞の中へ逃入らんとするを、土地神陰兵を卒ゐて洞の口を遮り止め、打入れじと防ぎければ、牛魔王又翠雲山へと逃行くを、行者八戒寸間もなく追迫れば、牛魔王身を遁れがたく、忽ち一隻の天鷲となり、虚空を差して飛昇る。八戒土地神等是を知ず、専ら彼是と尋廻る。行者笑ひて曰く、「爾們空中を飛ぶ者を見よ」八戒是を見て曰く、「是一隻の天鷲なり」行者曰く、「彼天鷲則ち牛魔王が變ぜしなり。我追蒐けて捉ふべし。爾們洞の裡に入つて小妖的を伐盡せ」八戒土地神是を聞いて、急ぎ洞中に伐つて入る。

行者は忽ち身を變じて一隻の海東青となり、空中遙に飛昇り、雲眼より逆様に落し來り、天鷲を捉へんと劈ひければ、牛魔王行者が變じたるを悟り、大鷹となりて飛來り、海東青を捉へんとす。行者是を見て、又鳳凰と變じて大鷹を掴まんとす。鳳凰は禽中の王たる者ゆる、牛魔王再度變する事能はず、頓て山の岸に飛下り、一疋の香獐と變じて、悠然として草を喰ひ居たり。行者是を悟り、虎に變じ駈來り、香獐を喰はんとす。牛魔王狼狽騒ぎ、急に大豹と化して虎を討たんと飛びかよる。行者是を見て又狻猊となり、大豹を目かけて駈來る。牛魔王かなはじと思ひ、忽ち黃獅と變じ、勃誇る聲は霹靂の如くにして狻猊を引裂き喰はんとす。此時行者地上に倒轉ぶと見えしが、竟に一疋の大象となる。鼻は長蛇のごとく、牙は箏に似たり。牛魔王堪へかねて、吃々と噴出し、終に本相を顯し、忽ち一疋の大白牛となり、頭は高き峰の如く、眼の光は雷光の如く、兩隻の角は兩座の鐵塔の如く、牙は利刃に似たり。頭より尾に至りて、長き事千餘丈、蹄より背上に至り、高き事八百丈、高聲に呼はつて曰く、「爾潑猴、今我を怎麼とするや」行者是を見て、同じく本相を顯し、大喝一聲するよと見えしが、身の高さ一萬丈、頭は泰山に似て、眼は日月の如く、口は恰も血池に等しく、牙は門の扇の如し。鐵棒を執て牛魔王を打つ。牛魔王角を以て是を架止め、兩個半山の裡に在つて散々に戦ひければ、寔に山も

崩れ海も湧返り、天地も是が爲に反覆するかと夥し。

此物音に驚き、常に空中に在りて唐僧を守護する處の諸神、金剛揭諦、六甲六丁、一十八位の護法伽藍來りて、牛魔王を取圍む。牛魔王不當とや思ひけん、再度眞の本相を顯し、翠雲山に逃歸り、芭蕉洞に入り、門を堅く關し、敢て出る事なし。此時列位の天神、行者と俱に追來り、翠雲山を取圍み、洞の中に攻入んと爲る處に、乍ち又一群來る者あり。是八戒と土地神們、陰兵を扯領れ、此處に押寄到る。行者曰く、「魔雲洞の光景怎麼なるや」八戒答へて曰く、「吾彼小妖的を伐盡し、玉面公主を殺し見れば、面白き狐なり。火を放て洞中を盡般燒捨てたり。此處にも又牛魔王が巢穴ありと聞きつる故、是をも尙打破り捨てんと思ひ、土地神と諸俱に故意故意爰まで來りしなり」行者曰く、「此處、羅刹女が巢穴にして、芭蕉洞と云ふなり。牛魔王今此裡に逃入りたり。吾們早く伐入らん」と云へば、八戒も心得たりと、兩個一齊に鐵棒釘鉞を掣展べて、洞門を打破る。牛魔王は、羅刹女に逢ひて、行者と戰の光景を説語り居る處に、行

三編 卷之四

○前章之下

此物音に驚き、常に空中に在りて唐僧を守護する處の諸神、金剛揭諦、六甲六丁、一十八位の護法伽藍來りて、牛魔王を取圍む。牛魔王不當とや思ひけん、再度眞の本相を顯し、翠雲山に逃歸り、芭蕉洞に入り、門を堅く關し、敢て出る事なし。此時列位の天神、行者と俱に追來り、翠雲山を取圍み、洞の中に攻入んと爲る處に、乍ち又一群來る者あり。是八戒と土地神們、陰兵を扯領れ、此處に押寄到る。行者曰く、「魔雲洞の光景怎麼なるや」八戒答へて曰く、「吾彼小妖的を伐盡し、玉面公主を殺し見れば、面白き狐なり。火を放て洞中を盡般燒捨てたり。此處にも又牛魔王が巢穴ありと聞きつる故、是をも尙打破り捨てんと思ひ、土地神と諸俱に故意故意爰まで來りしなり」行者曰く、「此處、羅刹女が巢穴にして、芭蕉洞と云ふなり。牛魔王今此裡に逃入りたり。吾們早く伐入らん」と云へば、八戒も心得たりと、兩個一齊に鐵棒釘鉞を掣展べて、洞門を打破る。牛魔王は、羅刹女に逢ひて、行者と戰の光景を説語り居る處に、行

者八戒亦門を打破しと聞いて、大いに怒り、寶貝を口より出し羅刹女に付與し、二口の劍を拵提け、門外に跳り出で、再度行者と八戒を相敵に做し、五十餘合を戦ひける。列位の神兵們、牛魔王を取圍み、漸々に攻寄る。牛魔王四面八方都て敵にして、遁るべき道無きを恐れ、雲に乗つて天に昇る。爰に又托塔天王哪咤太子、照魔鏡を把つて空中に立ち、「牛魔王靜に來れ。我門如來の佛勅を受けて、爰に來つて爾を待つ事久し」牛魔王照魔鏡に照されて、又忽ち大白牛と成て、角を將て尖的かよる。李天王劍を振つて少時戦ひ居給ふ處に、行者八戒雲を分けて趕及到る。哪咤太子兩個に向ひ、「吾們來つて大聖等を援けて牛魔王を退治す。當今其功を見すべし」と云より疾く、彼白牛の背に閃りと飛乗り、火輪兒を把つて牛魔王が角の上に打蒐け、口より眞火を噴下け給へば、忽ち火焰烘々と燃昇り、牛魔王が身を燒きければ、牛魔王苦困叫び、頭を振り尾を搖し、又變化して身を遁れんと狂ひけれども、李天王の照魔鏡に照されて、再度變する事能ず。今は遁るよ計策盡きて、「天王我が一命を助け給へ。我佛道歸依すべし」と叫びければ、哪咤太子曰く、「爾命惜ば、快く芭蕉扇を遞與すべし」牛魔王が曰く、「芭蕉扇は、我渾家羅刹女に預置きたり」哪咤太子是を聞いて、急ぎ縛妖索を以て牛魔王が鼻穴へ串住し、悟空們と諸俱に翠雲山に到り、芭蕉洞に推寄る。牛魔王聲を發けて、「夫人趕く扇を持來りて、我命

を助けよ」と呼びければ、羅刹女は驚き、急に扇を把つて門外へ越り出で、頭を地に當てて拜伏し、「天神吾們夫婦が罪を免恕給へ。當今扇を孫叔に借して其功を助くべし」と芭蕉扇を指しければ、行者懽喜び受取りて、列位の神兵佛兵と諸俱に、三藏の居給ふ處へ急ぎ行く。却説三藏と悟淨は、行者が音信を待居る處に、看々祥雲虛空に滿渡り、瑞光忽ち滿地を照す。三藏是を見て恐れ戦ひ、「悟淨、爾彼を見よ。那里よりか許多の神兵來れるなり」悟淨是を能く認得りて、「師父恐れ給ふ事なけれ。是は如來の勅によりて、常に師父を守護し給ふ處の四大金剛、金頭揭諦、六甲六丁、護法伽藍、牛を牽きしは哪咤太子、鏡を把りしは托塔天王、李天王、大師兄は扇を持ち、二師兄は土地神と後に違ひ、其餘は都て護衛の神兵なり」三藏聞きも敢ず、毘盧帽子を頂き、金欄の袈裟を穿け、地上に拜す。此時諸神降り、四大金剛三藏に向ひ曰く、「我佛勅を受來り、汝が難を救ふなり。爾力を盡して大願を成就せよ。管ず怠る事なけれ」三藏頭を地に著けて、「弟子何の徳か有て、尊聖の降臨を惠み給はる事、太も畏く候ひぬ」と幾度か拜謝し給ふ。斯て行者は、芭蕉扇を把つて火焰山に近著き、力を極めて一度搦けば、平々として、火焰やみ、再度搦けば蕭々として清風を發す。三度搦けば黒雲四方に起り、霏々として細雨を降す。三藏炎熱の氣を忘れ、頓ち心清々たり。此時四大金剛、托塔天王父子、其外諸位

の神兵、三藏に別れ、牛魔王を牽立て天上に還り給ふ。土地神は羅刹女を引居て、一邊に伺候すれば、羅刹女拜伏して曰く、「大聖功終ての上は、扇を我に給はりて、身を治め性を養せ給へ」行者が曰く、「我聞く、此山火治ると雖も、五穀殖る後又火焰發るとかや。今怎麼せば火の根を除き、此處の生靈をして安く性命を養しめんや」羅刹女が曰く、「火根を除くと欲せば、列て四十九扇搦ぐ時は、永世火發る事有べらかず」是を聞て行者扇を把て列て搦ぐ事四十九扇。乍ち涼涼として大雨降り、終に火根消滅して、永々火焰發る事なく、地方の生靈安穩なる事を得たり。行者扇を羅刹女に返せば、羅刹女は拜謝して洞に歸り、靜に身を修行して、後竟に正果を得しとかや。斯て行者が黨們三個は、三藏を馬に乗進せ、土地神に禮を施し別を告げ、身體涼々として足下滋潤たりければ、些少の煩もなく、終に八百里の火焰山を越え、尙西方に向て急ける。

○滌垢洗心唯掃塔

縛魔歸正乃修身

去程に三藏師徒は、火焰山を越えて、猶西方に急ぎ給へば、早秋も暮れ、冬の首に推移り、忽ち一座の城地有る處に到る。三藏の曰く、「是管す一國の王城ならん。吾們城に入りて關文を換ふべし」とて馬を前めて行き給ふ。六街三市寶を列ね財を積み、人は衣冠を正うして、光景忒

だ爽かなり。爰に十餘人の和尙有りて、家々の門に立ち、經を讀み齋を乞ふ。三藏此和尙們を見るに、怪むべし、都て皆首枷手鎖を入れたり。三藏嘆息して曰く、「兎死する時は狐悲しむと云へり。獸すら尙其類を思ふ。我も同じ沙門の身にて、怎生彼を見て悲まざらんや」と、行者に命じて其謂を問はしめ給ふ。悟空彼和尙們に向ひ、「爾們、何方の沙門にて、又何等の罪有りて、斯ごとく首枷を蒙りたるや」彼和尙們跪下いて曰く、「此處に金光寺と號す寺あり。吾們は其寺に居住する處の沙門にて候が、今冤屈の難に偶ひて、斯のごとく苦み候」行者また其仔細を訊ぬれば、和尙們が曰く、「此處は談話すべき處にあらず。列位吾荒山に來り給へ。一個には一夜の御宿をも勤べし。二個には我們が困苦をも談話り候はん」三藏師徒是に遵ひ、和尙們と打連れて山門に到り給へば、門に一篇の額あり「勅建護國金光寺」と云へる七個の金字を鐫付けたり。三藏門を入りて、正殿に到り佛を拜し、方丈に入り給へば、柱の下に六七個の和尙を縛めて、首枷手鎖を入置きたり。三藏深く疑ひ怪み、且悲みに堪へず、嘆息して居給ふ處に、衆部の沙門三藏の前に拜伏して曰く、「尊師徒に問奉る事あり。列位の尊相貌、此國の人に非ず。尙や東土大唐より來らせ給ふ聖僧には御座すや」三藏の曰く、「諸は爾等徳廣大にして先知の法あり。能吾們が本國を悟り知りたるや」衆僧の曰く、「我們先知の法なしと雖も、屈冤の罪を受

るや」行者が曰く、「十三層の高さあり」三藏の曰く、「長安を出でしより以來、未だ斯る數層の寶塔を見ず。我今身心勞れぬと雖も、勤て是を掃ひ竟り、本願を果すべし」と又三層を掃ひ給ひ、終に十層に到りて伏倒れ、腰痠え股痺れ、進退極りて動く事能はず。悟空を呼んで曰く、「汝今より我に代りて、残る三層を掃ふべし」行者命を受けて帚を請取り暫時に二層を掃ひ終り、第十三層に到れば、爰に何個か在りて談話の聲す。行者怪く思ひ、斯る塔の頂上に、人の登るべき謂れなし、必定妖怪の處爲ならん、と終に帚を捨て、塔の窓より潛り出で、雲を踏んで伺ひ見るに、第十三層の塔中に、二個の妖怪對座して、拳を打ち酒を喫み居たり。行者鐵棒を把つて塔門を遮り、大いに叱つて曰く、「爾奈何なる妖怪なれば、塔中の寶貝を奪ひたるや」彼妖怪是を聞いて慌忙驚き、駈出んとする處を、行者塔門に立つて敢て逃さず、飛入りて捉んとすれば、妖怪は塔の壁に扯着いて動き得ず、只管叫んで曰く、「吾命を助け給へ。我々が知りたる事には非ず」と云ふ。行者件一抓攔み、第十層まで扯下し、三藏の前に引居る、一師父彼寶貝を偷みたる妖怪を捉へたり」と呼はりければ、三藏此時座睡して居給ひしが、此聲に眼を開きて曰く、「爾何處より捉へ來りしぞ」行者曰く、「我師父に代りて塔を掃ひ、十三層に到る處に此妖怪拳を打ち酒を喰ひ居たりし故、則ち捉來りしなり」三藏喜んで妖怪に向ひ、「爾は那里よ

り來りし妖怪にて、寶貝を盗み何處へ隠し置きたるぞ。具に自首いたすべし」妖怪ども戰々兢兢、「我々は亂石山碧波潭の萬聖龍王が遣す處の、塔を護るの官人なり。一個は奔波兒潮と云ひて鮎魚の妖精なり。一個は瀾波兒奔と號けて黒魚精なり。我が萬聖龍王、獨の娘を持ち、名を萬聖公主と云ふ。頗る花月の容貌あり。向年九頭駙馬を掣となす。龍王喜びに堪へず、彼夫婦を慰めんと、世に稀なる寶貝を需る處に、此金光寺の佛舍利の事を聞出し、三年前の秋の頃爰に來り、塔の上に血を降し金塔を汚し、終に佛舍利を奪ひ取り、又大羅天上に到り、靈虛殿に忍び入り、王母娘々の九葉の靈芝艸を盗み、公主に與へ、宮中に深く隠し置きぬ。此故に、二品の寶貝は金光彩霞を放ち、實に妙なる光景なり。然るに近頃、三藏といふ者在て西天に到り經を取らんとす。渠が徒弟に悟空といふ者あり。専ら人の惡事を糺し、正を扶け邪を罰すと聞く。渠尙爰に來り寶貝を穿擦する事も有んか。倘然る事有らば趁早に告知らせよ、とて吾們兩個を遣し給ひしなり」行者打笑ひ、「彼孽畜、向日牛魔王を呼んで筵宴をなしつるが、這厮も又箇様の惡事をなすや。我件一に詮議をすべし」此時八戒、一三人の和尚に燈燭を熾させ、塔上に登り來り、「師父塔を掃ひ畢らば、疾く歸り安歇み給へ。爰に在て何を説話し給ふや」行者聞いて、「能き處へ來りたり。彼寶貝を盗みたるは萬聖龍王なるよし、當今此妖怪が自首に及び



たり」と首尾を説りければ、八戒聞いて、「妖怪を捉へたらば、那ぞ早く殺さざるや」行者曰く「少時渠們を生しおき、國王の前に引出し、其照驗と做して後、渠們を路開として儉個を捉へ、寶貝を把返さん」八戒「尤なり」とて、行者と俱に個々妖怪を搔擗み、和尚們と連れて、三藏を助け塔を下りて寺中に歸れば、衆部の僧出迎へて、此事を聞きて大いに喜び勇みける。行者鐵索を以て彼妖怪を縛め、琵琶骨を穿つて再び變化する事を免さず。衆部の沙門に命じて護しむ。沙門等妖怪を一室の裡に推籠め、厳しく保守りて夜明に及ぶ。

斯て三藏は、行者を伴ひ、金光寺を立出て王城に到り、黃門官に見え禮を正うして曰く、「我々は東土大唐より西天に到り經を求るの僧なるが、今日大國に來り、國君に見えて關文を換ん事を願ひ候。大人宜く是を傳奏し給へ」黃門官斯と國王に奏聞す。國王是を聞いて三藏師徒を宣入れ給へば、三藏は行者と俱に階前に到り、山呼の禮終りければ、國王三藏を殿上に召して座を給ふ。三藏は關文を捧げければ、國王是を採つて讀終り、三藏を顧みて曰く、「爾が大唐王、よく高僧を選び、路の遙なるをも厭ず、佛を拜し經を求めしむ。我國の沙門は、専ら盜道をなし、國を傾け君を廢す」三藏其故を問へば、國王の曰く、「金光寺の僧、金塔の寶貝を偷得しより以來、諸國更に來朝せず。吾深く是を恨とす」三藏是を聞いて曰く、「陛下誤つて罪なき

金光寺の僧們を苦困め給ふ。彼寶貝は、亂石山碧波潭の萬聖龍王が盗みし處なり。昨夜貧道搭上にて二個の妖怪を捉へ候」國王驚いて其故を問ふ。三藏謹んで首尾の動靜を仔細語り給へば、國王大いに喜び、「然らば今より武官に命じて、妖精を捉來らすべし」三藏の曰く、「武官を用ひ給ふに及ばず。貧道が大徒弟に孫悟空と云ふ者、よく妖魔を伏し候。萬般他に命じ給はゞ、決して過失無るべし」國王聞いて、「其大徒弟今那里に在るや」三藏行者を呼び給へば、行者進み出て國王に見ゆ。國王行者が姿を見て、是凡體ならずと思ひ、頓て彼妖怪を捉來るべきよしを命じ給ふ。行者領掌つて階前を退き、金光寺に到り、八戒悟淨に命じて、妖怪を一個づつ扯出させ、三個打連て城中に到り、二個の妖怪を階前に扣居るければ、國王首め文武の百官、彼妖精を見るに、一個は尖りたる嘴、荒れたる牙、利にして甲黒く、是則ち黒魚の妖精なり。一個は皮滑にして腹大きく、口黒くして髭長く、是則ち鮎魚の妖精なり。足ありて能く歩行き、大體は人の形に變化たり。國王始終のことを訊ね給へば、二個の妖怪仔細に是を自首す。國王頓て金光寺の僧を殘なく赦されけり。然して殿上に筵宴を設け、三藏師徒を厚く接待し、國王又謂て曰く、「何の御徒弟なりとも央み、彼龍王を亡し、寶貝を把返したく思ふなり。願くは師父是を免さんや」三藏の曰く、「悟空と八戒兩個に命じ候はん」行者八戒進出て國王

に向ひ、「吾們二個駝向ひ、彼妖怪を亡し、寶貝を把返し來るべし」國王曰く、「爾們何程の人馬を用ひて妖怪を捉ふるや」八戒が曰く、「那ぞ人馬を用ふるに到らんや。我酒を喫み飯を喰ひ、師兄と俱に駝向はど、手の下に彼龍王を捉ふべし」國王大いに喜び、嚮に捉へし二個の妖怪をして路開做せ給へば、行者八戒乍ち雲に打乗つて那里ともなく飛去りけり。國王初め衆位の官人ども大いに驚き、天に向ひて拜をなし、三藏を老佛と唱へ、悟淨を菩薩と稱し、只恭敬ひかしづきけり。

○二僧蕩怪 鬧龍宮 群聖除邪獲寶貝

行者八戒の二人は、亂石山碧波潭に到り、彼二個の妖怪に謂て曰く、「爾等先へ行きて、龍王に告すべきには、我は是聖天大聖孫悟空なり、金光寺の寶貝を拿返さん爲に來れり、趁早に返さば龍王の命を助くべし、倘些少にても遅くならば、水中に打入りて悉く塵に做すべきなり。疾此由を龍王に告げて寶貝を返させよ。其代りに爾們によき錢別を取らすべし」と鐵棒を把出して、口より仙氣を噴かけ、一箇の戒刀となし、二妖の耳と鼻を剗落し、水中に投入れければ、二個の妖怪不思議に命を助り、疼を忍びて宮中へ駝返り、龍王の前に走り出で、「大王、大

事あり大事あり」と呼はりける。老龍王と九頭駝馬と筵宴を催し在りけるが、是を聞いて、「何事なるぞ」と訊ぬるに、兩個の妖怪首尾を仔細語り、「當今かの孫悟空、金光寺の寶貝を拿返さんとて、嚴く吾們を攻呵責み候なり」と告げければ、龍王一度孫悟空の三字を聞くより大に駭き、戦々兢々騒ぎければ、九頭駝馬是を見て大いに笑ひ、「大岳煩惱し給ふな。我幼き時より武藝を學び、四海の豪傑と交りを結ぶ。那ぞ彼弼馬溫を怕れんや。我今彼悟空を掴み來るべし」と一口の月牙鏟を把つて水面に跳出で、大いに呼つて曰く、「彼弼馬溫は何れに在りや。我金光寺の寶貝を盗みたりとも、汝が管る事にあらず。怎生吾小的に疵付けたるや。趁く來りて我が手列を見よ。但し爾等吾威勢に怕れて腰が抜けて來らぬか」と大音に語りける。行者大いに怒りを發し、「汝寶貝を盗んで金光寺の僧們を苦困ましむ。我們同じ沙門なり。那ぞ餘處に見捨んや。且又今の惡言聞捨てがたし。死を知らぬ獣子よ」と鐵棒を水車に回して打てかよる。九頭駝馬も戟を振つて跳り蒐り、兩個亂石山の中に在つて、三十餘合相戦ふ。八戒釘鉈を打振つて行者を助けて戦ひければ、九頭駝馬當ひがたく、空中に飛昇り、本相を顯しければ、九箇の頭有りて、其形の兇惡なるを見て、八戒怕れて逃んと做を、駝馬の妖怪翅を伸べて飛係り、八戒が駝を引抓かみ、水中へ扯入れたり。斯て妖怪、原の姿に變化して龍王の前に到

り、八戒を地上に投著け、「夫搦めよ」と呼びければ、衆部の小妖的走り倚つて、八戒を網縛める。老龍王大いに喜び、「駙馬どの、功績々々」と稱揚し、酒を勧めて勞を歇しむ。此時行者は、八戒が生擒れたるを見て、急に亦蟹と變じて水裡に潛り入る。原來此處は、牛魔王と戦ひし時來りて、路開はよく知たれば、立地に宮裡に這登り、彼是と伺ふ處に、許多の小妖的集りて遊び居る處あり。行者近く這ひよりて、「向に駙馬大人の捉來り給ひし背の長き和尚は、未だ死すして在りや」と問ひければ、小妖的が曰く、「未だ死す。則ち廊下に在り」行者聞いて、頓て廊下に這到り見れば、八戒は柱に網縛められて在り。四方に人語なきを伺ひ、終に網縛を咬斷りける。八戒繩を抜出でて大に喜び、「師兄、我釘鉈を這斯に取れたり。怎麼して拿返さん」行者是を聞いて、「爾一邊に隠れて少時待つべし。我穿擦ねて取來らん」とて隱身の法を行ひ、宮中に入つて伺ひ見るに、彼方に釘鉈を立かけ置きたり。行者密に奪ひとり、八戒が隠れ在る處へ歸來り、釘鉈を遞與しければ、八戒大いに喜び、「師兄、且水面に出て待ち給へ。我彼妖怪を偽引出さん。其時師兄彼を打殺せ」行者點頭き、心得たりと、竟に水面に走り出て待窺ふ。八戒は釘鉈を把つて宮裡に跳り入り、桌椅家伙の類、盡般打碎く。老龍王と九頭駙馬は、事の急なるに狼狽廻り、何の差別なく唯逃昏亂うて騒動す。八戒は手をも止めず、四面八方に打

て廻る、恰も無人境に入るが若し。龍王と駙馬は、漸々に心を楚め、手に手に利鋒を挈けて、衆部の水怪、龍子龍孫を從へて、八戒獨を取圍む。八戒よき程に戦ひて、時分を見合せ逃出る。妖怪どもは、遁さじと水面まで追來る。待設けたる行者が鐵棒、些少も猶豫ず、跳りかよつて老龍王が頭を打てば、熱柿の若くに打破られ、腦水滾々りて死したりけり。九頭駙馬は勢の善らざる見て、敢て戦はず、龍王の死骸を收りて水裡に歸りける。行者八戒も又是を追はず、岸の一邊に座して少時歇み居たりける。斯る處に、東の方より狂風滾々と發り、南を指して行くものあり。行者頭を擧げて伺ひ見れば、二郎顯聖、梅山六兄弟と、鷹を居る犬を牽き、雲霧に隨ひ行き給ふ。悟空八戒に向ひ、「爾彼を看よ。梅七聖兄弟なり。侍僮に當今央みて我が力を助けしめん」八戒聞いて、「是然るべし」と、急に雲に打乗り空中に追到り、「眞君少時車馬を止め給へ。我兄弟爰に在りて見え奉り度幹あり」二郎眞君是を聞いて、八戒と打連れ、康張姚李郭眞の六兄弟を引牽して、降り來りて行者に見ゆ。行者禮を行ひて首尾の動靜を語り、「萬望は眞君力を助け給へ」二郎眞君是を聞いて、「我今日獵に出て此處を過り、侍僮にして大聖兄弟に見え、戦を助けよと央るよ。懼喜那ぞ是に過ぎん。今より力を添へて妖怪を退治すべし」八戒が曰く、「我且水裡に討

入つて妖怪を偽引出し來らん」とて釘鉈を撃つて又水裡に潛り入り、宮裡に飛込みければ、龍婆龍子龍孫等は、龍王の死骸に取著き歎き臥して前後を覺えず。九頭駙馬一邊に在りて棺材を取納れて、爰に八戒が來るを知らず。八戒忽ち龍子を捉へて唯一突に突殺す。龍婆大いに駭き、「彼和尚又來つて我子を殺せり」と叫びければ、九頭駙馬鞍を拿つて龍孫と俱に八戒に打つてかよる。八戒又戦ひ負けて水面に逃出る。妖怪どもは、遁さじと潭の邊まで追ひかけ來る。一邊に隠れ在し二郎七星、大聖と俱に跳出で、刀鎗を廻して電光の若く伐立てけるにぞ、龍孫は五體微塵に切碎かれ、立地に死したりける。九頭駙馬是を見て、本相を顯し、九箇の頭を伸べて、翅を發き飛廻り、件一に喰ひ殺んと動きける。二郎真君金弓に銀彈を挿み、妖怪を劈ひ切て放てば、過たず右の翅を射申きたり。妖怪翼を射破れて、山の半腹に落ちけるが、忽ち又頭を伸べて二郎真君を喰んとする。真君の犬と鷹、飛係つて是を嚙碎く。妖怪増々大疵を負ひたれば、今は力も弱り果て、命一個を助らんと、去方しらす逃失せける。八戒是を追はんと爲るを、行者扯住め、「窮寇は追ふ事なかれと云へり。寶貝さへ取返さば、這廝を殺すに及ぶべからず。我今謀計を以て寶貝を拿返し來るべし」と、忽ち九頭駙馬が容と變じ、八戒を引領れ水裡に潛り入り、宮中に駈入りければ、萬聖公主出迎へて眞の夫と思ひ、「吾君怎生慌忙て歸り給

ふや」行者曰く、「彼八戒今又爰に來るなり。儂早く寶貝を拿來れ。我深く藏し置くべし」公主事の急なるに狼狽へ、行者が化けたるとも悟らず、頓て一箇の金匣子を取り出し、「是はこれ佛舍利なり」又一箇の白玉匣を取り出し、「是は則ち靈芝艸なり。君よく收めたまへ」行者二品の寶貝を受取り、本相を現し、「儂吾を認得りたるや」公主行者を見て大に驚き、奥へ逃んとする處を、八戒釘鉈を撃つて跳り出で、唯一打に討殺す。行者は奥に駈入りて龍婆を生捉り、竟に二品の寶貝を捧げ、八戒と打連れて水面に立返り、二郎真君に見え、水裡の動靜を説り、禮をのべ拜謝すれば、真君も別を告げて灌江口に歸り給ふ。行者と八戒は、寶貝を携へ龍婆を撃立て祭賽國へ立歸り、國王の階前に到り、此由を奏しければ、國王はじめ金光寺の僧輩も、三藏師徒四個を拜し、懽喜ぶ事限りなし。行者國王に對ひ、「早く寶貝を塔中に納め、龍婆を塔上に捉へおき、永く寶貝を保守しめ給へ」國王然るべしと懽喜び給ひ、文武の官人許多從へ、三藏師徒四人を伴ひ、金光寺に急ぎける。此時行者悟淨を呼びて、「儂今より大羅天上に到り、王母娘々の寶貝、九葉靈芝艸を靈虛殿に納め來るべし」と命じければ、悟淨心得、雲に駕りて空中遙に去行きけり。斯て國王と三藏師徒は、金光寺に到り、行者に命じて寶貝を納めしむ。行者命を受けて、佛舍利を捧げ塔に登り、第十三層の上に到り、瓶中に是を納め、鐵索を以て龍婆

を塔中に搦め著け、琵琶骨を穿つて逃る事を許さず。眞言を念て國の土地神を呼出し、亦本寺の伽藍神を呼びて、「僮們三日に一度つづ飲食を贈りて、此龍婆を養ふべし」列位の神、命を受け領掌つて退きける。行者寶貝を安置して塔頭を下りければ、忽然に原の如く、塔の頂上赫然として、霞光萬道に發り、瑞氣千條に現る。國王塔上を望んで拜し伸眉び、金光寺を改めて伏龍寺と號し、駕を還して宮裡に還行り給ふ。此時悟淨も、靈芝艸を靈虛殿に納め、大羅天上より廻りければ、國王増々歡喜に堪へず、大いに筵宴を開きて三藏師徒を接待し給ふ。斯て三藏は、早く西方に進まん事を願ひ給へば、國王頓て關文を倒換め、若干の黄金を三藏們に贈り給へども、三藏師徒一毫も受けず。國王詮方なく、四個に衣帶鞋襪乾糧のたぐひを贈り給ふ。三藏師徒厚く拜謝して是を受け、別れを告げて立出でければ、文武の官人、伏龍寺の僧輩、遙遙と二十里の道を送り行き、竟に別れて城中に歸り入る。伏龍寺の僧達は、大恩を感じ別るゝに忍びず、又六十里を送り行き、涙を流して別れけり。三藏四個の者どもは、祭賽國を跡になし西方に向ひて急ぎけり。

三編 卷之五

○荆棘嶺悟能努力

木仙菴三藏談詩

此時冬盡き春も半に推移り、三藏師徒道を急ぎて進む處に、忽ち長く續きたる嶺あり、荆棘參差と生茂り、薛羅牽繞と這纏る。其下に些少の路の形は残りりと雖も、左右都て刺針の棘なれば、一步も前む事能はず。行者是を見て、「老孫此山の光景見て來るべし」と頓て空中に飛昇り、四方を伺ひ、少時有て下り來り、「此山の行程千里計も有るべし。皆斯の如き荆棘なり」三藏大に驚き、「然らば怎麼して此山を越ゆべきや」八戒曰く、「師父管ず氣遣し給ふな。老猪よく道を開くべし」と頓て印を結び、眞言を唱ふれば、其丈二十丈計の姿となる。亦釘鉈を取て打振れば、三十丈の長となる。八戒師父を呼んで曰く、「吾に續きて前み給へ」と兩手にて釘鉈を把り、荆棘を搔除れば、一釘鉈に二十間三十間程づつ搔除くるにぞ、三藏大に歡喜び跡に着きて前み給ふ。悟淨は行囊を荷ひ、行者は鐵棒を擧つて道を開くの助をなす。行々百餘里を進む處に、既に天晩に及んで、忽ち一箇の石碣を見る。上に「荆棘嶺」の三字を刻み、其下に

十四字の小字あり。「荆棘蓬攀八百里。古來有道少人行」と有りければ、八戒打笑ひ、「吾是に兩句を添へて後の照驗と做すべし」とて筆を出して書寫し、釘鉞の刃を以つて彫著けたり。其二句に曰く、「自今八戒能開破。直透西方一路盡平」と。三藏欣然として懽喜び、馬より下りて八戒を謝し給ひ、「今宵は此處にて夜を明し、翌又疾く往くべし」と云ひければ、八戒が曰く、「師父、斯る深山に住り給ふ事なかれ。今宵は月も明かなれば、連夜に進み給ふべし」と、又釘鉞を把つて棘を拂ひ道を開く。三藏是に抖擻されて、又夫より道を跑り、師徒更に手をも住めず足をも休まず、馬は蹄を鳴しつゝ、竟に一晝夜を駈せ給ひ、亦此日も暮に及びて、看々一座の古廟あり。乍ち一陣の陰風發り、廟の後邊より一個の老人、青臉紅鬚、赤身獠牙なる一個の鬼使に、一盤の麵餅を齎せ出來り、三藏の前に跪下きて言ひけるは、「寡人は此荆棘嶺の土地神にて候。師徒道を駈せて飢ゑ給ふを悟り、麵餅を捧けて飢渴を助け奉らんとす」八戒是を聞いて喜び、既に取らんと爲る處を、行者叱つて、「懶漫りに近づく事なかれ。此老者曾て好人に非ず」と。又老者に向ひ言つて曰く、「汝何者なれば、我師父を誑惑んとするや。且我一棒を喫うて見よ」と鐵棒を把出す。彼妖怪行者に見顯はされ、忽ち一陣の怪風と成りて三藏を拖摟ひ、去方知らず成りにけり。行者們三個の者供は、慌忙騒げども詮方なく、指

方も無しに尋ね搜す。

三藏は彼老者に摟ひ去れ、一箇の石崖の下に到り、三藏を下して老者が曰く、「我は曾て人を害する者に非ず。此荆棘嶺に年を経て住居する十八公と呼ぶ者なり。今宵月清して風靜なれば聖僧を迎へて友を會し、詩を吟じて散悶をせんと爲るのみなり」三藏更に人心地もなく、打戦ひてぞ居たりける。老人が曰く、「且吾菴へ入り給へ」とて手を拿つて勞册るにぞ、三藏は恐怖立上り、石屋に向ひ給へば、門の上に文字あり、「木仙菴」と寫著たり。裡に入りて座し給ふ時、乍ち外面に聲有つて、「十八公、聖僧を請來りしや」と云ひて入來る者あり。三藏是を見給へば、是三個の老者にて、其容貌尋常ならず。一齊に入て禮を施す。三藏も禮を返して曰く、「貧道何の徳かあつて、仙翁の下愛を蒙るや」十八公笑つて曰く、「寡人們、聖僧の道ある事を聞及びて、爰に待つ事年久し。僥倖に今日爰に覩る事を得たり。懽喜何ぞ是に過ぎんや」三藏の曰く、「萬望は仙翁の大號を示し給へ」十八公が曰く、「一個は孤直公、一個は凌空子、一個は拂雲叟と號す。寡人が號を勁節と號し候」三藏聞いて又問うて曰く、「列位老壽幾句ぞや」此時孤直公が云く、

我壽今經千歲古

携天葉茂四時春

香枝鬱々龍蛇狀

碎影重重霜雪身
烏棲鳳宿非凡輩

自幼堅剛能堪老
落落森々遠俗塵

從今正直喜修真

凌空子笑つて道ふ、

吾年千載傲風霜

高幹靈枝力自剛

夜靜有聲如雨滴
受命尤宜不老方

秋晴陰影似雲張

盤根已得長生訣

留鶴化龍非俗輩

歲寒虛度有千秋

老景瀟然清更幽

不襟囂塵終冷淡
六逸爲朋共唱酬

飽經霜雪自風流

七賢作侶同談詠

勁節十八公笑つて道ふ、

我亦千年約有餘

蒼然貞秀自如々

堪憐雨露生成力
四時洒落讓吾疎

借得乾坤造化機

萬壑風烟惟我盛

三藏是を聞いて賞謝して曰く、「列位容形清くして亦奇なり。且道を得て高年に到る。若や商山の四皓にはあらざるか」

四個の老者答へて曰く、「過たる尊言、唯疼み入るのみなり。我々商山の四皓にあらず、深山の四操なり。豫て聖僧の詩才神妙なるを承り、今宵請來つて吟哦をな

し、些少心を慰めんと思ふなり」

此時一箇の赤鬼、一盤の茯苓膏と五盞の香茶を奉る。三藏怖

れ疑ひ、漫りに吞まず。四個の老者、一齊に是を喫して、更に餘念なきを見て、三藏漸々に落

著き、二箇の茯苓膏を喫し、香茶を飲み、密に座中を見給ふに、滿堂清麗にして雅致あり、些

少も塵埃を知らず。十八公が曰く、「聖僧原來有道の詩人なり。萬望は一律を賦し給へ」

三藏

今は止む事を得ず、一律を吟じて曰く、

杖錫西來拜法王

願求妙典遠傳揚

金芝三秀詩壇瑞

寶樹千花蓮蕊香

百尺竿頭須進壽

十方世界立行藏

修成玉像莊嚴體

極樂門前是道場

四老聞卒つて大に是を賞讚す。十八公が曰く、「寡人無能なりと雖も、大膽に今一首を和せん」と、

勁節孤高笑木王

靈椿不似我名揚

山空百丈龍蛇影

泉祕千年琥珀香
衰殘自媿無仙骨
孤直公も又和して曰く、

鮮與乾坤一生氣槩
惟有芥膏結壽場

喜因風雨化行藏

霜姿常喜宿禽王
風輕石齒碎寒香
元日迎春會獻壽

四絕堂前大器揚
長廊夜靜吟聲細
老來寄傲在山場

露重珠纓蒙翠蓋
古殿秋陰淡影藏

凌空子同和して曰く、
梁棟之才近帝王
晴壁尋常度翠香
凌雲蓋世婆娑影

大聖宮外有聲揚
壯節凜然千古秀
不在群芳艷麗場

晴軒恍若來青氣
深根結矣九泉藏

洪澳園中樂聖王
斑箏堪傳漢史香
子猷去世知音少

渭川千畝任分揚
露葉年年顏不改
亘古留名翰墨場

翠筠不染湘娥淚
霜柯代々節難藏

三藏聞いて、「仙翁の詩、個々玉を吐き錦を列ぬ。吾實に懽喜に堪へたり。今夜既に更たけぬ。三個の徒弟們那里に在りて我を待つべし。萬望は仙翁吾に道を教へて歸る事を免し給へ」四老笑つて曰く、「聖僧心を勞め給ふな。夜明けなば自ら御弟子輩に逢ひ給ふべし」三藏尙も別を告げんとし給ふ處に、忽ち外面の方より入來る者あり。三藏是を看給ふに、絶奇なる衣裝を著繞たる一個の仙女、兩個の女童に絳紗の燈籠を捧げさせ、濟然として入來る。四老出迎へて曰く、「杏仙怎麼して來れるや」仙女笑喜を含んで曰く、「今宵佳客の來臨ありと聞き、故意々々來りて相見え奉るなり」十八公三藏を指して、「佳客則ち爰にあり」三藏身を屈めて仙女に禮をなし、敢て言を交へ給はず。仙女十八公に向ひて、「今宵の盛會、極めて佳吟多かるべし。其二二句を示し給へ」拂雲叟が曰く、「我們詞僮くて又更に赤面す。唯聖僧の妙句、實に盛唐の風調にして、是を誦して個々羨むのみ」仙女が曰く、「萬望は其妙句を教へ給へ」四老同口に三藏の詩を述べて聞せければ、仙女滿面に笑を含み、三藏に向ひて曰く、「自ら不才にして聖僧の妙句に答へ參せんは怕ありと雖も、斯る佳作を聞きつるからに、唯に止むべきも無禮に似たれば、鄙も一句を述べて是を和し奉らん」と乍ち一律を吟じて曰く、

上苑名高衆卉王
泗濱壇坫共稱揚
董仙偏愛春林陰



孫楚會吟寒食香

雨潤紅姿嬌且艷

煙蒸翠色顯還藏

自憐過熱微酸意

落處年年伴麥場

四老此詩を聞いて、「是清雅にして佳吟なり。且句の中に春意を含めり」仙女答へて、「恐有り」と云ひつゝ三藏の傍に進寄り、聲を低うして耳語きて曰く、「佳客、斯る良夜に到り、何を待つて鬱々として居給ふぞ。人生の一生は幾句ぞや。唯何事も捨て給ひて、吾と快く樂み給へ」十八公が曰く、「杏仙今聖僧に就て仰高の心あり。聖僧又俯就の心なからんや。倘是を憐まざるは知趣の人にあらず」孤直公が曰く、「聖僧は有道の師なり。管ず輕初の事にては此春意協ひがたし。我宜く是を計はん。拂雲叟と十八公は媒妁となり給へ。凌空子と吾とは媒姻を司り候はん」三藏聞も敢ず、色を變じ立揚り、「儂們都て同穴の妖怪、怎麼婦人を扯容れて我を誑惑さんとするや」四老三藏の怒を發したるを見て、個々言を住め、少時黙して居る處に、彼赤鬼大に怒り、雷の如くに勃誇りて曰く、「此和尚何ぞ斯のごとく不興なるや。我姐々顔色の艶美なるに、斯の若き詩才あり。儂が爲には相應の佳交なるに、那ぞ忌嫌ひて我主を羞むるや。倘此事に隨はずんば、我儂を掴み行きて、再度人界には販すべからず」と既に抓み罹んとする。三藏は驚き恐れ、只管に泣叫び、涙雨のごとくなり。仙女は彼鬼を扯住め、三藏の傍に居寄り、萬般と

透し頑要め、袖の裡より汗布を把出して三藏の泪を押拭ひ、「佳客、然様に氣悶給ふな。我今汝と共に玉に倚り香に依りて慰みなん。這邊へ來り給へ」とて手を拿りて扛立つる。三藏増々泣喚き、駈出さんと爲る處を、座中の者ども皆立かより、扯住めて放じとす。三藏は身を遁んと、扯つ扣れつ争ひけり。行者が輩三個は、師父の去方を尋煩びて、一夜足をも住ずして越りあるきけるが、荆棘嶺を打越えて天曉近き頃に到り、何處ともなく三藏の叫ぶ聲す。三個の者聞著けて、聲を齊く、「師父々々」と高聲に呼びければ、此聲三藏の耳に入りて「應」と一聲答ると齊しく、一座に左右妖怪ども、忽ち形装は消失せて、寂として物もなし。三藏は木仙菴を跳りいで、僅に越ると思ひしが、乍ら三個に行遇ひけり。四個一齊に懽喜ぶ事限りなし。行者が曰く、「師父今まで那里に在して、奈何なる難爲に遇ひ給ひしぞ」三藏有りし事ども仔細語り、彼十八公、孤直公、拂雲叟、凌空子、杏仙、女童、赤鬼等が事まで、落もなく談語り、「吾夢の如くにて一向に土地を辨へずと雖も、唯詩を談じたる處を思ふに、此處より遠からず」三個是を聞きて、「然らば試に尋ね見るべし」とて是彼と擦しけるに、一邊の石崖に「木仙菴」の三字あり。行者、「是こそ妖怪の巢穴ならめ」と心を住めて伺ひ見るに、「一株の大檜樹、老たる柏、古き松あり。又一むらの老き竹、一株の丹楓あり。崖の上に古き杏の樹有りて、臘梅と丹桂と其一邊

に生立ち出でたり。行者笑つて、「汝等妖怪を見つけたるや」八戒悟浄「曾て見ず」と答ふ。行者、彼老いたる樹毎に指して曰く、「是則ち妖怪なり」兩人尙其故を問へば、行者語つて曰く、「彼十八公は松樹なり、孤直公は柏樹なり、凌空子は檜樹なり、拂雲叟は竹なり。又赤鬼は楓樹なり、杏仙は杏樹、二人の女童は臘梅と丹桂なり」八戒聞くより、釘鉈を把つて彼木竹を根と俱に突倒せば、果然下際より鮮血淋漓として流れ出でたり。三藏師徒駭き忙るゝ計りなり。斯て三藏は、恙なく又馬に乗つて、三個の徒弟を従へ西方に進み給ふ。

○妖邪假設 小雷音寺

四衆皆遭 大厄難

去程に三藏は、若干の日敷を経て、一座の高山を越えて平地の處にいで、遙に向ひを眺れば、祥雲彩霧瀟々として殿閣高樓あり。三藏行者に向ひ、「彼處は何にか有らん」行者頭を擧げて遙に眺め、答へて曰く、「是一構の寺院なり。彩雲祥霧瀟々たりと雖も、然れども亦凶氣あり。彼處に到り給ふとも、漫りに門裡に入り給ふべからず」三藏馬に鞭を加へて山門の前に到り、見れば「雷音寺」の三字有り。三藏馬より飛んで下り、悟空を叱つて曰く、「潑猴、今日既に雷音寺に行著きたるに、那ぞ凶氣有りと云ひて我を欺きたるや」行者笑つて曰く、「師父過つて我

を恨み給ふな。山門の上に四箇の文字あり。師父其三字を讀みて一字を洩し給ふは何事ぞや」三藏是を聞いて再度能々打見れば、是「小雷音寺」と寫著たり。三藏點頭いて、「此處小雷音寺と云ふならば、必定一個の佛祖あらん。我門入りて拜すべし」行者曰く、「此寺に入り給ふは極めて凶多くして吉少し。怎生災に遭ひ給ふとも、返すくも老孫を恨み給ふな」三藏の曰く、「吾東土を出る時、一箇の誓を立てたり。寺に遇はば佛を拜し、塔に遇はば是を掃はんと云へり。當今寺に遭ひて佛を拜す。那ぞ爾を恨みんや」と毘羅帽子を冠り、金欄の袈裟をかけ、山門の裡に入り給ふ。門の一邊に人在りて大に呼つて曰く、「唐僧東土より來つて如來を拜せんとしながら、那ぞ箇様に無禮なるや」三藏是を聞いて急に軀を屈めて拜を做し前み給へば、八戒悟浄も同く拜し通る。第二の門に到れば、則ち如來の大殿に到る。殿門の邊には五百羅漢、三千揭諦、四大金剛、八大菩薩、比丘尼、優婆塞等並居たり。三藏八戒悟浄等、一步々々に拜をなし、如來の座前に到りける。行者は更に拜をも做す立躡つて居たりしが、亦人在つて呼つて曰く、「孫悟空、爾如來の尊前に立つて、那ぞ拜を爲さざるや」行者大いに叱つて曰く、「爾們胆太き潑畜生、怎生佛の尊名を誕り、如來の尊體に化けて、佛の清徳を破りぬるや。爾等目にも見すべきなり」と鐵棒を以て打たんとする時、忽ち控と物音響いて、空中より一箇の金鏡落

下りて、行者が上に罩ひ冠著、行者を此裡に閉籠めて一寸も動せず。八戒悟淨是を見て慌忙動かんとする處を、彼五百羅漢三千揭諦們的妖怪ども、拿圍み搔かせず。三藏をも捉へて、竟に三個俱に縛網めたり。彼如來に粧けたるは妖怪の大將にて、羅漢揭諦等の皆小的の妖怪なり。三藏を扯居ゑて、個々本相を顯はし、妖王小的に謂て曰く、「這三個を嚴く推籠めおけよ。彼行者は神通廣大の厮なれば、彼厮が亡びざる間は漫りに唐僧を喰ひがたし。此故に我今行者を金鏡の裡に封じ籠置きたり。三日三夜過ぎなば、管ず化盡けて水と成るべし。而後彼三藏を受用せん」と云ひければ、小妖的ども懽喜勇み、白馬は殿の後に繋ぎ、彼毘羅帽子と金欄の装束は、行囊の中へ疊入れ、奥深く藏し置き、個々裡に入つて歇みけり。

行者は彼金鏡の中に在りて、右に推し左に押せども、些少も揺す事能はず。身を如何にも長大になして突破らんとすれば、偕も此金鏡妙不思議の寶具にて、行者が身長大なる時は、金鏡も又長大なり、行者身を些小する時は、金鏡もまた縮みければ、行者五六根の毛を扯抜き、變じて鐵鍊と做して、是彼二三百度突きけれども、些しの透間も見えざりけり。行者大に心を焦ち、印を結び眞言を唱へ、護法揭諦六丁六甲の諸神を呼びければ、列位の諸神降り來り、金鏡の外に透り居て、「大聖今何の幹有りて我を呼び給ふや」行者曰く、「我今妖怪の爲に此金鏡の

裡に裝入れられ、種々法を盡せども出る事協はず。儂們力を盡して我を救ひ出すべし」諸神是を聞いて、力を合せて金鏡を排んと爲るに、分毫も動す事能はず。護法揭諦が曰く、「大聖、此金鏡は奈何なる寶具にや、當今上下一箇に合して一塊と成り、推せども扯けども排き難く我們が力に及ばざれば、今より玉帝に奏聞して、其上方便を廻すべし。大聖少時待ち給へ」と六丁の神に唐僧を護らしめ、六甲の神に金鏡を守らしめ、祥雲を聳かして南天門に上り、靈霄殿に前み登り、玉帝に謁え奏して曰く、「臣は是唐僧を守る處の護法揭諦なり。當今小雷音寺の妖怪、唐僧們四個を落し入れ、行者を捉へて金鏡の裡に裝込み、三晝夜にして化盡させ水と爲さんとす。行者が一命風燈のごとし。主上宜く聖斷有りて、渠が大難を救はせ給へ」玉帝聞宣して、頓ち二十八宿を宣され、「儂們、揭諦と俱に行きて小雷音寺に到り、妖怪を收め、唐僧を助けよ」と命じ給ふ。星宿列位勅を受けて、揭諦と俱に靈霄殿を退き下りて、二更の時節小雷音寺に到る。此時衆部の妖怪どもよく熟睡りて音もせず。星宿金鏡の廻に到り、謂て曰く、「大聖、我々は是二十八宿なり。玉帝の勅を請けて爰に來りて汝を救ふなり」行者聞いて、「儂等疾く兵器を以て此金鏡を打破れ」星宿の曰く、「是はこれ金にて鑄たるものなり。打破らば管ず大に響きて、妖怪ども眼を醒すべし。我々密に兵器を以て金鏡を擡げ揚ぐべし。些少にても

亮き光を見れば、爾身を變じて潛り出でよ」行者「理なり」と懽喜びければ、諸位の星宿、兵器を把出して金鏡の縁に差込み、是を揚げんと欲ども、揚る事は少時置きて、兵器を挿むべき透間もなし。彼是と立騒ぐ中、早三更の頃になりぬ。行者は金鏡の裡に在りて、今や光亮の見ゆるかと、東を臨み西を顧み待ちけれども、些少の透間も見えず。星宿の列れたる亢金龍が曰く、「我今角の尖りを以て金鏡を突串くべし。大聖裡に在りて、些少にても透間あるを見れば、疾く身を變じて潛り出よ」行者聞いて、「心得たり」と相待つところに、彼金龍、鐵のごとき角を以て、千斤の力を極め金鏡を突串せば、怪しや此金鏡、恰も人の肉の如く、金龍が角に纏ひ、些少も透間あらず。行者裡に在つて、金龍が角にて突串きたるは知ると雖も、些の透間も見えざりければ、手を回りにて角の廻を擦り見るに、實に毫ほどの透もなし。行者呆擗呆、不濟事不濟事。風の漏るべき隙も見えず」と少時沈吟したりしが、風と一箇の手計を思當き、行者又謂て曰く、「金龍、爾些少の疼を堪へよ。我今些少手計あり」と耳の裡より金箍棒を把出し、變じて一箇の鋼鑽と做し、金龍が角の上に錐揉をなし、孔を穿け身を芥粒ほどに變じて、錐の穴に潛り入りて、「金龍快く角を抜くべし」と呼びければ、金龍亦許多の力を極めて、漸々角を扯抜きたり。行者角の中より跳り出で、本相を顯はし鐵棒を推把つて、彼金鏡を打破れば、寔に是銅

山も崩れ倒るよ若き音、勃然と響き度り、微塵に碎けて飛散つたり。此物音に驚きて、妖怪ども睡を醒し、「驚破事こそ發起たれ」とて、忽ち鎧を取つて投著け、太鼓を鳴し妖兵を集め、個々利鋒を扯提けて大殿の前に跑集る。妖怪の大將は、彼金鏡微塵に碎摧散り、行者と二十八宿の空中に立居たるを見て、太に怒り、小妖的に命じて金鏡を取集めさせ、一根の狼牙棒を打振つて宇宙に跳り升り、行者們に向ひ、「汝等逃るとて遁さんや。且吾と唯三合を戦ひ得ば、大丈夫と稱すべし」星宿大に叱つて曰く、「汝は何の妖怪にて、今佛祖に變化し、唐僧を誑惑すや」妖怪笑つて曰く、「我は便ち黃眉老佛なり。人我を尊敬みて黃眉大王と崇む。汝們孫行者、些少計りの法術あるに誇りて、西方の道手に障る者なしと恣に振廻ふよし豫て聞きぬ。今且我と戦ひて、怎的勝つ事を得ば、唐僧を返し汝をも助くべし。方知勝つ事能はずは、唐僧と俱に打殺し、飯の菜に爲すべきなり」行者吃々と噴出し、「汝且分に過ぎたる海口を吐いて後悔なせそ。快く來つて我棒を喫ふべし」妖怪狼牙棒を打振つて打つて罹れば、行者も鐵棒を指搦して、五六十合戦ひける。諸位の星宿是を助けんと、一齊に進みければ、妖怪一隻手に棒を使ひ、腰より白布搭包兒を拿出し、空に向ひて投ぐると見えしが、怪しや、乍ち悟空をはじめ二十八宿、護法揭諦等、皆一同に彼囊に包まれけり。妖怪は懽喜びつよ、肩に擔ぎて寺内に歸り、い



星宿
天將
黃眉
大王戰



妖的們を呼出し、四五十筋の麻繩を把來らせ、囊の裡より一個々々に捉出し、盡般細縛めさせ、一邊に推籠めおき、筵宴を設けて懽喜を做し、裡に入つて歇みけり。天曉刻に到りて、行者身を變じて豆粒ほどになり、竟に縛索を拔出で、三藏を首め、八戒悟淨、二十八宿、護法揭諦等、残りなく細縛を脱解き、「爾等師父を伴ひて快く逃げよ。我は擔兒を拿りて迹より行かん」一個個懽喜び、頓て白馬を尋ね出し、三藏を打乗らせ、門を出て、列位の星神一陣の狂風を發し、大路を指して駆去りけり。行者は行囊を把返さんと、裡へ入るとしたりけれども、門々嚴く關して敢て進み入る事能はず。行者一隻の蝙蝠と變じて、墓の透間より飛入り門を越ゆる事三層にして、忽ち二階の窓より光明輝き出たる處あり。怪く思ひて指覗き見れば、是三藏の行囊にて、金襴の袈裟光を放つにぞ有りける。行者心中大に懼び、悉く奪ひ拿り肩に搥けて出んとする時、不期も一品の擔兒を把落し、板疊に當りて響きければ、妖怪驚き起出で來り、燦光を照し伺ひ見るに、此時行者は行囊を擔ひ、窓下の透間より飛出ける。妖怪是に心著きて細縛め置たる者どもを見るに、一個も在らざりけるにぞ、妖怪大に怒を發し、那里までも遁すべきかと、狼牙棒を推取つて、「个个來れ」と云捨てて、宙を飛んでぞ追跑けたる。衆部の小妖的、個々利鋒を扯提けて、我後れじと續きけり。妖怪漸々三藏に追及き、大音に嗚つて曰く、「禿子

供、爾們那里まで逃行くぞ。速に縛を請けよ」と、罵りければ、星宿天將輩是を見て、皆一齊に轉回し、八戒悟淨も取て返し、入亂れて責戦ふ。行者も不多時駈著け來り、鐵棒を閃して、妖怪どもを打散す。此時は一場の大戦にて、寔に是天も昏み地も動き、神哭して鬼叫ぶ。且より夕に到るまで、息をも繼ず戦ひしが、既に其日も西山に傾き、月亦東海に浮み出る。此時妖怪腰より彼搭包兒を把出す。行者快くも是を見著け、「個々心を著けよ」と呼はりけれど、八戒悟淨を首として、衆位の天將輩も、其故を分曉得ず、只管に戦ひける時、妖怪忽ち彼搭包兒を投揚げける。行者は急に劬斗雲に打乗り、空中遙に飛去りたり。其外の天將輩、三藏八戒悟淨も、俱に盡般彼搭包の中に裝入れらる。妖怪は勝凱を發けて寺中に歸り、小妖的に命じて一個一個に細縛めさせ、原の如くに押籠めおきけり。行者は漸々搭包兒を遁れ、雲を下りて山の上に停立み、今は思惟に盡果てて、涙を流して獨言きける、「彼妖怪が搭包兒は、抑何等の寶貝なれば、斯く大勢の人を裝入るとや。我今那里に行きて救を需めん」と少時沈吟したりけるが、忽然思ひ著きたる事あり、這般は北方の眞武君蕩魔天尊を央みて、此妖怪を退治なし、人々を救ふべしと、頓て劬斗雲に打乗つて、南瞻部州武當山を指して、飛ぶがごとくに駆去きけり。

三編 卷之六

○諸神逢毒手

彌勒縛妖魔

斯て行者は、筋斗雲に打乗りて南瞻部州にいたり、武當山に駈著き、雲を下りて、三天門を過ぎて太和宮に向ふ處に、一人の靈官立出でて、「何者ぞ」と問ふ。行者答へて、「老孫は孫悟空といへる者なり。天尊に見え奉り度事ありて、萬千の道を厭はず、故意々々此處に参りたり」と稟しければ、彼靈官裡に入りて天尊に斯と奏しければ、蕩魔天尊是を聞き給ひ、宮を出て行者を迎へて殿中に伴ひ給ひ、互に禮終りて後、行者小雷音寺の妖怪が動靜を説くこと一遍し、「彼妖怪奇術ありて退治しがたし。願くは天尊力を助け給ひて彼妖怪を亡し給はば、深く是を感謝し奉らん」天尊聞き給ひて、「大聖の頼われ那ぞ是を救はざらんや。然りといへども、帝王の尊慮を伺はざる間は、我恣に干戈は動しがたし。思ふに西方の小妖怪、奈何程の事か有ん。我自ら向ふにも及ぶべからず、某が麾下に、龜蛇二將軍、五大龍神といふ有り。是に數千の精兵を添へて大聖を助けしめん」行者懽喜んで拜謝すれば、天尊則ち龜蛇龍神等の精兵を呼んで、

「爾們是より大聖に隨ひて小雷音寺に向ひ、彼妖怪を治むべし」と命じ給へば、衆位の神たち命を受けて、行者と俱に打連れて雲に打乗り、急ぎ小雷音寺にいたり、関の聲を揚げたりしかば、彼妖怪門外に跳り出て、衆位の神兵を見て喝々と打笑ひ、「爾等那里の毛神どもにて、潑猴が助太刀をなすや」多くの神達皆一同に叱つて曰く、「我は是南瞻部武當山の、混元教主蕩魔天尊駕前の大將、五位龍神龜蛇二將軍なり。唯今大聖の頼によりて、爰に來りて爾們を捉へんとす。疾く唐僧をはじめ衆位の星宿天將們等を助け出せ。然らば爾が一命を助けん。倘然らずんば、乍ち微塵に切碎き、冥途の妖怪となすべきなり」と呼はりければ、妖怪大いに憤怒り、狼牙棒を閃かして打つてかよれば、衆部の小妖的皆一同に切つてかよる。神將等も利鋒々々を差かざして、行者も俱に入亂れて、半時ばかり戦ひしに、彼妖怪また腰より搭包兒を把出すを見て、行者は急に聲を發けて、「衆位心を付けられよ」と未だ言ひも果らざるに、妖怪彼搭包兒を投げかけけり。神將等は戦に心をとられ、何の意構もせざりし故、又悉く搭包の中に裝將れらる。行者は雲に打乗り空中に逃去りたり。妖怪は勝を得て、搭包をかたけ寺中に歸り、小妖的に命じ麻繩を取來らせ、五大龍神龜蛇二將軍をはじめ、一人ひとり網縛めて、又睿室の裡に打籠めおきけり。此時行者は雲を下り、山の上に止り、今は奈何とも詮方なく、只管涙を流

し、惘然として立たりけり。斯る處に、西南の方より祥雲一群地に降り、満山に繽紛と靈香薫じ、諸々の花を降し、光明四方に輝きわたる。行者驚き、是奈何と途に是を見てあれば、是則ち彌勒菩薩なり。行者聞はしく跪下いて拜をなし、「菩薩、當今那里へか去き給ふや」彌勒曰ふやう、「我爰に来る事、小雷音寺の妖怪を收めんが爲なり。彼妖怪は、實は我身邊に在りて磬を司らしむる處の黃眉童子なり。我三月三日、元始天尊の方へ赴きし時、彼童子に空宮を看守せ置きたりしに、思ひきや、我後天袋子を偷みとり、爰に來りて妖怪をなす。彼搭包は後天袋子なり。凡俗是を換んで人種袋と名く。他が持つところの狼牙棒は、則ち我が磬を敲つ槌なり。爾等師徒他が爲に惱さる。然も衆位の星宿天將諸神等までも捉へられしと聞きつる故に、我爰に來つて退治せんとす」行者拜伏して謝して曰く、「佛祖當今奈何して他を降伏し給ふや」彌勒笑つて曰ひけるは、「我今法力を以て、此山の麓に一箇の草菴を顯し、又一箇の瓜畑を構へ、許若の瓜を作り置かん。爾は去きて妖怪と戦ひ、勝つ事を求ずして、只他を此處まで僞引來れ。他口乾き瓜を見て管す喰はんとなすべし。我都て皆青瓜を見し置ん。爾早く逃來りて一箇の熟瓜となり、畑の中に轉び在らば、妖怪必定是を把つて喰ふべし。其時爾他が腹の中に飛入りて強く苦めなば、我先彼寶貝を取返し、其後唐僧をはじめ、衆位の天將等も、都て皆救ひ出さん」

と曰ひければ、行者懽喜び、「此謀計極めて妙なり。然れども、妖怪もし遠く追來らざる時は怎麼せん」彌勒聞き給ひ、「苦しからず。我一箇の法あり」とて行者が左の手を出させ、菩薩右の薬指に口中の神水をつけて、行者が掌裡に一箇の禁の字を書き給ひ、「汝よく是を握りて行き、妖怪と戦ふ時、此手を開きて他に見せなば、妖怪前後を顧みずして、只管に追來らん」行者憶んで命を受け、左の手を堅く握り、右の手に鉄棒を取て山門に駈向ひ、「妖怪早く出て勝負をせよ」と大音に語りければ、彼妖怪くだんの搭包を腰につけ、狼牙棒を打振つて走り出で、汝當今謀計極り力つきて、助を求むる處なく、獨來りて死を求むる、木より落ちたる潑猴かな」と大いに嘲り笑ひければ、行者怒心頭に發り、返答もなく打つてかよれば、妖怪狼牙棒を廻して十余合戦ふ時、行者彼左の手をひらき、妖怪に見せければ、抑奈何なる仔細にか在りけん、妖怪是を見て大いに焦發け、只管進んで更に止らず。行者はよき程に戦ひては逃走りけるを、妖怪は搭包兒を投ぐべき暇なく、只管走つて追來る。行者は彼瓜畑の邊まで逃げ來り、忽ち身を轉じ、跡を暗し見えすなりぬ。妖怪行者を見失ひ、爰彼處と尋ぬる間に、行者は早く瓜畑に飛入りて、一箇の熟したる瓜と變じて轉び居たり。妖怪は行者を尋ぬれども知れざりければ、頓て彼草菴の邊に來り、急に呼つて、「此瓜は誰が作りたるや」彌勒一人の老翁と變じ、菴の裡



彌勒菩薩變
老翁嘆狀

より立出で給ひ、「此瓜は我が作りおきしなり」と有りければ、妖怪曰く、「殊の外口渴きて堪へがたし。熟したる瓜あらば我に與へて渴をすくへ」彌勒則ち、行者が變じたる瓜を取りて妖怪に與へ給ふ。妖怪此瓜をとりて口を開き喰んとする時、行者忽ち身を小さくなして他が喉に飛入り、腹の中へ走り下り、逆様に立ち、或は蜻蜒返をなし、色々種々に舞跳りければ、妖怪疼を堪へかねて地頭に臥轉びて、「老父々々、我を助けよ」と叫びける時、彌勒忽ち本相を現し給ひ、打笑ひて曰く、「汝我を認得たるや」彼妖怪、頭を擧げて菩薩を見て大いに驚き、身を振はし地に平臥し、「吾主公、萬望慰みを垂れ給ひ、我を救ひたび給へ」と詫悲しむ。彌勒立寄り、かの搭包兒と磬を敲つ槌を奪取り給ひ、「悟空、他が命を助けて疾く出よ」と命ありけれども、行者は腹の中に在りて、「猶も恨晴がたし」とて鐵棒を拿つて、振廻し突廻しなしかる程に、妖怪は總身碎るばかりに疼堪へがたく、只管に轉び廻りて手足を掻き苦みけるにぞ、彌勒曰く、「悟空、最早宜しかるべし。我に愛でて渠が命を助けよ」と呼び給へば行者聞て、「然らば今出べし。妖怪口を開け」と喚りける。妖怪聞くより早く口を張開く。行者乍ち踊り出でて本相を現す。彌勒妖怪を捕へて彼搭包の内に裝將れ給ひ、「汝金饒を怎麼なしつるや」妖怪袋の中に在つて答へて曰く、「金饒は行者に打碎かれ、當今取集めて寺中に有り」彌勒是を聞い

て、搭包を肩に打かけ、行者と打連れて寺内に到らせ給ふ。衆部の小妖的、大王が捉へられしを悟り、四方に散て逃迷ふを、行者走り廻りて悉く打殺しぬ。斯て彌勒は碎けたる金饒を一箇に集め、眞言を唱へ、口より仙氣を噴きかけ給へば、彼金饒一箇に堅りて元の如くに形全うす。斯て彌勒は行者に別を告げ給ひ、祥雲に乗じて歸り去り給ひければ、行者は天に向ひて恩を拜謝し、地窖を開いて、三藏師徒をはじめ二十八宿、護法揭諦、龜蛇二將、五大龍神等、皆悉く網縛を解きて救ひ出す。左右して列位の天將星宿たち、別を告げて皆夫々の本郷に販り去り給ふ。三藏師徒四人は此寺に半日を休足し、飯を作りて食し終り、頓て一把の火を放つて伽藍を悉く燒盡し、尙西方に向ひて急がれけり。

○拯救駝羅禪性穩 脫離汚穢道心清

三藏師徒は、小雷音寺を離れてより一月餘を経て、一箇の高山の禁に到り、日も西に傾しかば、三藏馬より下りて宿を借んと見渡し給へば、一邊に一箇の民家有りて柴の屑を關したり。三藏立寄りて門を敲き給へば、裡より答をなして門を開き、一人の老人手に藜の杖を突き出て迎ひ、「何人なるぞ」と問ふ。三藏合掌して、「貧僧は東土大唐より西天に赴き佛を拜し經を求る

の僧なり。今貴地に到り天晩に及ぶ。萬望は老人慈悲を垂れ給ひて一宿を恵み給へ」老人聞いて、「諸は遙々の道を越えて能こそ來らせ給ひたれ。此地方は小西天の内にして、陀羅莊と唱す處なり。某今宵は尊宿を勤むべし。且此方へ入り給へ」とて師徒四人を堂上に請じ、互に禮終りて後、老人三藏に向ひ、「唐長老遠く爰まで來り給へども、此先決して進み難し」三藏驚いて其仔細を問ひ給へば、老人が曰く、「此地方に一箇の山あり、號けて七絶山といふ。山中悉く柿木にして餘木一株もなし。彼山直に行く事八百里にして、此處より三十里の行程あり。抑柿木に七絶あり。第一其木壽長し。第二に陰多し。第三に鳥の果を喰ふ事なし。第四に虫なし。第五霜葉 翫ぶべし。第六に其實を喜じ、第七落葉肥大にして字を書くべし。彼山餘木一根もなく、八百里の間皆柿木ばかりなれば、七絶山とは號けしなり。此山過ぎがたしといふは、年毎に滿山の柿其實を落す。山中に積りて又別に山をなす。雨露霜雪に叩かれ朽腐れて穢はしきものと成り。俗唱んで柿屎術と云ひ、また洵東園とも云ふなり。時今三月、其臭氣惡しきには及ぶべからずと雖も、然れども八百里の間都て斯の如くなり。其故に往昔より彼山を越たる人なし。長老西天に行き給ふには外に行くべき道なし。我是を以て其進み難きを稟すなり。爰迄來り給ひし辛苦仇事となるは殘多しと雖も、疾く東土へ歸らせ給ふべし」是を聞いて三藏煩悶と

して不言、只管涙を流し給ふ。忍へかねて行者、老人に向ひ高く叫んで曰く、「汝宿を貸さば貸すまでの事にて止むべし。那ぞ種々の漫言を吐出して、我が師父を驚すや」老人行者が容の兇惡なるを見て、心中頗る驚くと雖も、態と胸を居るて吐つて曰く、「此癆病鬼、怎生老人に對ひて無禮の言を吐出すや」行者笑つて曰く、「老人眼有れども珠なく、我相貌の醜きを侮りて、癆病鬼と嘲る。我形は斯の如くなりと雖も、法力廣大にして、常に惡魔を降伏して妖怪を拿ふる事を得たり」老人是を聞いて急に怒を返して、喜び、家僮を呼んで茶を捧げ齋を獻じ、萬般と接待し行者に向ひ、「當下長老よく妖怪を捉ふる事を得たりと曰ふ。我此地方に一箇の妖精あり、若是を退治し給はば、管す重く禮謝すべし」行者曰く、「此地邊清平にして又人家も立籠めたり。那の妖怪有りて祟を爲すや」老人が曰く、「此地方久く安穩なりしに、三年前六月の初、忽然一陣の狂風發れり。那時人家甚忙しき時候にて、麥を打つのは場上に在り、秧を挿るは田裡に在り、忙きに紛れ心も付ず、唯天變とのみ思ひし處に、豈計んや彼狂風過る處、一箇の妖精在りて、人家に牧ふところの牛馬猪羊雞鵝の類を拿喰ひ、男女の嫌ひなく活吞にする。自從後は、常に來りて害をなすなり」行者聞いて、「此地方の人、志意分散にして齊はざると見えたり。若然らずば、那ぞ家毎に銀を集めて數百金となし、法力有る僧を頼みて、銀を謝物とし

て妖怪を捉へざるぞ」老人が曰く、「汝の云へる如く、我此莊に家數五百家有り、家毎に三五兩づつの銀を集め、一年山の南より一個の和尚を請來り、銀を與へて妖怪を拿へさせんとせしに、彼和尚些少も法力なく、光頭上を妖怪に打れて、西瓜の爛れたる如く、終に命を失ひたり。我々又虧を吃ひ、他が爲に棺を買ひ葬禮を營み、又他が弟子達にも銀を與へたりしに、彼弟子ども尙も欲心歇ずして、又告狀に及んと、於于今乾淨と不濟。然るに舊年又一箇の道士を請來り、銀子を與へ妖怪を拿へんと爲る處に、彼道士令牌を響して法術を遣ひ、妖怪と相持闘ひしに、天明に到り、我々ども行きて見れば、計ずも彼同土溪水の中に淹し殺されたり。爾今此妖怪を退治し給はど、我箇莊中の長者を請來り、爾と我々文書を交易し、若妖怪を退治せば、汝の要むるに憑ひ、多少の銀子にても贈るべし。尙又爾妖怪に負けて命を失ひたり共、外の徒弟等迹にて圖頼事なかれ。互に天命に任すべし」行者嘲笑ひて曰く、「爾無能の人を頼み、剩へ圖頼りゆすられ、夫に怕氣付いて文書を求むるや。我は那樣の者に非ず。早く彼長者どもを呼來れ」彼老人大いに權喜び、家僕に命じて八九位の長者を請來る。各々三藏師徒に見え、妖怪を拿ふる事を聞き、衆老權喜び事限りなし。「諸何の師徒か妖怪を拿へ給ふぞ」行者進み出でて、「老孫にて候」といふ。衆位の長者是を見て、「不濟々々。彼妖怪神通廣大にして身體狼狽なり。

汝斯の如く丈低く、然も疲せたり。妖怪が齒の間に挟むにも不足ならん」行者曰く、「我生質疲せて小分といへども、秀氣自ら中に有り。那ぞ妖怪を怕れんや」長者の曰く、「然らば爾妖怪を退治するに、怎麼の謝銀を要むるや」行者聞いて、「我々は徳を積む和尚なり。怎生謝銀を要めんや。唯一器の茶一鉢の飯、則ち禮謝とするに足れり」衆位の長者是を聞いて、俄に拜謝して權喜ぶところに、忽然として一陣の狂風吹來る。彼長者們大いに驚き、「諸は妖怪來れり」と戦々競々、天を地へと騒動す。主の老人急に腰門を開き、「家内の男女早く來れ」と、三藏まで呼集め、「妖怪既に來れり」と叫び立る。八戒悟淨も説得驚き逃入らんと爲る處を、行者急ぎ扯住め、「汝等逃る道理なし。我々沙門の身として、甚麼内外を分たざる。爰に在つて俱に奈何様の妖精やらん伺ふべし」八戒悟淨没奈何、怕々住り居たり。斯て彼陣風過る處、隠々として半空中に兩盞の燈光顯れたり。八戒是を見て大に笑つて、「能慰々々。此妖怪管ず有行止ものならん」悟淨聞いて其故を問へば、八戒が曰く、「汝聞かずや。古より云へる事あり。夜行以て燭。無燭則止と。那看、一對の燈籠を以て先達て來る。必定惡き者にはあらじ」悟淨が曰く、「汝過れり。那は是燈籠には非ず、妖精が兩隻の眼の光なり」八戒三寸計り縮み上り、「怕怖や。眼斯の如くならば、口の大きい計り知るべからず」行者が曰く、「能々、汝は師父を大切に

守護すべし。我空中に到り得と見届け來らん」とて鐵棒を推把つて空中に飛升り、「汝那斯なれば、爰に來り人家に災害をなすや。其名をなのれ」と呼びけれども、妖怪更に答をなさず、長き鎗を振廻し、行者に向ひて戦はんとす。行者は兩三度聲をかくれども、妖怪さらに一言を應へず、只管鎗を閃せば、行者笑つて、「汝は聾なるか啞なるか。好々、我が鐵棒を吃へ」とて兩個空中に在つて戦ふ事半時ばかり。八戒家に在つて空中を伺ひ見るに、彼妖怪遮架になる計にて、行者を責討つことをせず。八戒悟淨に向ひ、「汝は爰に在つて師父を守れ。我戦を助けて妖怪を打殺さん。怎麼手を空くして猴めに獨高名させんや」と雲を發し飛升り、釘鉈を以て突いてかよれば、妖怪又一條の鎗をつかひ、兩手に二條の鎗を以て、行者と八戒に戦合ふ。八戒是を見て、「此妖怪寔に鎗の妙手なり」と云へば、行者が曰く、「他更に言はず。未だ人道に返らずして陰氣進き者と見えたり。怕らくは、天明に到り陽氣増る時に到らば、管す逃走る事あらん。其時管す遁すべからず」八戒、「心得たり」と云ひて又多時戦ひけり。既に東方發白の頃にいたり、妖怪頭廻て逃出しけるを、行者八戒迹に續いて追行きしに、忽ち惡臭人を襲ふ。是則ち七絶山稀柿術なり。八戒は堪へかねて、「是奈何臭き事や。是は那里の淘毛廁なるや」行者聞いて、「汝亂話を云ふことなかれ。鼻を塞ぎ、只早く追駈けよ」と終に山を馳過

る頃、妖怪忽ち本相を現したり。行者八戒是を見るに、是一條の紅鱗の大蟒なり。巨口を開き、兩個を呑んと劈ひよる。行者進んで近くと見えしが、唯一口に呑れけり。八戒驚き逃走り、大いに叫びて泣悲む。行者妖怪が肚の裡に在て、大音に呼つて曰く、「八戒々々、管す驚く事なかれ。我今這廝を船にして見すべし」とて、肚の裡に在て鐵棒を把出し、骨に押當て、力に任せて推付くれば、彼大蟒甚しく疼み苦み、頭と尾先を空になし、恰も一艘の船の形に似たり。八戒是を見て大いに安堵し、「大哥々々、能く船に似たりと雖も、桅蓬なくては風を使ふに好しからず」行者是を聞いて、「等々、我今帆柱を造り。風を使はん」とて鐵棒を推取のべ、背骨に押當突上ぐれば、皮肉の間を差貫き、高く登る事五七丈なり。寔の船の桅柱の如く、大蟒疼み苦み、又原の道へ擔り廻りて下りけるは、唯風帆の船を走しむるが如く、漸に山を下る事廿五里、終に嗚呼て死したりける。行者鐵棒にて一方を突破り、此穴より潛り出で、八戒と兩個にて、尾先を取つて扯拏り販る。却説駝羅莊の長者たちは、彼老人が家に集り、此兩人の和尚達も又妖怪の爲に殺されたらん、と案じ煩ひ居るところに、次の朝に到りて、行者と八戒、大いなる蟒を扯拏りて販り來りければ、衆位の老人たちを初として、一莊中の男女老少、都て皆集り來り、彼大蟒を見て、跪下

いて行者を拜し、「當下長老此妖怪を除きて、我們が輩生を安んずる事を得たり。何を以てか此大恩を報はん」とて夫より只管に待管しつゝ、五七日留めけれども、三藏師徒堅く辭して竟に別れて立出でける。衆位の老者たち、金銀を贈れども更に受けざれば、没奈何、只乾糧菓品の類を贈りて餞別とし、個々遠く送り來る。終に七絶山に近づきければ、其惡臭鼻を穿ちて堪ふべからず、路徑も皆埋れて通りがたし。三藏行者を招き、「此山怎麼して越ゆべけんや」行者鼻を覆ひて曰く、「許若氣力を費しなば通ふ事を得べけれども、唯食を營むべき人あらず」衆個の老者是を聞き、「我們既に大恩を蒙る。奈何程の日數を間どり給ふとも、我們食を辨ずべし。何ぞ食を營む人なしと曰ふや」行者が曰く、「然あらば汝等、許多の乾飯、又は餅饅頭の類ひを備へ來れ。彼背長き和尚は足早し。彼に與へて大きな猪となし、此道を開かしめん」八戒笑つて、「我猪となる事容易しと雖も、腹肥大にして食を費さん。若ものを喰ひて飽満きなば、管事を齊へん」衆個の老人、「最安き事なり」とて追々人を走らせ、個々談合せて許若の食を贈り來りければ、八戒大いに歡喜びて、身を變じて巨大なる猪となる。頭より其尾に到りては、長き事百餘丈、蹄より背に到りては、高き事千尺餘、一莊許若の人々食を送り來る事、其數を計りがたく、恰も山の如くに積上げけるを、八戒是を残りなく喰ひ盡し、上に進んで路を開く。一息に五丁八丁づつの土を搔のくる。許多の人夫は赴り駈りて食を送る事絶間なし、八戒彌力を盡し、終夜道を開く。行者は師父を助け、沙僧は行囊を擔ひ、迹に續いて進みゆく。終に三晝夜にして七絶山を通り越え、師徒四人、老者どもに別を告げ、急いで西方へ進み給ふ。

○朱紫國唐僧論前世 孫行者施爲三折肱

月往き日來りて、又夏の炎天に到り、三藏師徒四人、一構の城下に到る。城の上に黄なる旗を建て、「朱紫國」と記したり。三藏の曰く、「此處極めて一國の王城ならん。城に入つて關文を換ふべし」とて城門に進み、街を過ぎて會同館に到る。館を預る大使、出迎へ仔細を問ふ。三藏合掌して、「貧僧は、東土大唐より西天に赴き、佛祖を拜し經を求るの僧なり。今大國に來りて關文を換へん事を願ふ。大人よろしく國王に奏し給はるべし」大使禮を施し、「且先爰にて歇み給へ」と四人を館中に招じ入れ、許多の官人に命じ、齋を調へて種々と接待し、其後大使三藏を伴ひ、國王の宮中に到り、始終を仔細奏しければ、國王歡喜んで、「朕今身に病有るに依つて、久しく朝に臨まざる處、當下遠く唐僧の來る事、誠に我が歡喜なり」と直に三藏を殿上に

召して座を給ふ。三藏國王に禮拜し、關文を捧げければ、國王是を披き、見終りて曰く、「汝が大唐は、今幾許の世を受け、君臣正しく明なるや。唐王何によつて死て又蘇生り、此大願を起し、汝に命じ佛を拜し經を求めしむるぞ」三藏曰く、「我本國は、往昔三皇世を治む。いはゆる大昊炎帝黃帝是なり。又五帝嗣いで世を治む。少昊顓頊帝堯舜。次に三王なり。禹湯武。此三皇五帝三王、何れも聖明にして天下泰平なりしを、終に七雄覇を争ふに到り、六國秦の爲に并吞せられ、久しからずして天下漢の高祖に歸す。其後晉の司馬氏國家を保ち、宋齊梁陳隋の五代を経て、四海皆我が唐朝に歸伏し、萬國靜謐、四民安樂なり。我が太宗皇帝、大德寛仁にして堯舜の風あり。今貧僧に命じて佛を拜し經を求めしむる謂は、斯様かやうの仔細なり」とて、「龍神雨を過ちて天の罪を受け、唐王に救を求めしを、魏徵夢に龍を斬り、彼龍崇をなして、唐王冥途に赴く處、崔珏判官に魏徵書を贈り、再び蘇生りて陽門に返り給ひ、水陸大會をなして幽冥に謝し給ひし時、觀音菩薩出現ありて、大乘の妙經西方に有る事を示し給ふ。此故に貧道、勅命を蒙りて西方に來れるなり」と仔細に是を語り給ふ。國王聞いて賛歎し、「寔に天朝大國の風、君正しく臣賢なり。我今久しく疾有りて雖も、是を救ひ助んと思ふ臣下、一人も有る事なし」三藏是を聞いて、國王の相貌を見奉るに、形容衰へ心神脱れたり。其病根を

尋ね參せんと思ふ處に、光祿寺の官人、唐僧に齋を侷めんと稟しけるにぞ、國王三藏を請じて相伴し、山海の珍羞を備へ、心を盡して接待しけり。却説、行者が輩三個は、會同館に在りて歇み居けるが、悟淨は飯を調へて、菜を煮んとしして鹽醬油酢なき事をつぐ。行者八戒に向ひ、「爾街に行きて買來れ」と云へども八戒躲懶にて動かず。行者渠を欺かんと思ひ、謂て曰く、「彼街には、燒餅、饅頭、羊羹、砂糖餅、油食、蜜食、其外旨き物許若ありしを見ざるや。然らば吾行きて是を買ひとよのへ、思ふ儘に賞用すべし」と器を取つて立上れば、八戒口に涎をながし、「哥哥、我も爾と俱に行きて彼品々を賞用せん」と兩個打連立ちて出行きけるが、程なく鼓樓の下に致る。爰に限なき人群集して、押合ひ揉合ひわめきけるにぞ、八戒是を見て、「我們行く事能はず。彼群集の輩、我們が醜しき形を見れば、極めて怕れて逃走り、或は倒轉び、又は踏殺しなど爲る事有らば、却て我們を捉へて、償命とせんと云ふべし。不可行々々」と云ひて動かざれば、行者笑ひて、「然あらば、汝は爰に止りて待つべし。我行きて物を買來らん」と云捨てて走り行き、群集の中に分入り、何事にやと是を見るに、此處に一張の皇榜を張りかけて有り。一邊に十一人の大監校尉、札を守りて並居たり。行者近寄りて是を読む。其文に曰く、

朱紫國王諭。朕自立業以來。四方平服。近頃國事不祥。沉病伏枕。淹延日久難痊。本國太醫院。未能調治。今此出榜文。普招天下賢士。若有精醫者。請登寶殿療理。朕躬稍得疾痊。願將社稷平分。決不虛示。爲此出給張掛。須至榜者。

行者覽畢。滿心歡喜。我今醫生となつて慰むべしと思ひ、巽の方に向ひて一口の氣を噴出しければ、乍ち一陣の旋風と起り、石を走らせ砂を飛ばしける程に、群集の人々驚き騒ぎ、四方に散亂して逃去りけり。行者は隱身の法を遣ひ、彼榜文を引掲して立歸り、八戒が立ちし處に到りけるに、只見那猓子、面を垣根に押當て睡り居たり。行者密にかの榜文をたよみ、八戒が懷裡に押入れ、其儘に捨置きて、獨會同館に歸りけり。斯て皇榜を守る處の大監校尉、少時眼を塞ぎて有りけるが、風靜りて後頭を擧げて見る處に、彼皇榜を失ひたり。官人ども大に驚き、「諸は當下の旋風に吹去れしと覺えたり。疾尋ねよ」と爰彼處捜し求むる處に、八戒が懷中より、彼榜文半ば出て有りけるを見付け、官人ども立ちかより能々伺ひ見るに、彼皇榜文に疑なし。頓て八戒を喚覺し、「汝皇榜を掲し持つからは、定て醫術に秀でたる者ならん。趁早萬歳へ奏聞せん。此方へ來るべし」と引立つる。八戒は官人どもを見て大いに驚き恐れ、地

上に跪下き倒れ、「我那ぞ醫術を知らんや。且皇榜を掲したる覺なし」官人の曰く、「汝懷中する處の者、皇榜にあらざるや」八戒頭を低れて懷中を見れば、誠に一枚の紙有り、押開き是を読み、乍ち牙を咬んで言り、「諸は那潑猴、我を害する事斯の如し。我此榜を取りて怎麼とすべきや」と扯破らんと爲る處を、官人們架住め、「是は之當今國王の出し給ふ處の皇榜なり。誰か扯破る事をなすべきや。汝既に是を懷中するからは、管ず能く療治するならん。疾く來つて皇帝の病を看よ」八戒が曰く、「是は我が掲來る處に非ず。我が師兄孫悟空と云へる者取來る處なり」官人聞いて、「僞亂話を云ふものかな。既に皇榜 僞が懷裡に有る上に、當下皇帝の尊前に連行くとも、我々が誤りならず。汝速かに來るべし」と扯立て行かんとすれども、八戒大路に立定つて、根の生えたる如く、更に動かさず。衆位の官人ども圍繞きて、只管に連行かんとして、争ひ騒動したりけり。此時兩個の年老いたる太監進み出て、八戒に向ひて云ふやう、「僞が相貌此國の人に非ず。聲音も又別なり。我僞に、東土より來る一個の和尚在りて朝門に入るを見たり。僞は彼和尚の徒弟ならずや」八戒聞いて、「實に其如し。我が師父朝に到りて關文を換へんとす。我が師兄弟は會同館に歇み居れり」彼太監、衆位の官人に向ひ、「僞渠と俱に會同館に到るならば、其端的を知る事あらん。争ふことは不要なり」とて住めけれ

ば、「尤なり」とて、官人ども八戒と打連立ち、會同館にぞ到りける。此時行者は、嚮に會同館に歸り悟淨に向ひ、皇榜を掲つて八戒が懷中へ入置きし事を語り、兩人手を拍て笑ひ居るところに、八戒は衆位の官人どもと打連れて入來り、行者を見て大に亂騷きて曰く、「師兄、儂我を欺き、街に連行き、皇榜を掲し來て我に難爲をさせつるは奈何」行者笑つて敢て答へず。衆位の太監校尉行者に見え、一同に拜して曰く、「孫老爺、我が國王縁有て今日天より長老を降し給ふ。極めて醫術の手徴あらん。疾々三折肱を施して、我國王の病を愈し給ひなば、天下を分ちて徳を與ふべし」行者が曰く、「我醫術の手徴有るを以て、帝王の病を治すべく思ひ、皇榜を掲て我が師弟に授け置き、儂們を爰まで道引かしためたり。若帝王親ら爰に來りて我を請待するならば、手の到る處管す病を除かん」太監是を聞いて、校尉等を館中に残し置き、趣早返つて、朝に入りて帝王に見え、此事を仔細に奏聞す。國王是を聞て大に歡喜び三藏に向ひ、「聖僧幾位の高徒ありて那れの一位か善く醫をなすや」三藏の曰く、「貧僧三人の徒弟有りと雖も、俱に是山野の庸才、一個も醫をなす者なし」國王聞いて、「聖僧管す太謙し給ふ事なかれ」と。又文武の衆官を召して曰く、「寡人親ら彼處に到り、唐僧の高弟を請待せんとは思へども、病有るによりて輦に乗る事能ず。儂等一個も残らず會同館に到り、孫長老を請來り、朕が病を看

すべし。儂們神僧長老に見え、君臣の禮を以て相見え、管す愚疎にすべからず」衆臣命を受けて、太監と俱に打連れ會同館に到り、行者に見え拜をなす。行者當中に座して端然として動かす。衆臣謹んで曰く、「國王病に依りて、親ら長老を迎ふる事能はず。臣等をして神僧を請待せしむ。萬望は朝に入つて主上の病を療治し給へ」行者聞いて、「既如此列位前行し給へ。我俱に隨ひ行かん」と、衣を整へ立出れば、百官前行して、頃刻朝中に到り、國王に奏しければ、國王尊簾を捲せて、行者が相貌を見るより大に駭き恐れ、戰々競々龍床の上に倒れ給ふ。許多の女官諛得ふためき、急ぎ後宮に助け入れ奉る。國王近士の人々を召して、「彼和尚疾く賑らしむべし。我斯る恐怖しき者に怎麼近くべけんや」近士の人々此故を行者に告る。行者曰く、「若我が形容を恐れ給はば、我糸をかけて診脈せん」近士の官人又此由を國王に奏す。國王是を聞いて大に歡喜び、「然らば其如くして疾々我が病を看せよ」近士の人々、行者を宮中に招きければ、行者則ち寶殿に登る。三藏行者を叱つて曰く、「汝潑猴、我に又難爲をさせんとするや。儂我に従ひてより以來、未だ一度も醫を爲せし事を見ず。況や診脈に於てをや」行者笑つて曰ふ、「師父敢て知り給はず。我種々の藥法ありて、専ら大病を痊すべし。亦糸をかけて診脈する、病根知らずと云ふ事なし」と云ひつゝ手を延して毫毛を抜き、三條の金糸と變

ぜしめ、何れも其長二丈四尺、二十四氣を象れり。是を取て三藏に見せしめ、「管す煩意し給ふな」とて、終に後宮にぞ進みける。

三編 卷之七

○心主夜間修薬物

君王筵上論妖邪

話表行者は、近侍に伴はれて皇宮内院に入り、寢宮に到り門外に立つて、三條の金絲を官員に與へ、教へて是を聖躬の左の手の寸脈、關脈、尺脈三部の上に著けさせ、線の頭を格子より引出させ、行者右の手に是を擧り、左の三指を以て寸關尺の三部の脈を試み、又教へて右の手に三部に是を著けさせ、行者左の手を用ひて件一是を試み、終に毫毛を以て我身に返し、高聲に稟しけるは、「陛下の尊惱、左の寸脈強にして緊なり。關脈濇にして緩、尺脈扞にして沈み、右の寸脈浮にして滑なり。關脈遲にして結、尺脈數にして牢なり。此病驚懼くこと有るか、亦是愁思ふ事有りて積れるが故なり。是を名付けて雙鳥失群の症といふ」國王是を聞いて滿心に歡喜び、思はず聲を發して曰く、「備が看る處誠に明なり。早く藥を進め來れ」行者徐々として殿を下れば、三藏行者を待構へて、君王の病を問ふ。行者曰く、「老孫國王の病を診脈し、病根を悟れり。此故に國王我に藥を求め給ふ。疾く調へて是を獻せん」此時一個の

醫官來り、行者に向ひ、「長老今何様の藥種を用ひ給ふや。要に隨ひて掣來らん」行者聞いて、
 「怎生一方に限らん。藥を見れば則ち用ふ。何程にても把來れ」醫官が曰く、「藥は都て八百八味
 あり。一個の病に那ぞ盡く用ふる理有らん」行者聞いて、「古人曾て云へる事あり。藥不執
 方、合せて宜く用ふと。此故に全く藥品を記し、然後加減すべし」醫官再度問答に及ばず、
 藥品製煉の品を會同館へ送り遣しけり。國王又三藏に勅して、「聖僧は殿中に在つて我と閑
 談し給へ」と止め給ふ。行者師父に別れて會同館に飯り、八戒悟淨に事の始終を説談り、三
 個晩齋を吃終りて半夜の頃に到り、行者先一兩の大黃を取つて、悟淨に命じ細末せしめ、亦
 一兩の巴豆を取つて殻膜を去り、槌にて油毒を去らせ、八戒に命じて細末なさしむ。二個製し
 終りければ、行者一箇の花磁蓋を八戒に與へ、「汝此器に鍋臍灰を半蓋刮け入れて來るべし」
 八戒頓て鍋臍灰を取來る。行者又花磁蓋を八戒に與へ、「汝是を以て白馬の尿を半蓋取來れ」
 八戒呆れて、「馬の尿を怎麼するや」行者曰く、「藥を丸せん」と答へければ、悟淨笑つて、「師
 兄病人を弄り者にして慰むや。馬湯鮮くして、脾虛の個一般這を嗅ぐ時は乍ちに嘔吐せん。
 矧や巴豆、大黃、鍋臍灰の類を交へ用ひば、上には吐し。下には瀉すべし。斯の如くして豈病
 の愈ゆる有らんや」行者曰く、「我が白馬尋常の馬にあらず。渠は是元東海龍神の化身なり。

他が便溺を用ふる時は、奈何なる病なりとも愈えざる事なし」八戒是を聞いて、畢に白馬の傍
 に至り、器を持って待伺ひ、半時ばかり過せども、馬更に尿をせず。没奈何て立飯り、行者に向
 ひ、「大哥々々、今帝王の療治する事を止めて、白馬の療治を先へせよ。這厮乾結して、一滴
 の尿も下さず」行者聞いて、「獸子亂糞を止めよ。然らば我行きて取來らん」と器を取て白馬
 の前に到り、少時の間に尿を取來り、藥種を搔交せて三粒の丸藥となし、器に納め、其夜は個
 個歇みけり。斯て天明るに及んで、國王衆臣を宣し給ひ、「爾們急ぎ孫長老が方に到り、藥を
 受取り來るべし」衆臣命を請けて會同館に到り、行者に見え、拜して藥を求む。行者彼の丸
 子を取納れたる器を官員輩に與へて曰く、「此丸子は是烏金丹と號く。無根水を以て用ふべし」
 群臣曰く、「無根水とは奈何なる物ぞ。我々は知らず」行者曰く、「地に有る處の水、悉く根
 有り。只天上より降りて未だ地に落ちざる處の雨水、は無根水と名く」群臣拜謝して朝に歸り、
 彼丸子を獻りて行者が教を述べければ、國王即ち當駕官を喚んで、雨を求むべき法を談じ給
 ふ。此事會同館へも告し越し給ふ。行者是を聞いて急に印を結び、咒語を唱へければ、忽ち
 東の方より一朵の烏雲一群起り、會同館の上に到り、雲中に聲有りて、「東海龍王赦廣、大
 聖の宣し給ふに因て來れり。抑何等の幹事ありや」行者曰く、「今朱紫國王病あり。依て藥を

與ふるに、些の無根水を求めんと欲す。汝聊か雨を降して、渠に與へて薬を服しめよ」龍神
 聞いて曰く、「大聖の呼び給ふに依て、那幹も辨へず参りたれば、雨を降すべき器一品も持來
 らず」行者が曰く、「許多の雨を求るに非ず、只些しの薬を用ふる程有らば幹足りとせん」龍
 神曰く、「既如斯、我些しの唾を吐て渠に薬を用ひしめん」行者満心歡喜、「最好々々」龍王是
 を聞いて又烏雲を起し、皇宮の上に到りて一口の唾を吐きければ、化して甘露水となりて降下
 る。宮中文武の官員、後宮の官女ども、是を見て手々に器を捧げ、庭上に立出でて彼雨を受入
 れける。一時計にして、都て是を一集にして一箇の器に納るに、許多の無根水を得たり。國王
 歡喜んで彼烏金丸を三度用ひければ、俄に腹中鳴響き、瀉下する事夥し。病根残らず下し終
 り、些しの米飲を食し氣を養ひしに、少頃して心胸寬泰して衛營調和し、脚力強健なり。
 龍床を立つて朝服を著し、殿上に出で三藏に見え、身を倒して拜をなし、趁早官員に命じて、
 行者が輩三個を宣來らせ、大に酒宴を安排して師徒四個を接待し、國王を初として文武の百
 官、后宮の官女、都鄙の人民に到る迄、歡喜の聲止む時なし。行者重ねて、「老孫昨日陛下の
 脈を診するに、深く病の因を疑ふ。是を審に請承る事を得んや」國王曰く、「家の醜は外に
 露すべからずと云へり。然れども神僧は我命を救ひし人なり。那ぞ覆匿さんや。寡人元來深く

愛する處の金聖皇后と云ひし美人有り。三年前端陽の節、我が花園の裡に海榴亭と云ふあり、
 爰に皇后と俱に角黍を喰ひ酒を呑んで樂居たりしに、忽然として一陣の風吹起り、一箇の妖
 怪現れ出で、自ら名宣りて曰く、我は是麒麟山の獬豸洞に居住する賽太歳大王といふ者なり。
 爾が金聖皇后美人なる事を聞及び、是を得んが爲來りたり。早く我に其皇后を與へよ。儻與へ
 ざる時は先爾を喰はん、其後一國の人民都て皆喰盡すべし、と語る。我其時、命惜むには非
 ざれども、罪なき一國の人民を渠が爲に亡されん事悲く、奈何とも可爲やうなく、終に金聖を
 亭の外へ押出したれば、彼妖怪乍ち皇后を攝將きたり。我此爲に驚怖る事少からず。又彼
 角黍の類腹中に止滞り、且皇后の事を愁ひ思ひて、日夜是を忘る事なし。此故に深く病を得
 て三年に及びし處に、神僧の良薬を服して忽ち病愈え、當下本身に復る事、是皆唐僧の贈な
 り」行者聞いて、「今金聖皇后を此國へ返し度とは思ひ給はずや」國王涙を流して、「云ふにや
 及ぶ。我此事を思ふ事切にして、夜と無く晝となく憧々として戀思ふこと絶間なし。然れども一
 個として彼妖魔に敵すべき臣家なし」行者聞いて、「我陛下の爲に此妖怪を退治し、皇后を此
 國に皈らしめば奈何」國王是を聞いて、「倘然もあらば、此國を爾に譲り、帝王と稱し、我は
 臣家と成らん」行者又曰く、「妖怪皇后を捉行きて後一向に音耗なきや」國王曰く、「他先年

五月、金聖皇后を捉行きて、又十月に到り、兩個の宮女を皇后の宮仕に爲んと求めし故、又兩個の宮女を遣したり。去年又三月來りて、二個の宮女を要行きて、七月重ねて二個を要去る。今年二月亦來りて二個の宮女を要去きたり」と詞も未だ終ざる處に、南の方より一陣の風吹發りければ、國王初め文武の百官驚き慌得、「妖怪又來り」と呼び叫び、皆後宮へ逃匿るよ。三藏は國王と俱に身を匿す。八戒悟淨も逃けんとするを、行者扯住め、「爾等少時爰に在つて妖怪を伺ひ見よ」と制すれば、二個は没奈何、行者と俱に立定りて、虚空を睨んで立つたる處に、乍ち黒雲の間に、焦面金睛の妖怪現れたり。行者二個に向ひ、「汝等爰に在つて待つべし。我先妖怪に對面せん」と筋斗雲に飛乗りて空中にぞ升りける。

○妖魔寶放 烟沙火

悟空計盜 紫金鈴

却説行者は、鐵棒を持つて空中に立つて、大聲に喝つて曰く、「爾何里より來れる妖怪ぞ」彼の妖怪聲を勵まして曰く、「我は是別人ならず。乃ち麒麟山獅鬃洞賽太歲大王の部下の先鋒なり。今大王の命を受けて、爰に來りて宮女兩個を把行きて、金聖娘々に侍御せしめんとす。抑又爾は何的なれば、斯妨逆を做すや」行者答へて曰ふ、「我は乃齊天大聖孫悟空なり。我が

師兄三藏法師、西天に往きて佛を拜し經を取り給ふ路上、此國を過る處に、爾等が悪行を聞いて片腹痛く、此國に荷擔して退治せんと思ふ處に、態々其方より來つて我に命を送る。不敏なり」と呼はりければ、妖怪大いに怒り、有無を言はず長き鎗を取つて突いてかゝるを、行者は鐵棒を揚げ相迎へ、空中に在つて戰ふ事二三合、彼妖怪行者が棒を架外して、長き鎗を兩截に折られ、慌忙風に乗つて西方へ逃失せたり。行者且て是を追はず、雲頭より下り來り、叫んで曰ふ、「師父請ふ陛下と同じく來り給へ。妖怪は逃去せたり」と呼びければ、唐僧は君王を扶けて同く穴を出來りて見れば、滿天晴朗にして絶て妖邪の氣なし。國王大に歡喜び、また酒宴を設け、自ら壺を拿け金杯を把つて行者に進め、「神僧の妙力誠に感謝するに堪へず」行者杯を接りて未だ挨拶に及ざる處に、乍ち告來る、「西の朝門の外に上火起れり」と。行者聞くより、持ちたる金杯を酒有る儘に空中に投上げければ、噹的と音して杯は地に落ちたり。國王慌忙く問ふて云く、「大聖何ぞ杯を投げ給ふや。我處爲に腹立つ事有りてか。煩心なり」と曰へば、行者獨笑つて答へず、安然として在りける處に、又一個の官員來りて報じて曰く、「當下西の朝門の起火、俄に一場の大雨降來りて、盡く消滅せ候。然るに彼大雨、街中を流るよ水、都て盡く酒臭く候」と云ふ。此時行者曰く、「是は、彼妖怪西方に逃去きたるを、我曾

て他を趕はず。依て彼妖怪を起したるものなり。老孫國王の賜はりし一杯の酒を投げて、即ち妖火を滅し救ひたり。西の朝門の市街までも何の別條あらんや」國王十分權喜び、猶百倍の敬を加へ、三藏四個を寶殿に請上らせ、「萬望唐僧に國を譲りて天子と做さん」と云ふ。行者笑つて曰く、「未だ半々其處に到らず。彼賽大歳太王部下の妖怪ども、不多時押寄せ來るべし。我今這方より逆寄して、空中に於て擒にし來らん。不然ば許多の百姓を騒かせ、陛下をも驚かし奉らん。唯這方より推羅けて、金聖皇后を取回し來らん。但知らず、彼山洞までは行程幾計か有るやらん」國王曰く、「寡人曾て那里の里數を聽くに、往來五十餘日、多少三千餘里あり」行者聞いて八戒沙僧に向ひ、「爾等師父を護持して爰にあれ。我は那地に趣かん」と云へば、國王扯住めて、「神僧且寛々支度し給へ。些計の安排をも侑め、乾糧盤纏も進らすべし。又快馬一疋を進らせん、是に跨つて旅立ち給へ」行者笑つて曰く、「陛下の命事甚巴山轉嶺步行。三千里計の行程は、爛酒を斟で不冷間に往回すべし」國王聞いて大に呆れ、「神僧は尊貌猴の如くなれども、怎生這般の法力あるや」行者曰く、

我身雖是猿猴數
自幼打開生死路
山前修煉無朝暮
倚天爲鼎地爲爐
兩般藥物團烏兔
偏訪明師把道傳

探取陰陽水火交
時間頓把位關悟
全仗天罡搬運功
也憑斗柄遷移步
退爐進火最依時
抽鉛添汞相交顧
攢簇五行造化生
合和四象分時度
二氣歸於黃道間
三家會在金丹路
悟通法律歸四枝
本來筋斗如神助
往來霄漢沒遮欄
一打十萬八千路

國王此詩を見て、且驚き且懼び、許多うち吟じ、一杯の酒を著て行者に與へ、「神僧遠國へ旅立ち給ふ、骨折を謝せん」行者一心唯妖怪を降伏せんと思ふのみにて、速に一杯を吃し、空中に向つて唵と一聲、寂然として形は見えず。一國の君臣上下、唯奇異の思を做しぬ。

斯て行者は、筋斗雲に打跨りて、快くも一座の高山に到り、即ち下りて巔峯に在つて仔細を得と觀ひ、正に洞口を尋ねんと欲する處に、只見此山の凹なる處より、烘々と火の光飛出でたり。霎時に天を撲つ紅焰あり。又紅焰の中に一條の惡烟を冒ひ出す。此火甚毒火と見ゆるにぞ、大聖自ら恐懼せり。又此山中に一道の沙を迸り出して、眞に天を遮り日を蔽ふ。行者見れども一向に其故を解たず。頓て身を變じて、一個の攢火的鶴子と成つて烟火の中に飛入り、驀却驀駈回り、烟火沙灰を吹散らし、漸々烟火開けて、本像を現し下りて見ば、只叮叮噹噹と

銅鑼の聲を聴く。此處は是妖精の巢穴に非ず、銅鑼の聲は是兵を布くの銅鑼、想ふに是通國大路に兵を出すこと有るならん、と猶急ぎ行きける處に、忽ち一個の小妖兒、黄なる旗を立て、背上に書簡を帯びて、銅鑼を敲ちながら走る事飛が如くなり。行者又身を變じて一個の道僮となり、頭は双抓髻に結び、身には白衲衣を著し、手に木魚を叩き、口に道情詞を唱へ、山坡を轉りて彼小妖的に行迎ひ、稽首んでいふ、「長官那里へか行き給ふや。又持ち給ふは怎麼の公文なるや」小妖的銅鑼を打止め、笑つて禮を返していふ、「我が背上に負ひしは、朱紫國へ送る戦書なり」行者曰く、「何故に戦書を送りて鬪はんとし給ふや」小妖的が曰く、「我が大王、三年前朱紫國に到て金聖皇后を奪ひ來り、闈の樂に爲んと思ひしに、一個の神仙來りて一件の五彩の仙衣を皇后に與ふ。是を著給ふに、總身都て針刺を生じ、我が大王敢て摸ても見る事能はず。但些少も手を著れば、手心疼みて堪ふべからず。此故に三年の今日まで未だ身を沾さず。大王没奈何、又朱紫國より外の宮女二個を要來り、竟に弄み殺し、其後又二個の宮女を弄み殺し、今年又要りに遣しを、今般は孫行者が爲に打破られて、宮女を要來らず。此故に我が大王大いに怒つて、彼國を責亡さん爲に、我をして戦書を届けしめんとなり。朱紫國王若戦はずして、美人を送りて和睦せば 造化なり。戦はど管す利あらじ。我が大王烟火飛沙を以て責め

給はど、彼國王臣家を首め百姓等に到るまで、一個も活きる者有るべからず。其時は、我が大王は朱紫國の天子と爲り、我々は臣下と做るべし。然ば明日は合戦なり。快く戦書を届くべし」と云捨てて走り行く。聞終つて行者鐵棒を拿出し、小妖的が後身より、唯一打に討殺し、足を把て澗へ扯下さんとする時、只聽啗的と一聲響きて金を摺りたる牙牌落ちたり。牌上に文字あり、曰く、

心腹小校。一名有來有去。五短身材。屹撻臉無鬚。長用懸掛。無牌即假。

行者是を見て打笑ひ、「此小妖の名を有來有去とよぶ、然るに今一棍に打殺されて、去有つて來なし」と云ひて、牙牌を取つて腰に付け、銅鑼と旗とは草裡に藏し置き、戦書を取て袖に納れ、忽ち又烟火の毒を思ひ出し、敢て洞門を尋ねず、有來去が骸を鐵棒に拴り著け、其儘空中に飛入り、徑に本國に飯り、且一箇の頭功の手柄を當報べしと、吻哨と發聲して朱紫國に歸り、金鑾殿に到り、彼一封の戦書を三藏の袖の裡に推入れ收置て、「師父且國王に見せ給ふな」と云終らざるに、國王殿を下りて行者を迎へとり、「神僧快く歸り給ひたり。偕妖怪の動搖は奈何」行者地上に指して、「那階下に妖精を打殺して置きたり」と云へば、國王是を見て、是は這賽太歳に非ず、賽太歳は寡人親く認得たり。身尺凡一丈八尺計り、面金光有りて聲霹靂

の如し」行者曰く、「是は這一箇の報事の小妖的なり。且血祭に打殺し來りて、手始の功を告奉る」國王大に歡喜んで、「好々、神僧一度出でて速に功を奏し返り來る。實に神通力なり。先夕酒を爛めて其功を賀し稟ん」行者曰く、「酒宴などは且置いて、我第一に陛下に問ひ奉らん。金聖皇后と別れ給ふ時、甚麼なる表記をか取交し給ひしぞ」國王表記の二字を聞くよりも心剗ると思にて、堪兼ねて涙下り、只管泣いて謂けて曰く、

當年佳節慶朱明
強奪御妻殊倉卒

誰留表記繫離情
太歳凶妖忽震聲

是を聞いて行者曰く、「娘々既に表記なし。然ば、彼君宮中に在りし時甚麼身に換へて愛し給ひし物有るべし」國王曰く、「是を問ひて怎麼か爲るや」行者曰く、「彼妖王實に神通有りて當り難し。假令能く是を爲果せたりとも、娘々我が面を認得ざれば、朱紫國の使と云ふとも敢て信じ給ふべからず。是に依つて、彼娘々平日に心に愛し給ひし物一個を見せば、是なりとして信じ給ふべし。其爲に齋行きたし」國王の曰く、「昭陽宮の裡、梳粧閣上に一雙の黄金寶串あり。是金聖常に帶ふる處の物なり。彼奪れたる日は端午の節會なれば、續命五色の絲を臂に懸くるに依りて、脱で有りたるなり。是のみ他が常に愛せしものなり」行者曰く、「然らば其金

串を老孫に給はり候へ」國王遂に玉聖宮に人を遣して是を取出させ、見るより國王忽ち涙下り、「最愛や娘々」と幾聲泣いて、遂に行者に遞與し給ふ。行者是を臂に懸けて、功賞の酒も呑まず、筋斗雲に打跨りて吻哨と一聲、又去つて麒麟山へぞ走り到る。

頓て洞府を尋ねるに、只人語の喧囂きを聞く。竝立みて精を疑し觀看れば、原來獬豸洞門の口にて、大小の頭目あり。約莫五百名餘り爰に座りて保守居たり。行者是を見て頭回し、舊路に到り、嚮に小妖的を打殺したる處に到り、黄なる旗と銅鑼を捜し出し、即ち身を變じて有來有去が像と作り、徑に前み行き、獬豸洞に到れば、猩々出でていふ、「有來去、備回り來らば、快く行け。大王は剥皮亭上に在つて備を等し給ふ」行者又銅鑼を鳴して二の門を入り、忽ち頭を擡けて一座を見れば、八の窓明かにして、亭子の中間に一張の餼金の交椅あり。椅子の上に端座する魔王あり。生得惡像なり。行者見ながら、傲慢にして些の禮をも做さず、外看して只管銅鑼を敲き居る。妖王問うて曰く、「爾來れ」と云へども行者答へず。又問うて、「有來去、爾來れ」と云へども尙答へず。妖王堪へ兼て上前出で、扯住めて曰く、「爾怎麼答へざるや」行者曰く、「元來我不去と思ひしを、大王却て那里に我を遣したり。行て見るに、限なき人馬陣勢を張て、我を見るより推へつ扯きつ、遂に捉へて城の内に擔込れ、彼國王我を見て、則斬ん



金聖皇后
ひさしを
獨思古御



と云しを、幸に兩班の謀士ありて曰ふ、兩家相争ふ時來使を斬らずと、遂に我を饒し、戰書を收めて城門の外に押出し、三十杖鞭打れ、今放れて還り候。斯動靜にては、遠らす那里より逆寄に來り戰ふべし」妖王曰く、「然ば彼國多少の人馬ありや」行者曰く、「我甚だ誑き昏て、多少の人馬有しか深く覺えず。唯彼國は兵器森々と羅列する事麻の生ひたるが如し」妖王笑て曰く、「假令那程の兵器有とも、我寶貝紫金鈴を打揺て烟沙火を飛し、彼國を塵に爲すべき也。爾は今より後宮に往て金聖娘々に報んに、言ふべき事あり。他既に我が彼國を責んと云を聞きて、泣きみて在るなり。爾往て、今見て來し通、彼國人馬驍勇にして管す此國に勝んといへ。且々一時他が心を寛むべし」行者聞て爲濟たりと思ひ此事十分中意とて、則脚門を過ぎ廳堂を越え、見ば此邊總て大厦高堂、此前邊の模様とは大に替れり。直に後邊の宮裡に到れば、宮門の壯麗なる、是則金聖皇后の住處也。裡に入て見れば、兩班の妖狐妖鹿、個々都て美女の形に變じ粧ひて、左右に侍立せり。中間には金聖娘々、手づから香腮を托け、双眸滴涙果然たり。

玉容寂寞胭脂冷
雲鬢蓬鬆翠黛空
自古紅顏多薄命
慳々無語對東風

行者上前て、「言稟ん」と云へば、金聖娘々の曰く、「這潑妖的十分無禮なり。思ふに我今まで

このやうな怪物的を見ず。是怎麼なる野獸なるや」衆婢上前出ていふ、「娘々怒を止め給へ。他は是大王爺々腹心の部下、名は有來去と喚ぶ的なり。今般朱紫國へ戰書を送り給ふ使に行きしなり」金聖些し怒を忍び、問うていふ、「爾戰書を下して、曾て朱紫國へ到りしや」行者曰く、「老孫戰書を持ちて徑に金鑾殿に到り、面頭國君に見え候」金聖曰く、「爾國君に見えて、君王何と曰ひしぞ」行者曰く、「彼戰鬪の事は既に大王に報上たり。婦人に聞え上るに及ばず。唯那君王、娘々の事のみ思想り、言傳の一言稟上たし。然し左右の人の聞くを奈何」金聖是を聞いて、兩班の妖狐妖鹿を退け、行者を近著け給へば、行者前倚りて本像を現はし、金聖に向ひて曰く、「娘々我を恐れ給ふな。我は是東土大唐より西天に往きて佛に見え經を求むる和尚にて、孫悟空と呼做せり。我が師父爾の國中を過るに依りて、關文を換へんとせし處に、爾の妖王に攝來れ給ひし事を聞く。國君の央に依りて、一般尊躬を救ひて國に皈し進せん」とす。依て彼使者有來去と變じて爰に至り候」といふ。金聖尚沈吟して疑はしき面色なれば、行者那寶串を取り進らせければ、金聖見るより涙を發々と流し、座を下りて拜し、「長老果して我を救ひ國に皈らしめ給はば、大恩死すとも忘るべからず」行者曰く、「些しも放心有るべからず。但し此國に有る處の、火を放ち烟を出し沙を降す的、是怎麼の寶貝ぞ」金聖曰く、「那

は是三箇の金鈴なり。彼一箇を持て打揺れば、三百丈の火光發つて人を焼く。第二を揺れば、三百丈の烟光發つて人を熏らす。第三を揺れば、三百丈の黄沙人を迷す。烟と火は還て不打緊と雖も、唯彼黄沙最人に毒なり。倘鼻の孔に入る時は乍ち命を失ふなり」行者曰く、「利害利害。我曾て斯る鈴ある事を知らず。其金鈴今何處に有りや」金聖曰く、「如然寶貝なれば、大王常に腰に帶して、行住座臥身を放たず」行者曰く、「爾倘故郷へ還りたく思ひ給はど、忍へて大王の心に從ひ、欺して彼金鈴を預り給へ。我是を取匿して後、爾を國に販すべし」金聖聞いて、「是理なり。我能他を欺いて預るべし」と懽喜びて這詞に從ひ給ふ。行者は原の有來去と變じ、左右の侍婢を呼出せば、金聖態と、「有來去早く大王を請じ來れ」「發」と喚へて、行者則ち剥皮亭に到り、妖王に向ひて曰く、「大王、今日は娘々萬望尊臨を願ひ給ふなり」妖王大いに懽喜んで曰く、「娘々常に我を嘗り喚く。怎麼なれば今日斯熟懇に我を招くや」行者曰く、「彼朱紫國の事を問ひ給ふ故、我態と偽つて、彼國王最早別に皇后を冊きて、寵愛盛んなりと説話候へば、娘々今は慕ふ心も没果てて、直に我に命じて大王を請じ奉るなり」妖王是を聞いて懽喜び、「爾は實に大功の的なり。我彼國を得ば、爾を以て太宰と爲すべし」行者此言に從ひて恩を謝し、夫より妖王と俱に後宮に到れば、金聖有歡顔色にて出迎へ、手を把て相

攪れ給へば、妖王曰く、「亦娘々の身に障らば我身の疼ん事を怕るよなり」と云へば、金聖曰く、「怎麼這樣的事は曰ふや。且座に請き給へ。我君に説話あり。大王我を愛し給ふ事久しと雖も、未だ枕を俱にせざる其仔細は、我朱紫國に在りし時は、外國よりの貢物、其外何に依らず、大王先看終りて我にも看せ、我預りて收め置く事あり。此國にも三箇の紫金鈴とか云る寶貝ありと聞きぬ。大王我には爲覺もし給はねば、看せもし給はず。况や尙預はし給はじ。僧老の契を做す我に匿し給ふは、然とては薄情し。此故に我尊意に從はず。男といふ者は疑ひ深き者なり」と恨泣きて曰ひければ、妖王忽ち軟痿と成り、態と大いに笑ひて曰く、「娘々管す恨る事なけれ。我が寶貝は腰に著けて則ち這に有り。今日當に爾に收預くべし」と則ち衣を掲て鈴を把出すを、行者は後邊に在りて、睛も轉ず看看居たり。妖王兩三層の衣服を掲起て、三箇の金鈴を取りて、些の木綿を以て口を塞ぎ、一箇の豹の皮の包袱兒に包み、金聖に遞與て曰く、「能々心を用けて藏め置き給へ。必ず是を搖し給ふな」金聖是を受取つて、「我良き納處あり」とて化粧殿の上に藏し置き、小的を呼んで酒肴を安排し來らしめ、金聖は増々妖嬈なる態をなし、妖王に著精靈。行者其間に粧臺に近づき、彼三箇の金鈴を拿りて輕々と持出し、宮門を出でて剥皮亭の前なる人無處に到り、豹の皮の包袱を開き見れば、茶鍾の大さなる金鈴三箇あ

り。木綿の裁布を以て其口を塞ぎたり。行者利害も知らず、彼木綿の塞を三箇一齊に扯了ければ、乍ち一聲の響有て、烟沙火の三箇の的一齊に迸る。悟空急に是を收る事知らず、亭中烘烘として火起り、紅光天地に耀けば、小妖的周章て大王に告來る。妖王驚き飛で來り、能々見れば、有來去金鈴を盗み來りて爰に在り。妖王大いに怒り、「己賤奴大膽、我寶貝を盗みたり。小的ども快く拿へよ」と呼びければ、小妖的の者ども是を聞き、一齊に打てかゝる。行者は金鈴を投捨て本像を現し、金箍如意棒を掣て打て廻る。妖王は寶貝を取收めて門々を嚴く關固め、遁じと取巻きければ、行者は遁れ出るに道なし。鐵棒を收め、身を變じて蒼蠅兒となり、火の無處の壁上に住り、其動靜を伺ひけり。小妖的行者を見失ひ、限々を尋ね搜せども不知。妖王是を聞いて、「斯門々を緊く鎖したるに、那處より逃失せけるや、抑渠は那的なれば、大膽にも有來去と變じて、我に朱紫國の返答を告げ、機に乗じて寶貝を奪ひたるや。既に這山の上にて烟火を放ち風に吹るゝ事ならば、我逆も當ふべからず」先鋒白文豹が曰く、「必定是は孫悟空なるべし。想に必ず路上にて有來去に遇著、彼を殺し銅鑼と旗とを奪ひ取り、然して有來去に變じ來り、大王を欺きしものならん」妖王是を聞いて點頭き、「正是正是、儂が云ふ處有理なり」と小妖們に分付けて仔細と尋搜させ、門々緊しく保守せけり。

三編 卷之八

○行者假名降怪狐

觀音現像伏妖王

斯て行者は壁の上に住り居て、是等の事を聞濟し、又輕々と飛んで後宮に到り、金聖皇后の髪の上に止り、動靜を伺ひ居たりける。此時金聖は、行者が仕損じて生死も知らず成りし事を聞きて大に驚き、案の上に打伏して、朱紫國の方を拜し涙を流し、「君王自妾を救はん爲、神僧に命じ遣し給ふ。然れども神僧事を誤ちて死生も知らず。更に又妖怪に悟られなば、此事を恨として此上の艱難計りがたし。怎生本國に歸りて鸞鳳鴛鴦の契を全うする事を得んや」と聲を發ちて歎き給ふ。行者是を聞きて、「皇后歎き給ふ事なかれ。我未だ死せず。唯我が性急なる生にて、寶貝を奪ひてより心の裡に忍びがたく、是を開き見しに、計らずも烟沙火起り、終に事を仕損じたり。皇后今一度渠を欺き連來り、酒を侷めて睡らしめよ。我又別に謀計を廻し、寶貝を奪ひ取ん」金聖驚き恐れ、「神僧、儂那處に在りて斯の如く説話するや」行者笑つて、「我儂の髪の上に、蒼蠅兒となりて住りたり。皇后早く身近き了鬘を一人呼出し給へ。其姿に變じ

て妖怪を欺くべし」皇后あやしみ疑ふと雖も、渠が言ふに任せ、一人の侍婢を呼出す。其名を春嬌といふ。是玉面狐の妖精なり。召に應じて皇后の前に出て跪下き、「娘々、今何幹有りて召し給ふや」金聖が曰く、「我今大王を請じて安寝せ進せんと思ふなり」春嬌心得、七八人の小妖的を呼出す。那も兎鹿の妖精なり。勝手に燈光を乗つて出来る。行者皇后に教へて立上らせ、一根の毫毛を抜て睡虫と變じさせ、春嬌が面に放ちければ、此妖怪忽ち睡くなり、一邊に倒れて臥しけるにぞ、行者は其骸を物陰に押込みおき、自己春嬌が姿に變じ、許多の小妖的を引列れ、大王の前に至り、「金聖娘々大王を迎へ奉らんとて爰まで來り給へり」といふ。妖王聞いて出向ひければ、皇后の曰く、「當今は烟火も消えて偷人も逃しと聞くゆゑ、大王を迎へて安寝せ進せんと御迎に参りしなり」妖王満心權喜びて、「皇后珍重なり。彼盜人は孫悟空なり。我が部下有來去を殺し、夫に變化し來りて寶貝を奪取らんと爲しを、我幸に早く見答め、寶貝は取返したり。然れども這厮いかに尋れども跡方も見えず。此故に未だ安心する事能はず」皇后聞いて、「悟空は神通ありとか聞けば、疾く逃失せしものならん。大王放心思ふ事を止めて、後宮に入つて安寝み給へ」妖王皇后の懇に迎ふるを見て、固く辭するに及ばず、小妖的に分付けて、「儼等堅く用心せよ」と、終に皇后と打連れて後宮に來りければ、皇后筵宴

を設けて大王に進る。行者は假に春嬌と成つて、酔を把て大王に酒を強ひて酔しむ。皇后また専ら説的は夫妻話をなし、只管酒を勧むれば、妖王骨軟え筋麻れて、只管皇后の身を任せざる事のみ悔恨いふ。皇后大王に向ひ、「鬪程の寶貝は、曾て損じ失せざるや。今は那處に置き給ひしぞ」大王聞いて、「彼寶貝は、天地開闢以前より鑄なしたる處の物なれば、奈何ぞ損ずる事有らん。我今腰に帶ひおきたり」行者一邊に在りて、聞きも敢ず、手を延して一擲の毫毛をぬき、變じて數千の蟲となし、大王の身に放ちければ、衣帶の透間より潛り入り、浪亂に總身を咬ひけり。妖王痒き事堪へがたく、手を懐に入れて痒き處を探り、手に任せて捻り出し、燈光の下にて是を見れば、則ち數十の蟲なり。后笑ひて、「大王の褌衣、思ふに久く漿洗し給はず、此蟲を生ぜしならん」妖王大いに慙愧りて、「我從來此虫生じたる事なし。計らずも今宵醜を出したり」皇后笑ひて曰く、「大王何ぞ是を愧とし給ふや。常言に曰ふ、皇帝身上三個御虱有と、左右且脱ぎ給へ。自らは是を捉捨つべし」妖王終に帶を解き衣服を脱ぐに、悉く蟲なれば、覺えず褌衣も脱捨て赤裸になりける時、腰に掛けし金鈴の袂包にも虱多く著住居たり。春嬌一邊に在つて是を見て、「大王、金鈴の上に虱多きこと計りがたし。我是を取捨て進せん」といふ。妖王怎生質春嬌なる事知らん、急ぎ金鈴を解きて春嬌に遞與す。行者是を

受取りて態と靜に虱を尋ぬ。妖王は皇后と俱に、頭を低れて衣帶の虱を捉捨居たり。行者よき間ぞと、又三根の毫毛を抜きとり、變じて三箇の金鈴となし、豹の皮の袂包まで些少も違はず變じさせ、眞の金鈴は眞袖裡に匿し置き、虱に變じし毫毛を取て身に返せば、數千の虱忽ち失せて、残す拾ひ捨たる如し。大王衣帶を著しければ、春嬌質的の金鈴を大王に捧ぐ。妖王是を把て又腰に帶け、「我皇后と俱に寐ん事を思へども、那刺針にさよるゝ事を怕る。我西宮に歸りて心安く睡るべし」と皇后に別れて西宮に趣きけり。彼春嬌が面に放ちたる瞋睡蟲を身に返し、皇后に寶貝を奪ひし事を語り、「頓て本國に歸し奉らん」と云置きて、隱身の法を行ひ、解鎖の法を以て門々を開きて走り出で、門外に立つて高聲に呼つて曰く、「賽太歳早く金聖皇后を返せ」と叫ぶ。小妖的是を聞いて驚き看ば、門々残らず開きたり。慌得て門を堅く關し、宮中に入つて斯と報ず。宮女是を通ずれども、妖王酒に酔ひて目覺ず。左右する間に、天曉に到る。行者門外に在つて只管罵り、終に鐵棒を擧つて洞門を打破り入んとす。妖王此物音に睡を覺し、門外に跳り出で、行者を見て大いに怒り、「爾那厮なれば、爰に來り我が門を破りたるぞ」行者罵つて曰く、「爾潑妖怪、眼大いなりと雖も我を認得ず。我は是聖天大聖孫悟空なり。金聖皇后を把返さん爲、爰に來つて爾を亡滅すなり」妖王同く罵つて曰く、「爾は唐僧に

從ひて西天に行き經を求むると聞きつるに、怎生今朱紫國の奴となり、爰に來りて死を求むるや」行者大いに怒り、「説話不知の潑怪的、今朱紫國の王家、我をして父母神明のごとく尊む。何ぞ厮になるべきや」と鐵棒を把つて打つて懸る。妖王宣花斧を持って度り合ひ、五十餘合戦ひしが、妖王不當とや思ひけん、忽ち風頭の方に飛退き、呼つて曰く、「孫悟空少時待て、我今爾と戦はずして、金鈴を揺りて見すべし。爾逃ぐる事を止めて見物せよ」行者曰く、「我も又金鈴を揺りて見すべし。爾逃ぐる事を止めて見物せよ」妖王曰く、「爾が方にも金鈴有りや。抑那國より傳へ受けしぞ其謂れを聞かん」行者曰く、「且爾が金鈴の謂れを聞かん」妖王曰く、「我以金鈴は、大清宮八卦爐中にして、太上老君の久く煉結就へ、金を以て作り給ふ處の金鈴、最無上の至寶なるを、故あつて我に授け給ひしなり」行者曰く、「我此金鈴も、爾が云ふ處と同じ。然れども爾が金鈴は雌なり、我が金鈴は雄なり」妖王曰く、「是は仙家金丹の寶貝、何ぞ雌雄の有るべきぞ。爾且揺りて見せよ」行者曰く、「爾且先へ揺るべし。妖王嘲笑つて、頓て金鈴を取り出し、先第一の鈴を打揺りけるに、更に火出る事なし。妖王驚き、又第二の鈴を打揺るに、烟發らず。増々慌得て第三の鈴を振揺がせども、又更に黄沙起る事なし。妖王驚き怪み、「偈は我が此金鈴寔に雌にして、雄に逢ひて怕れて烟火を發せざるや。怎麼はせん」

とぞ獨言きけるを、行者喝々と打笑ひ、「然らば我金鈴を振つて見すべし」と三箇の金鈴を拿出し、三箇一齊に打振りければ、烟沙火一同に迸る。此時行者咒語を唱へて、異の方に向ひて一口の氣を吐けば忽然に旋風吹起り、火勢盛んに烟渦巻き、黄沙滿天に飛散りて、面を向くべきやうあらず。妖王恐れ駭き、逃げんとするに道なく、狼狽騒いで苦み廻り、既に命も危き處に、只聽く空中に聲有つて、「孫悟空、我來れり」と呼はる者あり。行者頭を回して是を見れば、是則ち南海補陀峯教主觀世音菩薩なり。左の御手に淨瓶を托著け、右の御手に楊柳を拿り、甘露に漬して火の上に洒下給へば、烟火跡なく消失せて、黄沙も乍ち納りぬ。行者は金鈴を取藏め、空中に飛降り、合掌して菩薩を拜し、「當下那里へ往せ給ふや」菩薩曰く、「我態々爰に來りて妖怪を降伏す。他は是我が跨的の金毛狢なり。他を守る處の牧童睡りし間に、此畜生繩を咬斷り、朱紫國に到り國王の災を拂はんとす」行者曰く、「彼妖精、朱紫國王を惱し、皇后を狂惑し、害を爲す事少からず。何ぞ災を拂ふと曰ふや」菩薩又曰く、「儂仔細事を知らず。朱紫國王當時太子たりし時獵を好み、よく弓射る事をなす。西天從來佛母孔雀大明王菩薩あり。生める處の雌雄兩個の孔雀あり。渠等山坡下に遊び居けるを、太子一矢放つて雄を射て疵付けたり。雌の孔雀其矢を取りて返り、佛母孔雀明王へ訴へたり。佛母則ち是を聞いて

朱紫國の太子三年折鳳の災を與へ、此罪を報はしめよと命ありしを、時節我彼狢に乗りて一邊に居合せ、此詞を聞居たり。此業畜又是を心に覺居て、彼國の災を拂はんとして、終に妖怪と成て皇后を奪ひとり、三年洞の裡に隠れ住み、今年の當今數滿ちて、儂國王の災を除き、我來て妖邪を收め歸るなり」行者聞終りて、「這樣の故事ならば、他が命を助け候はん」菩薩魔王を一喝し給ひ、「汝業畜、なほ俱に還らず、何の時を待んとするや」妖怪地の上に倒轉びて本相を現しければ、菩薩其背上に打騎り給ひ、「畜生、三箇の金鈴は奈何せしぞ」行者聞いて、「老孫是は奪ひ置き候ひぬ」と菩薩に金鈴を返し奉る。菩薩取つて狢の項に繋ぎ掛け、南海に回り給ふ。

斯て行者は、鐵棒を輪して獅多洞に打て入り、小妖的を塵になし、宮中に至て金聖娘々に見え、首尾を委く語り、「今より本國へ歸し進らせん」と云ひけるにぞ、皇后大いに歡喜び、拜謝する事盡す。行者頓て草を束て龍の形を作り、是に皇后を跨上しめ、「娘々怖るゝ事なかれ。堅く眼を塞ぎて、管す開き給ふべからず。我暫時に本國へ送り進らすべし」と、神通を以て彼草龍空中を走らしむる。皇后は眼を塞ぎて、唯耳に風の音を聞くのみにて、未だ半時ならざるに、忽ち朱紫國の宮中に立返り、行者雲を排きて殿上に下り、「皇后眼を開き給へ」と呼はり



けり。此聲を聞いて、金聖兩眼を開き見給へば、思ひきや我本國の宮中なりければ、懽喜び給ふ事限りなし。國王見るより龍床を下り走りより、絶て久しく逢はざりし思想の情を述べんとて、皇后の玉手を拿り、抱き倚んとし給ひしが、猛然として地上に倒れふし、「皇后の身に刺針生ひたり。我手疼みて堪へがたし。早く救へ」と叫び給ふ。行者走り依つて助け起し、謂て曰く、「皇后妖怪に捉へられ給ひし上首、一人の道士來り、五色の仙衣を贈り皇后に著せしむ。然るに其仙衣より刺針生ひて、人の近く事能す。此故に三年の間、終に身を沾し給はず」といへば、國王是を聞いて且懽喜び且愁ひて、「此刺針を怎麼せん」と歎き給ふ。此時空中に聲有りて、「大聖有や。我來れり。刺針の衣愁ることなかれ」行者頭を回して是を見るに、是真人張紫陽なり。雲を下りて宮中に到り、行者に向ひ禮を施し、「小仙三年前佛會に趣き此國を過るに、國王三年折鳳の災ある事をきく。時に妖怪皇后を攝去るをみる。怕くは妖怪の爲に沾され給はん事を傷み想ひて、一件の古き棕衣を將りて、變じて五色の霞裳となし、皇后に與へて著せしめたり。彼刺針は棕毛にして、三年の間、皇后の身を守りたる物なり。當今大聖功を立てて、皇后を救ひて本國に皈る事を得たり。此故に我來りて那棕衣を脱しめんとす」皇后眞仙を見て、大恩を謝し禮拜す。真人立寄りて棕衣を脱しめ自ら著し、人々に向ひ辭し別

れ、空中に升りて歸り給ふ。國王及び皇后も、天に向ひて禮拜し、夫より大いに酒筵を設け、三藏師徒を接待しけり。行者三藏に告げて、嚮に預け置し戦書を出し國王に見せしめ、其外獬豸洞にて有りし事ども、彼是落もなく説語りければ、國王はじめ衆位の官員輩、感謝して拜禮する事絶間なし。國王は只管に此國を譲らん事を曰ひけれども、三藏行者固く辭して、唯西方に趣かん事を急ぐ。國王今は没奈何、關文に印を寫し、三藏に遞與ければ、師徒四人國王に辭語を告げ、城門を立出でければ、國王を首め衆位の官員輩、遠く送りて別れけり。

○盤絲洞七情迷本 濯垢泉八戒忘形

斯て師徒四個は、朱紫國を離れてより、又多少の山水を経歴し、覺えず秋去り冬盡きて、又春光の明に値ふ。或時一座の邨莊に望む。三藏馬を下り、「我今此人家に往きて些の齋を要め來らん」行者笑つて曰ふ、「師父齋を要め給はば、我門代りて行くべし。那ぞ自親師父の行き給ふ事あらん」三藏曰く、「平日に爾們、那邊の遠き處にても勞を厭はずして齋を乞來る。今日人家既に近く、又天氣清明なり。我自ら去きて乞來らん」と、遂に鉢を取つて歩み行き、直に莊前に至り給へば、前に一座の石橋あり。寂々寥々として雞犬聲もなく、一個の茅屋の奥に、四

個の美女窓の下に在つて、鸞を描き鳳を繡す。又庭上に三個の女子毬を踢て遊び居たり。三藏便ち橋上に立つて、「貧僧は東土大唐より西天に至り經を要むるの僧なり。今檀府に來りて齋を乞ひ奉る。萬望は些しの齋を惠み給へ」彼女子等是を聞き、大いに歡喜び、一齊に門を出來り、「長老疾、此方へ上前給へ」と、三藏の手を抜き腰を推して、茅屋の一邊なる一個の石洞の裡に押入れけるにぞ、三藏驚き、偕は他們我を害せんと爲るならんと、身を轉して逃さんとし給ふ。彼女子們都て武藝あり、三藏を扯倒し、繩を以て洞中に吊上げ、個々衣服を脱ぎ肚を露しけるが、忽ち臍の孔中より蛋の粗細なる白き糸を扯出し、玉を飛ばし銀を散すがごとく、須臾の間に莊門を一遍に罩ひけり。三個の徒弟は、路の一邊に歇みて在りけるが、莊門忽ち雪に埋みたる如く、一片の白光と變じたるを見て、三個大きに驚き、「是管ず師父の妖怪に逢ひ給ひしならん。早く行きて救ふべし」と駈出んと爲しけるを、行者兩個を住め、一僮們騒ぐ事なかれ。我去きて見て來らん」と直に村莊に走り行き、彼白光を見るに、白糸を經緯に引きはへ、千萬層の厚さあり。手を以て是を押せば、却て和かにして粘あり。行者甚麼の物なるを知らず、頓て咒語を唱へて此地の土地神を呼出し、「此處は何と號へる地方にて、此白糸は怎麼なる物ぞ」と尋ねれば、土地神答へて曰く、「此前邊なる山を盤絲嶺と號け、嶺下に一

箇の盤絲洞あり。洞中に七個の女怪居住せり。他等俱に蜘蛛の精にて、白糸は則ち蜘蛛の糸なり。又此南三里に一座の濯垢泉あり。此泉天生の熱水にて、他等毎日三遭つづ那里に行きて洗濯するなり。今日も頓て出來らん。少時待つて見届け給へ」行者是を聞いて先土地神を放ち返し、一個の蒼蠅兒と變じ、草頭に住りて待ちける處に、不多時白糸盡く消失せて、原の村莊を露し、莊門の裡より七個の女子歩み出でたり。行者則ち翅を延べて、前なる女の頭に住り、他等に從ひ行きける處に、果然南三里計り行きて一座の門牆あり、十分壯麗なり。一個の女子扇門を推排けば、中に一塘の熱泉あり。五丈に一丈餘りの廣さにて、深さは纔三四尺に過ぎず、水は珠よりも清かなり。池の汀には兩箇の漆塗の衣架を構へたり。行者又翅を延べて衣架の上に住りて伺ひけるに、彼女子等皆一齊に衣帶を脱ぎ、「我們早く洗澡し、家に飯りて彼和尚を蒸して吃はん」と、個々雪の如き肌を露し、浴池に入りて笑ひさわぎ、水を躍せ波を翻して戯れけり。行者是を見て思ふやう、今他等を打殺さんは何より安し。然れども常言に、男不與女闘と云へば、却て我名を失ふべし。且一箇の謀計を以て他等を動かさざるやうにすべし、と忽ち一翅の老鷹と變じ、衣架の上に掛けたる七個の衣帶を盡く掴み取り、嶺上に飛去つて原の路傍に立歸り、本相を現し、八戒沙僧に此事を説語りければ、八戒是を聞いて、「師兄、妖



八我池中
 愛鮮魚
 騷女怪

怪と知らば何ぞ是を打殺さざる。是草を斬つて根を除くの謂なり。我今行きて打殺し來らん」として釘鉈を取つて出行きけり。沙僧行者に謂て曰く、「今師兄の曰ふ如くならば、師父は極めて彼邨莊の裡に居給ふべし。我行きて伴ひ皈らん」として、頓て彼石橋の邊に走り行き、茅屋の裡に入りて見れば、妖怪一個も在らず、一邊の石洞の裡を覗き見れば、爰に三藏は細縛められ、御座したり。悟淨走り入つて縛を解下して、急ぎ行者が待居る路傍へ皈りければ、行者僅喜び三藏に向ひ、「此後齋を求め給はど我々に任せ置き給へ」と云へば、三藏打點頭き、「我假令餓死するとも、此後自ら齋を要むべからず」として悔みけり。

却説七個の女子は、衣服を鷹に取られて出する事能はず、水中に蹲り、個々鷹を罵り居たり。此時八戒門を排いて入來り、是を見て打笑ひ、「女菩薩、我をも同く洗濯させて給はるべし」と、直綴を脱捨て撥的水中に飛入りければ、女妖等は大いに怒り、「此和尚十分無禮なり。出家人の身として、女人と同く洗濯せんとするや」と一齊に取圍んで打んと爲るを、八戒原水練の達者なれば、水中に在つて忽ち變じて一個の鮎魚と作り、女子等が肌を探りて狂ひ廻れば、女妖等大いに困り果て、西へ追へども捉當てず、東へ搜れども手を滑し、那方此邊と亂轉し、女妖們都て心倦み精勞れて詮方を知らず。八戒又水中より跳り出で、本相を現し、直綴を著し、

釘鉈を揚げて罵つて曰く、「爾等我を鮎魚と思ふや。我は是東土大唐より西天に至り經を要むる長老の徒弟、猪八戒とは我が事なり。爾們我が師父を捉へ蒸吃はんとす。大膽なる女怪ども、性命を免し難し。我が釘鉈を受けよ」として走り倚て突かんとすれば、女怪等大いに狼狽へ、水中に跪下き八戒を拜し、「我門眼有て珠なく、爾の師父を捉へて家に置きたり。今より師父の性命を助けて、些の盤費を送りて西天へ去しめ進せん。萬望我々が命を助け給へ」八戒曰く、「糖を嘗らして君子を欺く常言あり。我那ぞ其甜口を信ずべけんや。早く頭をのべて我が釘鉈を吃へ」として只管上前で突きかよる。女怪等慌得て、恥を覆ふに暇あらず、臍下に手を掩著て跳出で、個々臍より彼糸を操出し、四方八面より糸をかけ、忽ち八戒を當中に罩ひ住めたり。八戒は浮雲の中に圍まれたる如く、脚を舉れば躓き倒れ、飛出んとすれば頭支へ、右に轉び左に倒れ、眼昏みて、唯地に臥して呻吟居たり。女怪們は八戒を罩ひ住め、個々赤裸にて村莊に販り、舊衣を出して身に纏ひ、石洞の裡を見れば唐僧在らず。「諸は這厮逃失せたり。我門誤つて唐僧を捉へ、却て此恥を蒙りたり。先師兄の許に行きて商量なさん」と、七個の女妖一齊に西を指してぞ出行きける。少時ありて八戒頭を擡げ見れば、纏ひたる絲些しく破れたり。漸々是より這出でて、三個の待居し處へ驅歸り、「利害々々。我今女妖等が絲に罩はれて、危

く命を助かりたり」とて頓て又村莊に至り、一把の火を放つて石洞茅屋を燒盡し、師徒四個立出でて、西に向ひて急ぎ行きぬ。

○情因 舊恨 生 災毒

心主遭 魔幸破 光

原來此盤絲嶺の西六七里、大路の一邊に一座の黃花觀あり。觀中の道士は則ち彼七個の女怪と同學の兄弟にて、常に往來をなしける故、此日女怪等直に觀中に来り、道士に見えて、唐僧を捉へて恥を蒙りたることを語り、種々商議して居る處に、三藏は是を知らず、西に向ひて路を急ぎ、不多時觀門の前に至り、「我們少時此觀中に休足し、便宜を見て齋を要むべし」と、徒弟等と俱に門を入れば、主の道士出迎へ、「老師父は何處より來り給へる」と問ふ。三藏手を拱いて答へて曰ふ、「貧僧は東土大唐より西天に至り佛を拜せんと爲るの僧なり。當今仙宮を過るに依りて、少時休足を爲さんとす」道士是を聞いて大いに懼び、「諸は聞及びたる東土の聖僧におはし候や。小道大いに失敬をなしたり」とて四衆を正堂に請じ、裡に入り童子に五鍾の茶をくませ、道士手親三藏に獻じ、行者は師父の後に座し形の小さきを見て、是を三徒弟とや思ひけん、先八戒に茶を獻じ、次に悟淨、次に行者に進め、自親一鍾を取つて相陪す。行者は

嚮より、道士が唐僧と聞くより大に喜び、兼て準備したる如く急速に茶を進め、又四鍾の茶には都て赤棗を入れ、道士が茶には却て黒棗を入れたるを見て、心中怪み、茶鍾を手に取り少時伺ひ居る間に、三藏八戒沙僧は、何の心もなく、都て茶を吃畢りけるが、忽ち三個一齊に「呵呀」と叫びて倒れけり。行者驚き、怒り罵つて曰く、「此畜生、我と爾と原來何の怨もなし。怎麼毒藥を將て我が師父を害したるや」と茶鍾を嘴的と投中けたり。道士袖を擧げて架住め、大に怒つて曰く、「懶潑猴、自ら禍を招き、却て怨なしと云ふや。爾們嚮に盤絲洞に入つて齋を乞ひ、濯垢泉にて洗澡を爲さずや」行者曰く、「汝既に盤絲洞濯垢泉の仔細を知る。諸は彼七個の女怪は、都て爾が老婆なるべし。且我が一棒を試看よ」と耳の中より金箍棒を把出せば、道士も急に身を回し、一口の寶劍を取り、正堂に在りて戦ひけり。時に忽ち奥の方より、七個の女怪一齊に出來り、個々懷裡を引開き、臍の孔中より糸を作出し、行者を罩ひ住めんとす。行者嚮に八戒が説話を聞きたれば、絲を掛けられては不當と、身を轉して空中に飛降り、霎時息を休むる間に、忽ち彼觀門殿閣も、梭を穿くが如く鋪罩ひ、看看一片の銀世界と變じたり。行者是を見て心に驚き、「利害利害、我幸に早く脱れ出でたり。倘一度是に罩はれなば、怎生して身を動すべけんや」と霎時沈吟したりけるが、頓て又一個の計策を思ひ著き、七十根

の毫毛を抜き、七十個の小行者と變じさせ、金箍棒を變じて七十條の父兒棒となし、一個の小行者毎に父兒一條づつ持たせ、彼鋪單ひたる絲の廻より搔攪させれば、遂に裡より七個の蜘蛛を引出しけるに、彼蜘蛛個々二尺餘の大いさにて、俱に手脚を縮めて一團となり、「命を助け給へ」と叫びけり。行者遂に小行者を身に返し收め、父兒棒を集めて鐵棒となし、彼蜘蛛を件一に打殺す。彼道士又劍を揚げて跳り來り、行者に向ひて戰ふ事五六十合、道士漸々に力勞れて、些し身を退くと見えけるが、忽ち衣服を解捨て兩手を上に指擧げければ、兩邊に一千雙の眼ありて、「潑刺」と一聲叫ぶと等しく、眼中より金光迸放出て十分利害。行者此金光黃霧の中に罩ひ籠れ、大に驚き、急ぎ脱れ出んとすれども、脚を動す地少く、上に向ひて飛出んとすれば、却て金光に打落され、左に廻り右に轉じ、汗を流して働けども、鐵桶の裡に在るが如く、脱るべきやうも無りしが、又忽ち一箇の計策を思ひ著き、一般身を搖し、變じて穿山甲と做り、土の中に鑽り入り、地下に在りて二十餘里を鑽り、漸々にして頭を出し見れば、彼金光十餘里の裡を罩ひ、此處は光も無ければ、遂に地上に立出で本相は現しけれども、遙々の地下を潛りて精心を勞らかし、再度戰ふべき氣力もなく、「斯ては怎麼して師父兄弟等を救ひ得んや」と涙を流して立たる處に、向邊の方より一個の婦女、身に重孝を穿、手に一盞の飯を持

ち、涙を流して走り來りければ、行者是を見て、世間又我と同じ悲む人あり、彼婦人は誰爲に哭くやらんと、上前倚つて問うて曰く、「女菩薩、何個を失ひて這様に哭き給ふや」といへば、彼婦人涙を押へて曰く、「我が夫黃花觀の道士と争ひ、毒藥を以て殺さる。我此一飯を墓に備へて、些少夫婦の情を露はさんとす」行者是を聞いて潑々と涙を流し、「女菩薩は丈夫の爲に一飯を備へて祭り給ふ。我が師父も又彼道士が毒に害せられ給へども、我是を祭るべきやうなく、心の疼堪へがたし」婦人が曰く、「長老は那國より來り給へる人ぞ」と問ふ。行者則ち、東土より爰に來り、觀中にて彼道士と戰ひし事、其身金光に罩圍られんと爲ししを、纜に身一個遁れたりとて、萬般落もなく語りければ、婦人聞終りて云ふやう、「諸は長老、彼道士を知り給はず。他が名は百眼魔君とも、又は多目怪とも云ふなり。他を降さんと思ふには、那里に一位の聖賢あり、此聖賢管すよく金光を破り、道士を降伏し給ふべし」行者急ぎ再拜して、「女菩薩、萬望は其聖賢を教へ給へ」婦人が曰く、「此南千餘里に紫雲山といふ山有り。其山中千花洞に一位の聖賢、昆藍婆菩薩といへるあり。是を請來り給ひなば、那道士を降伏せん事疑なし」と仔細に説教へ、「我は爰にて別れ候はん」と云ふかと思へば、忽ち空中に飛上り、黎山老姆と現れ、「我龍花會上より、爾が師父を救はん爲爰に來れり。爾紫雲山に至るとも、我が

教へし事を告る事なかれ」と西をさして飛去り給ふ。行者則ち空中を禮拜し、忽ち筋斗雲を放ちて打跨り、紫雲山へと飛行りけり。

斯て千花洞に至りければ、更に雞犬聲もなく、静々清々たる洞中に、一個の老婦榻上に座し居たり。行者是ぞ彼毘藍婆菩薩ならんと思ひ、進み入りて拜しければ、菩薩揚を下りて曰く、「汝は孫大聖にあらずや。今何幹ありて來り給へるぞ」行者曰く、「菩薩怎麼して我を認得給ふや」菩薩曰く、「爾前年天宮を開せし時、普天普地都て皆名を傳へ、誰か爾を知らざらん」行者曰く、「老孫今は佛門に歸依し、唐僧を守護して西天に至る。路にて今日黄花觀の妖怪に出遇ひ、難に逢ひぬ。萬望は菩薩彼妖精を降し、師父を救ひ給はるべし」と云へば、菩薩曰く、「我魚藍會に赴きしより以來已に三百餘年。姓を隠し名を埋み、未だ會て門を出でず。今日誰か爾に我隱室を教へつるや」行者曰く、「老孫原一個の地理鬼、會て他の教を受けず、自ら知りて參りしなり」菩薩曰く、「我本外に出でじと思へども、爾已に經を求むるの善事あれば、是を助けでやは有べからず。我今爾と俱に去くべし」とて頓て雲に駕りて打扮給へば、行者後に從ひて、不多時黄花觀に至り、金光艶々たるを望み、行者指差して曰く、「彼金光は則ち妖精なり。菩薩今何の器械を以て他を降し給ふや」菩薩曰く、「我子昂日星官が煉へたる處の

綉花針あり、是を以て降すべし」と衣領の裡より眉毛の粗細なる五六分の長短なる綉花針を取り出し、空に向ひて投上げ給へば、一聲の響と俱に、金光忽ち消失せて、彼道士身を動かす事能はず、直に原身を現しければ、七尺計の大蜈蚣なり。行者大いに喜び、「妙なるかなく。早く針を尋ね候はん」と云へば、菩薩掌を展べて、「針は返りて爰に在り」とて、遂に行者と觀中に入り唐僧等を見るに、三個俱に地に倒れ、早こと斷れたる光景なれば、行者聲を發ちて哭きにける。菩薩住めて曰く、「大聖悲む事なかれ。我懷中に解毒丹あり。爾に與へて唐僧を救はしめん」と、一個の破紙に包みたるを取り出し、紅き丸藥三粒を行者に與へ給へば、行者急ぎ三個の口を推開らき、個々丸を吹入れけるに、須臾の間に三個とも嘔吐をなし、毒藥を吐出し、忽ち正氣に復りけり。行者則ち師父に向ひ、有りし動搖を仔細と語りければ、三藏はじめ兩徒弟も、深く菩薩を拜謝しければ、菩薩も夫々答禮し、彼蜈蚣を指に掛けて千花洞にぞ歸られける。八戒是を見て、「此媽十分利害。那樣の惡的を翫弄びぬるや」と駭けば、行者曰く、「先に他が小兒は彼昂日星官なるよし語れり。星官は一隻の公雞なり。思ふに此婦人は、極めて一個の母雞ならん。雞よく蜈蚣を伏すと。此故に容易他を捉へたるならん」と、三個是を語りつと、且行者が辛勞を謝し、大路に沿ひて出行きけり。

三篇 卷之九

○長庚傳報魔頭根

行者施為變化能

一時秋の初節に當り、一座の大山に至る。其高き事天と等く、松柏日を覆ひ、巖石峙立ち落阻狭し。三藏心中に怕をなし、「徒弟等能々心を用ひよ」と曰へば、行者曰ふ、「老孫光景を見届けるべし」と頓て虚空に飛升り、前面遙に眺むる處に、忽ち雲端に太白金星現れ給ふ。行者急ぎ進み倚りて、「李長庚何國に去き給ふや」と問ふ。金星答へて曰く「我今此山に妖魔有る事を大聖に告んと思ひ、態々爰に来れるなり。此山行程八百里、獅駝嶺と號く。山中に獅駝洞と云る有り。爰に三個の妖魔有り。他等都て神通廣大にして、部下に四萬八千の小妖あり。大聖十分心を盡して變化の妙を施し給へ。若些少にても怠慢あらば、管す爰を過ぎがたからん」行者是を聞き、再拜し、頓て金星に別を告げ、雲を下りて三藏に此由を報ぐ。三藏涙を流して曰く、「斯の如く艱難多く、怎麼して此地を過ぎ、何の日か西天に至り佛を拜する事を得んや」行者いはく、「金星這樣に告ると雖も、管す五六分は虚言有らん。且八戒沙僧は、爰に在つて、

師父を護りて待給へ。我嶺に登りて伺ひ來らん」と又雲に跨りて飛去りけり。少時有つて行者雲より下を臨み見るに、忽ち山の背後に叮嚀叮嚀と鈴の音聞えて、一個の小妖怪、一桿の令字を書きたる旗を捧げ、腰に鈴を著けて出来る。行者是を見て思ふやう、他管す山廻りの小妖なるべし。我他を欺きて妖魔が消息を問ふべし、と急ぎ雲より樹陰に下り、一個の小妖と變じ、他と同じ旗を擔げ、鈴を帶け出來り、彼小妖に行會ひければ、小妖見答めて曰く、「爾は何里より來れる的ぞ」行者笑て曰く、「爾却て一家内の者を認得らざるや」小妖が曰く、「我が城中に汝を見ず。怎麼認得んや」行者曰く、「汝認得ざるも理なり。我今まで焼火的を勤居し故、平日に汝と會ふ事なし」小妖頭を打揺つて、我が家の焼火的に原汝を見ず。且我大王家法厳しく焼火的は常に火を燒き、山巡りは常に山を巡る。既に焼火的となり亦出て山を廻る者なし」行者曰く、「諸は爾未だ知らずや。大王我が怠慢なく焼火的を勤めしを見給ひ、當般陸して巡山となし給へり」小妖曰く、「我巡山の、一班毎に四十名あり。十班俱に四百名、大王より個々に牌を與へて號となし給ふ。爾其牌ありや、行者曰く、「我怎生牌なからん。然も常般新牌を領して來れり。又爾も定めて牌有るべし。疾出して我に看せよ。我も又爾に見せん」小妖就ち衣服を掲げ、一個の金漆牌兒を取出しけるに、正面に「威鎮諸魔」と四箇の金字有りて、背に

「小鑽風」の三箇の眞字あり、行者是を見て、諸は巡山的は都て風の字を下に附るならんと、手を腰の間に指入れ、一根の毫毛を抜き金漆牌兒と變じ、背に「大鑽風」の三箇の文字を露し、取出して看せければ、小妖大いに驚き、「我等都て小鑽風と名を呼ぶに、怎麼備一個大鑽風といふや」行者曰く、「大王既に我を巡山的に陞し給ひ、此新牌を賜り、大鑽風と號けて、爾們一班の四十名を司らしめ給ふ。小妖是を聞いて急ぎ拜して曰く、「長官、諸は新に職を蒙り給へり。我實に長官の面を知らず。當下の無禮を許し給へ。我が一班の鑽風等、皆南嶺の下にあり。我快く去きて他們に報じ候はん。長官慢々來り給へ」とて嶺の那邊へ走り去る。行者小妖が言に従ひ、南嶺の下に至れば、果的一班の小鑽風爰に在つて、個々身を屈めて出迎へ、長官に拜謁す。行者是を見て急に巖頭に登つて座を定め、衆鑽風に對して呼つて曰く、「當般大王新に我を大鑽風に陞し給ひし謂れ、今爾等に説話らん。耳定に聞くべし。近頃大王、東土より來る唐僧を吃はんと思ひ給へども、孫悟空といへる大徒弟、神通廣大にして能く變化を作と聞く。然らば彼悟空、萬一小鑽風の像に變じ、汝等が中に交り居て、洞中の消息を伺ひ有んも計り難し。此故に我を大鑽風に陞し、爾等が群黨中を查勘せしめ給ふ。我今汝等に問ふ事あり。夫を答へざるは假鑽風なり。捉へ行きて大王に訴ふべし。爾們眞の鑽風に相違なくば兼

て大王の手列は知るべし。且速に是を答へよ」此時一個の小妖進み出て曰く、「我等能大王の手列を知れり。一の大王は、神通廣大にして能く變化をなし、法身を現し、一度口を開き給へば其廣き事城門のごとく、一口に十萬天兵を呑み給ふ。二大王は鼻蛟龍のごとく、假令鐵背銅身の人なりとも、一度其鼻に卷かるゝ時は、終に命を失ふなり」行者曰く、「爾が言ふごとく相違なし。爾は眞の鑽風にして、假鑽風に非ず」亦一個の小妖上前出て曰く、「我も又稟すべし。其次の三大王、是は却て凡間の人に非ず。雲程萬里鵬と號し給ひ、能九萬里を飛行し、又一件の寶貝あり。陰陽二氣瓶と號く。倘此瓶中に人を裝入るれば、半時の間に化盡けて血水となるなり」行者是を聞いて心中に思ふやう、妖魔が手列怖るゝに不足。唯此寶貝の瓶を怖るべし、と暗に驚きながら、色にも出さずして曰く、「爾が言ふ處違はず。爾は假鑽風にあらず」又一個の小妖進み出て曰く、「當般大王唐僧を吃はんと思立ち給へども、一大王二大王は、却て是を要め給はず。三大王強ひて彼を要め給ふなり」亦一個の小妖上前出て曰く、「三大王原此地の人にあらざ。五百年前、此西四百里隔つ獅駝國に來り、彼國の君臣百姓盡く喰盡し、因てかの城地を奪ひ居住し給ひし處、近頃唐朝より一個の聖僧を西天に遣し經を求むると傳聞き、彼聖僧は十世修行の好人にて、其肉を喰ふ者は不老長生を得ると聞き、他を捉へんと思へ

ども、他が徒弟孫行者、神通廣大なりと聞いて、一個の力に及ばざれば、爰に來つて兩個の大
 王と血縁を結び、力を合せて唐僧を拿んとし給ふなり」行者曰く、「爾等が言すところ一件違
 はず。先大王に此由を報じ、亦來つて查勘を爲さん。嚮に山を廻りし鑽風我に跟ひ來れ。大王
 に見えさせ、賞錢を賜ひ得さすべし」山にて逢ひし嚮の小妖大いに懼喜び、行者と列立ち一里
 計り過行く處に、行者忽ち鐵棒を把出し、小妖を打殺す。然して此小妖が像に變じ、旗を擔け
 鈴を著け、獅駝洞に尋ね行きけるに、果然一座の洞門あり。門前に許多の小妖的群り居て、行
 者が來るを見て、「小鑽風歸りたるか、快く入つて大王に見えよ」といふ。行者「應」と一聲
 應へ、直に門内に入り、前面を看やれば、堂下に三個の妖魔並び座し、兩邊に幾百の小妖伺候
 して、個々甲冑を帶し器械を把り。威風凜凜として殺氣騰々たり。行者些しも怕れず、遂に堂
 下に走り行けば、三個の妖魔問うて曰く、「爾山を廻りて唐僧が消息を伺ひたるや」行者曰く、
 唐僧は未だ伺ひ得ず。却て孫悟空を伺ひ來れり」妖魔が曰く、「爾怎麼して孫行者を伺ひたる
 や」行者が曰く、「彼東嶺の那邊に、一個の和尚澗の上に蹲りて鐵棒を磨き居たるが、其像開
 路神のごとく、若身を起さば十餘丈の長有るべし。彼鐵棒も又椀程の粗細あり。他只管口裡に
 獨言くを聞くに、我此鐵棒久しく神通を顯さず。今是を磨いて洞中に入り、三個の大王を打殺

し、一大王は皮を剥ぎ、二大王は骨を削り、三大王は筋を抜き、假令門を閉ぢて防ぐとも、我
 蒼蠅兒と變じて門の縫裏より潛り入り他等を捉へ殺さんと云へり。我是に依つて孫行者なる
 事を悟り候」老魔是を聞いて一身汗を流し、兩個の妖魔に對して曰く、「爾等聞け。我曾て
 孫行者が武勇を聞及びしが、果的斯の如く、却て我を討んとす。他又蒼蠅兒に變じて來ら
 と云ふ。我此洞中、往昔より蒼蠅を生じたる事なし。若蠅の來るを見れば、爾等力を用ひて拿
 べし。管す遁す事なかれ」行者是を聞いて、一邊に身を退き、密に一根の毫毛を抜いて蒼蠅に
 變じ、老魔が臉に向ひて放ち遣りければ、老魔大いに驚き、「諸こそ孫行者來りたれ。快く拿
 へよ」と呼びつと、個々鎗を把り刀を振り、小妖等も一齊に器械を取て跑來り、上を下へと立
 騒ぎ、蠅一隻に騒動するにぞ、行者好笑さ堪へかねて、覺えず吸々と笑ひけるが、忽ち我が眞
 の臉を笑ひ出し、是を變じ正さんとする間に、彼三魔王目疾く是を見附け、急に行者を捉へ、
 老魔に向ひ、「大哥々々、是を見給へ。這厮則ち孫行者なり。想ふに這厮、かの小鑽風を打殺
 し、却て其模様變じて來りし者ならん」此時兩魔を初め衆部の小妖ども、一齊に立かより、
 遂に行者を引倒し、「他遁法を知る故に、繩を以て縛めがたし。陰陽二氣瓶の中に裝入れて化
 し殺すには如かじ」とて、小妖等に命じ、陰陽瓶を取出させけるが、此瓶纔に二尺四寸の大き

なれども、三十六個を用ひざれば動す事能はず。此故に三十六個の小妖、彼二氣瓶を擡出し、瓶の口を行者に向ふれば、瓶中に仙氣ありて搜的行者を吸入れけり。三魔打倚りて蓋を罩ひ、既に孫悟空を捉へたれば、唐僧は自然と我が口裡の物なり」と急ぎ歡喜の酒宴を催しけり。

○心猿鑽透陰陽體 魔主還歸大道真

行者は瓶中に装入れられ、身を小小變じ、少時蹲り居ける處に、忽然として四面都て火焰となり、三條の火龍出來りて、行者が上下に盤遶る。行者則ち咒語を唱へ、避火訣の印を結び、氣を住めて座しけれども、漸々に火勢甚しく、孤拐の肉已に和ぎければ、行者心中に慌得て、斯の如くならば、漸々に孤拐より化盡て湯と成るべし。此裡に化し死なば、師父を佐けて西天に行く事能ず、萬年の功業一旦に空なる口惜さよ、と覺えず泪を流しけるが、忽ち前年蛇盤山にて觀音菩薩の救命毫を賜はりし事を思ひ出し、腦後を搜り見れば、果然硬き毛三根あり。行者嬉し、遂に是を拔下し、一根を鋼鑽と變じ、一根は竹片と變じ、一根は細き綿繩と變じさせ、竹を張り弓となし、彼鋼鑽を以て底に向ひ穿鑽しければ、直に一箇の孔を穿透きたり。火勢此孔より漏出て冷氣を生じ、行者大いに歡喜び、三根の毛を納め、頓て蟪蛄と變じ、此孔

より鑽り出で、忽ち門外に飛行き本相を現し、三藏の居給ふ方へ駈返り、「師父々々、妖魔を伺ひ來りたり」といへば、三藏曰く、「爾久しく歸らず。我深く愁ひたり。山中怎麼なる妖怪ありや」行者則ち、小鑽風に變じたる事より、瓶の裡に装入れられ、辛うじて身を脱れ販りし事を語り、「彼三個の妖魔甚手強く、數萬の小妖的あり。我一個他と戦ひがたし。今八戒を領し、再度那里に行くべし」といへば、八戒是に従ひ、兩個とも雲に跨り、走つて獅駝洞の門前に至り、行者高く呼つて、「妖魔快く出來つて孫悟空が手列を見よ」と叫びければ、門を守る小妖驚いて、大王に此由を報ず。三個の妖魔是を聞いて大いに驚き、「彼行者、當に陰陽瓶の中に装入れたれば、今の程は化盡けて水と成りたらんと思ひしに、他怎麼して抜出でけん」と怪み、急ぎ陰陽瓶の有る處に至り、彼瓶の蓋を把りて裡を見れば、悟空は在らず、却て底に一箇の孔を穿けたり。「諸は悟空、此孔より鑽り出しと覺えたり。然れども這厮、奈何して孔を穿け、如何して此小き孔より出にけん」と且怪み且驚き、茫然として立つたる處に、行者門外に在つて萬般と罵りけるにぞ、老魔忿然として謂て曰く、「我等西方路上に在つては武勇の名あり。今日孫行者に侮謾られ、他と敵する者無んば、名を千歳の末に恥しむべし。命を捨てよ戦はん、何ぞ怖る事有らん」と刀を把つて門外に跳り出で、呼つて曰く、「孫行者、我言

を聞け。我軍兵を出し、爾を捉ふる事安しと雖も、然しては爾我が手列を知る事能じ。我今爾と戦ひ、快く雌雄を決すべし」行者笑つて曰く、「怕くは爾一個我に對する事能はじ。管す逃る事なかれ」と兩個遂に手を交へ、五六十合戦ひける時、八戒堪へかねて、「師兄、我代つて突止めん」と釘鉈を把て跑出れば、老魔二個に敵し難く、忽ち本相を現し、一個の青獅と成り、口を開いて八戒を呑まんとす。八戒大いに驚き、頭を回して逃出す。行者は却て眞面上前より、鐵棒を身に收め、彼獅の口裡へ飛入りけり。八戒是を見て行者を怨み、「此彌馬温の死生知らず、却て他が口に入るは何故ぞ。明日は管す大恭と變じて出るならん」と獨言き、急いで舊路に逃返りける。三藏は沙僧と俱に兩個が歸るを待ち給ふ處へ、八戒喘呼的跑来れば、三藏驚いて曰く、「八戒、怎麼狼狽しく歸りたるや。悟空は未だ歸らずや」八戒曰く、「師兄は妖怪に一口に呑れ、我一个漸々脱れ歸りたり」三藏是を聞いて、忽ち動と地に倒れ、「悟空、爾よく妖精を降すと思ひしに、今日却て妖怪の手に死せり。痛むべし」と聲を放つて哭き給ふ。八戒師父を勸解めんとせす。「沙和尚快く行李を開け」悟淨が曰く、「二兄、行李を開いて何を出すや」八戒曰く、「行李を分ち取て、個々別々に去らん。爾は流沙に立歸れ。我は高老莊に往きて我が渾家の面を見、白馬を賣りて師父の棺を買ひて葬送の準備を爲すべし」三藏是を

聞いて更に心を傷り、天に哭き地に伏して、只管哭きて在します。却説獅陀洞の妖魔は、行者を一口に呑終り、洞中に立歸り、「我孫行者を拿へ來れり」と呼びければ、二魔懼喜んで曰く、「長兄那處に拿へ置き給ひしぞ」老魔曰く、「我他を一口に呑み、今我が腹中に有り」三魔大いに驚いて曰く、「大哥大いに過ち給へり。孫行者を吃し給ふ事申しからず」行者肚裏に在つて曰く、「我を吃する事大いに申し。我飢ゑたれば、此肚裡の臟腑を喰はん」小妖聞いて、「不好々々。行者大王の肚裡に在つて説話す」と怖るれば、老魔が曰く、「我手列あつて他を呑む。聲を出すを那ぞ怕れん。誰か有る。快く鹽湯を取來れ。肚に灌ぎて他を吐出し、煮熟して酒の殺とせん」小妖頓て鹽白湯を把來りて大王に捧ぐ。老魔是を取りて吃盡し、喉を開いて吐きけれども、行者敢て出でず。老魔没奈何て、「孫行者、爾怎麼出來らざるや」と云へば、行者肚裡より答へて曰く、「爾甚だ不通變なり。我出家人、原衣服なし。今秋涼の時節、我尙單の直綴を著す。此肚の裡、暖かにして風を透さず。冬を過ぎて後出づべし」衆妖是を聞いて、「這厮、大王の肚の裡にて冬を過さんといふ。怎麼して善らん」老魔が曰く、「他冬を過さんとせば、我座禪をなし、搬運の法を行ひ、一冬飯を喰はず、彌馬温を餓死せしむべし」行者曰く、「爾猶世事を知らず。我廣東より過來り、一個の摺疊と鍋とを持つ



て入りたれば、儂が五臟腸を取り、雜碎に煮て食せば、來春までは乏しからじ」老魔小妖に命じて、藥酒を取來らせ、「儂等怖るゝ事なかれ。我今此藥酒を飲み、這厮を苦め殺すべし」と一連に七八鍾を飲みけるを、行者酒香を得て、此酒を他に飲ませじと、頭を喇叭の口に變じ、他が喉嚨の下に受けて、酒を盡く行者が口へ吸取りける。老魔鍾子を下に置き、「不正や、此酒平日は纔に二鍾を飲めば肚裡火の如くなるに、今七八鍾を飲めども些しも酔はざるは何故ならん」と只管に怪みける。行者原來酒量高からず、今七八鍾を連飲にしたれば、忽ちに大醉し、肚の跟にて舞踊り、或は鞞、豎蜻蜒、翻跟頭して騒ぎけるにぞ、老魔肚中大いに疼み、苦みに堪へ難く、地の上に轉倒れ、只管嗚呼いて絶入りたり。多時有りて行者些し酔醒め、手足を止めて定めりければ、老魔漸々蘇生り、苦氣なる聲にて、「大慈大悲齊天大聖、南無孫行者、悟空菩薩、萬望我を助け給へ」と呼びけり。行者曰く、「儂然様に詞を費すべからず。唯孫外公と唱ふべし」老魔是を聞き、又呼つて曰く、「外公々々、萬望は慈悲を垂れて我が一命を饒し給へ。我今唐師父を送りて此山を過えさしめ、活命の恩を報じ奉らん」行者曰く、「我儂が命を饒さば、儂怎麼して師父を送るや」老魔曰く、「我原金銀珠玉の贈るべきなし。我等兄弟三個、一乘の轎兒を擔ひて師父を駕せて送り候はん」行者打笑ひ、「轎兒を以て師父を送らば、金

銀を贈るより尙勝れり。儂口を開け。我出去らん」といへば、老魔急ぎ口を開きける。此時三魔走りより、老魔が耳に口を倚せ、悄々的に曰く、「他が出る時齒を咬合せて、這厮を咬殺し給へ」といふ。行者肚の裡にて忽ち悟り、先金箍棒を出して試みけるに、老魔果して咬合せ、鐵棒に啞的て、却て門牙を碎きけり。

○心神居 舍魔歸 性

木母同降 怪體 眞

其時行者怒つて曰く、「儂我を欺きて咬殺さんとす。我再度出でず」とて鐵棒を抽回れける。老魔三魔を怨んで曰く、「是却て儂が過なり。今怎麼して他を出さんや」三魔曰く、「長兄怨み給ふ事なかれ。我計事有り」とて高聲に呼つて曰く、「孫行者耳定に聞け。儂が名を聞くこと雷の轟く如く、南天門にて威を現し、靈霄殿にて勢を振ひ、今又西方路上に有つて、妖を降し怪を拿ふ。古今無雙の英雄と思ひしに、却て一個の小輩の猴兒なり」行者曰く、「儂何を以て我を小輩といふや」三魔曰く、「儂若出來りて我と賭闘を爲さば、眞の英雄と稱すべし。那ぞ人の肚の裡に潛隠れ、我を怖れて出來らず。小輩ならずして抑何ぞや」行者是を聞いて思ふやう、他が言も理なり、我若出ず在らば、實に名を失ふべしと思ひ、答へて曰く、「儂既

に我と賭闘を求めんとす。我今出行くべし。唯洞内窄く、器械を遣ふに不宜。廣き處に出でて我出るを待つべし。三魔則ち許若の小妖的を領し、門外に陣を列ね、二魔は老魔を佐けて門を出で、「孫行者出来れ。此處場廣し。快く勝負を決せよ」と呼びければ、行者又思ふやう、他亦反覆計りがたし、左右計略をもつて他を苦め、快く師父を送らしむるに如じと、數十根の毫毛を抜き、四十丈計の大繩と變じ、妖精が心の臟に緊ぎかけ、繩の尾を手にて取て喉下に至り、亦思ふやう、若口より出でなば、此繩を咬斷れんも計り難し。齒のなき處より出づべし、と上膊より鼻の孔に潜り出れば、老魔忽ち一聲噴嚏をなし、行者は遂に迸奔出づ。則ち一手に彼繩を扯き、一手に鐵棒を取り、急に雲に飛入り、力を極めて繩を扯けば、老魔又初て疼を覺え、天に向ひて釣揚げらる。行者又地に下り、横に繩を引けば、老魔風車の輪る若く、空中より滾び落ち、行者に従ひて牽れ行く。二魔三魔是を見て大いに驚き、一齊に繩に縋り、落下いて曰く、「大聖爺々は海量の神仙と思ひしに、却て這樣に巧欺り給ふや」行者笑つて曰く、「這潑怪ども、十分無禮なり。前に我を欺きて咬殺さんとし、今又我を欺きて、幾萬の怪兵を以て我一個を圍まんと計る。是何の道理ぞ」妖魔一齊に拜して曰く、「嚮の事は都て皆我々が罪過なり。今慈悲を以て命を饒し給はば、管す老師父を送り奉らん」行者、「然らば爾等刀を拿つて繩を

割つて歸りされ」老魔が曰く、「外の繩は割ると雖も、心中に残り住りたる處怎麼せん」行者曰く、「爾等既に師父を送らんと云ふ。其言偽り無きや」老魔曰く、「繩を解いて給らば則ち送り奉らん。更に偽り稟すべからず」行者頓て身を搖かして毛を收むれば、有りし繩忽ち消えて、老魔初めて疼みを脱れ、衆妖大家拜禮し、「大聖且歸り給へ。我等頓て驕兒を以て御迎へに參るべし」とて兵を收めて洞中に歸りけり。行者も身を回して、急ぎ師父の許に歸りける。三藏は尙地に倒れ、只管哭きて在しける。沙僧身邊に在りて佐け居けるが、忽ち行者が来るを見て、三藏八戒を怨み喝つて曰く、「爾專ら能く人を怕す。悟空曾て死せざるを、爾却て死せりといふ。那里より来る者は誰ぞや」八戒曰く、「我明かに他が妖精に吞まれたるを見たり。思ふに他師父に念を残し、魂を回へし来る幽靈ならん」此時行者回り著き、是事を聞き、八戒が顔を打て曰く、「我怎麼幽靈ならんや。向に妖魔我を吞みし時、我妖怪が腸を扯き、五臟を掴み、他疼に苦み、再三命を饒されん事を乞ふ。是に依て他を饒し、當今驕兒を以て師父を送り此山を過えしめんとす」三藏是を聞いて、且驚き且歡喜び、「悟空大いに爾を勞したり。我今再生の心地せり」とて手を拍つて喜び給ふ。却說那妖精等は、既に洞中に飯り、二魔老魔に對して曰く、「我本孫行者を、九頭八臂三身の

大漢ならんと思ひしに、却て五尺に足ぬ小猿なり。我が此洞中幾萬の部下、唾を吐いても他一個は溺し殺すべし。當下長兄の命を救はん爲、他を欺き販すと雖も、眞實他を送るべけんや。長兄我に三千の軍兵を與へ給はど、管ず行者を捉へ來るべし」妖魔是を聞いて、「奈何も爾が心に任すべし」と云へば、二魔大いに歡喜び、急ぎ三千の小妖を點じ、徑に洞門を出でて山を下り、大路に添ひて陣を列ね、一個の小妖前み出、「我が二大王爰に在り。孫行者快く出でて雌雄を決せよ」と呼びけり。八戒是を見て大いに笑ひ、「師兄妖魔を降し轎兒を以て師父を送ると云ふに、却て亦戰を求るは那ぞや」行者曰く、「老魔既に我に戒められ、敢て出で來ず。定めて彼二魔が、我等を送る事を願はず、また來つて戰を要るならん。我思ふに、此妖精兄弟三個、這様に義氣あり。我門も亦兄弟三個。我既に老魔を降す。爾も亦二魔を降し來るべし」八戒曰く、「我那ぞ他を怕れんや。且他を拿へ來らん」と釘鉈を取つて山崖に跑登り、「潑妖怪、疾く出來て我が手列を見よ」と呼びければ、二魔大いに怒り、鎗を掣て跑來り、兩個崖上に在りて相戦ひ、未十合に至らざるに、八戒既に力疲れ、身を轉じて逃けんとするを、二魔快く鼻を伸べて捲住む。衆妖怪と鯨波あけて洞中へ扯回りけり。三藏遙に是を見て、「悟空快く他を救へ」と曰ひければ、行者笑つて曰く、「師父も甚偏心なり。我が擒へられたる時は些しも

念に懸け給はず。他一度捉へらるれば、却つて這様に慌得給ふは何事ぞや」三藏曰く「爾が擒へられしを、我何んぞ念に懸けざらんや。思ふに爾は能く變化をなし、管ず身を破るに至らず。他は生得愚なれば、妖精が手を脱るゝの智なし。爾快く救ひ來れ」行者則ち雲に駕り、空中を越りつと思ふやう、彼馱子、我を死したりと咀ひたり、且渠に苦みをさせて、然して後救はんと、一個の蠅螻虫と變じ、洞裡に飛行けば、不便や八戒手脚を拴縛れ、後園の池の中へ浸し置れたり。行者是を見て、前日沙僧が説話に、他私房銀を償め持てりと云ひしが、不知那處に匿し置きたるや、且他を一赫し驚して取出させんと、則ち八戒が耳の際に飛行き、怕醜氣なる聲を作り、「猪悟能々々々」と呼びければ、八戒怪みて曰く、「我が法名を呼ぶは誰なるや」行者曰く、「我は冥途の使なり。五閻王の命を受け、汝を迎へに來りたり」八戒大いに驚いて曰く、「長官且販りて五閻王に奏させ給へ。五閻王は我が師兄孫悟空と甚好教なり。師兄の面に愛て一兩日待て給はるべし。頓て妖精等が師父を捉へ來りし時、師父と一同に往き候はん」行者曰く、「五閻王已に爾を三更死と住定め置き給へども、我方便を以て一日を延引すべし。但し我今より外の處に往きて爾が代りの別人を伴ひ販らんと思へども、盤纏を持來らず。今腹中餓ゑたり。爾定めて盤纏有るべし。些し我に與ふべし」八戒曰く、「我は是出家人、怎

麼盤纏有らんや。別人に問ひて要め給へ」行者曰く、「汝已に盤纏なし。我外に行く事能はず。然らば儂に繩を掛けて扯取るべし」八戒慌得て、「長官且繩を出し給ふな。長官の索は追命繩とか云ひて、是を掛くれば則ち息絶ゆると聞けり。我此幾年、上積來へ置きたる襖錢四五錢、耳の裡に有り。我今細められて手を動す事能はず。長官親手取出し給へ」行者則ち他が耳の裡を搜れば、果而四五錢の銀子あり。行者是を取出し、堪へかねて哈哈大笑し、本相を現しければ、八戒是を見て、「天殺的の弼馬溫、今此困苦の場處にて、人の銀子を偽り奪ふや」と牙を咬んで罵りけり。行者打笑ひ、「財は是小事なり。我且儂が命を救はん」とて鐵棒を擧つて他を池より挑け出し、縛を解放せば、八戒懼喜び、行者と俱に洞門に走り出で、門の一邊に釘鉈の捨て有りけるを尋取つて、門を出んとする處を、許多の小妖是を見附け、遁さじと追來る。兩個釘鉈を廻し棒を振り、當るを倖僥打殺し、遂に門外に走り出でたり。二魔是を聞いて大いに怒り、鎗を擧て門外まで追來り、行者と少時戦ひけるが、忽ち本相を現して、鼻を伸べて行者を捲かんと前み倚るを、行者は双手に棒を横たへ、却て他に腰を捲かせ、鐵棒を鼻の孔へ突入れければ、二魔慌得大いに驚き、鼻を伸べて退かんとするを、行者遂に鼻柱を搦み、前に向ひて扯下れば、二魔疼み甚しく、行者に跟ひ牽れ行く。八戒は後より釘鉈の柄

を以て他を打ち、兩個の象奴を見るごとく、師父の處に牽取る。三藏是を見て、「徒弟等、且他を傷る事なけれ。他若我等を送りて山を過えなば、命を饒して取せよ」と曰へば二魔地に跪下いて曰く、「唐聖僧、若我が命を饒し給はば、管ず轎兒を以て山を過えさしめ奉らん。更に變改致すべからず」行者曰く、「我門師徒は、俱に慈悲を最專とす。然れば儂が言に従ひて命を饒し返すべし。這般尙變改なさば、再度命を饒しがたし」と遂に放ちて歸しける。二魔は師徒に向ひて拜謝し、急ぎ洞中に跑取り、有りし事ども仔細語り、怎麼はせんと議しけれども、衆妖個々默然と、一言を出す者もなし。其時三魔上前出て、「我一箇の謀計あり。管ず唐僧を捉ふべし。謀計の次第は這樣々々」と仔細に示教しければ、老魔二魔大いに懼怖び、急ぎ衆妖に命じ、一頂の轎兒を擔けさせ、三個の妖魔つき添ひて三藏の處に至り、「當下送り奉るべし」と、個々跪下いて云ひけるにぞ、三藏は謀計とは夢にも知らず、遂に轎兒に座し給ひ、行者八戒沙僧等は後に附添ひ、三個の妖魔先上前、崖上に登りて急ぎつと、一日一夜に四百餘里の道を過ぎ、已に獅駝國の城地に至りける時、三魔忽ち方天戟を擧げて孫行者を刺さんとす。行者急に身を轉じ、鐵棒を振つて相戦ふ。老魔八戒に砍て懸り、二魔沙僧に打てかゝる。八戒沙僧、釘鉈を擧げ寶杖を廻し、個々勇を振つて戦ひける。兼て計りし事なれば、轎兒を擔きた

る小妖ども、飛ぶが如くに城門に至り、「門を掛け」と呼びければ、門を開いて許多の小妖群り出で、三藏を城中へ迎へ入れ、其餘の小妖等は、白馬を牽き行李を擔ひ、個々城中へ入りけり。三個の徒弟等はを知らず、只管戦ひ居たりけるが、八戒早く力疲れ、身を回して逃けんとするを、老魔直に口を開き、八戒を咬止め、城中に飛入り、小妖等と呼んで細縛させ置き、又出來りて二魔を援けて戦ひ、終に沙僧を捉へ、城中へ扯回りけり。行者は兩個の師弟が捉へられたるを見て、急に雲に駕つて脱れけるを、三魔本相を現し、翅を伸て赶上けたる。原來行者が舐斗雲は、一度放つて十萬八千里を去ると雖も、此三魔が翅は、一度揚げば九萬里を飛ぶ、二度揚げば十八萬里を去く。此故に忽ち空中に在て追及、終に行者を搔抓み、飛回つて城中に入りけり。

三編 卷之十

○群魔欺本性

一體拜眞如

三個の妖魔城中に販り入り、「唐僧四衆を捉へたれば、是を蒸熟して吃ふべし」と、小妖等に命じて、庭上に大なる鍋籠を居る、其中に水を汲入れ、上に鐵籠を重ね、且八戒を下の一隔に装入れ、沙僧を第二隔に入れ、行者を第三隔に装り、上の第四隔に三藏を装入れ、乾柴を運び火を燒せ、湯を湧らせて蒸殺さんとしたりける。其時行者、鐵籠の中に在つて一根の毫を抜き、假に行者に變じさせ、鐵籠の裡に住め置き、我身は隱身の法を以て密に空中に飛登り、雲端に在て遙に小妖等が立騒ぎて火を燒を見て、若湯の湧滾りたる時は師父は乍ち命を失ひ給ふべし。且快く是を救はんと、咒語を念て北海龍王を呼出し、此一條を仔細語り、唐僧を守護し給はれと頼みければ、龍王謹んで承諾り、頓て身を一陣の冷風と變じ、鍋籠の下に飛入り、火氣を押へて升らしめず。斯とは知らず、老魔十個の小妖を呼びて、「爾們輪流に火を燒きて、些しも怠慢る事なかれ。我等是より畧々安歇んで、明朝蒸熟したる時、鹽醋を調へて空心へ

受用すべし」と、三個の妖魔は個々寢宮に退きけり。行者空中に在つて是を見届け、頓て十根の毫毛を抜き、瞌睡虫に變じさせ、投下し、十個の小妖の面に一隻づつ住らせければ、十個の小妖忽ち座睡り、前後も知らず倒れ臥しぬ。行者則ち鍋籠の一邊に飛下り、鐵籠を開いて師徒三個を救ひ出す。三藏はじめ八戒沙僧も、大いに驚き、且懼恰び、諸は悟空が眞身は外に在りけるかと、増々行者が神通を感じ、頓て白馬と行李を尋出し、「前後の門は小妖等が護居て、脱れがたからん。我等師父を援けて牆頭を越えて脱るゝに如かじ」と、行者且牆に登り、上より師父を扯上ぐる。八戒沙僧は下より推上けんとしけるが、三藏災星未だ除かず、此時三個の妖魔忽ち睡を覺し、火燒の小妖を呼びけるに、一個も答せざりければ、怪みて鍋籠の邊に立出で見れば、小妖等前後も知ず熟睡し、鍋籠の下に火の氣もなく、却て鐵籠みな打反り、唐僧等も在らざりければ、妖魔大いに驚き慌得、「諸は唐僧を逃したり。快く來つて捉へよ」と呼びけり。許多の小妖一齊に起出で來り、火把を取り燈籠を照し、城中都て白晝の如く、四面に別れて查勘廻る。老魔終に三藏を見着け、忿然として牆の下に走り至り、二魔三魔も續いて來り、再度三藏八戒沙僧を生擒り、許多の小妖是を扯立、裡に入りて、八戒沙僧は兩處の柱に綱縛めつけ、三藏は皇宮の後邊なる錦香亭の裡に匿し置き、堅く鎖して守らせけり。行者は已に牆の

上に在りし故、急に雲に乗つて身を遁れ、妖精等が都て裡に入り、城中些し静りたるを見て、又雲を下り城中に入り、小妖の像に變じ、師父の在する處を查勘に、唯八戒沙僧は柱に縛められて在り、師父は却て見え給はず。行者頓て一個の小妖を呼びて、「嚮に大王の捉へ給ひし唐僧は奈何なりしや」と尋ねれば、小妖答へて、「我も是を知ず。嚮に近士の説話を聞くに、大王又孫行者が來り奪ひ行かん事を恐れ、交生食し給ひし由なり」行者是を聞き、又雲に駕り城外に出で、只管泪を流しけるが、密に思ふやう、此事都て如來の爲業なり。他極樂世界に居住し、暇に任せて三藏に經を遣んと作言す。若實に東土へ經を傳へんと思はば、他方より送り遣すべき事なるを、却て我々に來り要めさせ、千山萬水の艱難を歴、今日爰に至つて終に命を失ひたり。我今如來の處に行きて、師父既に失せ給ひし事を告げ、我が頭の金箍を外し、故郷花果山に歸るべし、と忽ち筋斗雲に打跨りて、西方に向ひて飛行き、須臾の間に靈山に至り、寶蓮臺に近着き如來を拜し、泪を瀧の如く流し、唐僧の妖精に吃はれたる事、其外の事ども仔細に語り、「萬望は大慈悲を以て我が頭の金箍を拔せ給はるべし」と、涙に咽びて訴へければ、如來笑つて曰く、「爾心を惱ます事なかれ。彼妖精神通廣大なり。我惠眼を以て彼妖精を見るに、老魔二魔ともに皆主人有り、彼三魔は却て我と些しの親あり」行者曰く、「其親といふは

如來の父黨なるや母黨なるや」如來曰く、「天地開け初りし時萬物盡く生ず、其中に獸の類あり、禽の類あり、獸は麒麟を以て長とし、禽は鳳凰を以て長とす。鳳凰又交合の氣有りて、孔雀大鵬を生ず。此孔雀、出世の時人を喰ふ事甚しく、四十五里の間の人民を一口に吸入れたり。我其時雪山に在て、丈六の金身と成りし時、又他が肚の裡に吸入れられ、肛門より出ては我金身を汚さん事を恐れ、依て他が背上を割きて鑽り出で、靈山に登り、他が命を傷んと思ひしかども、諸佛來りて會し、孔雀を傷る事我が母を傷るに等し、と勸解住むる故、遂に他を靈山に住め置き、佛母孔雀大明王菩薩と號したり。今獅駝國の三魔は彼大鵬にて、孔雀と一母なり。此故に我些しの親あり」行者笑つて曰く、「如來曰ふごとくならば、如來は却て妖精が甥にあらずや」如來曰く、「我妖精に親因あれば、我自ら往きて他を降伏すべし」とて、阿難迦葉に命じて、五臺山の文殊菩薩、峩眉山の普賢菩薩を宣し給ひ、此二尊を從へて獅駝國に向つて出で給へば、行者も同く雲に駕り、後に從ひ趕りける。

不多時獅駝國の城地に至りければ、行者且雲より下り、城門に立て高く呼つて曰く、「業畜早く出て孫悟空が棒を領けよ」と罵りけり。三個の妖魔是を聞いて、個々器械を取つて一齊に跑来。行者三個を對敵にして少時戦ひ、頓て戦ひ負けて空中に逃升りて、如來の金光の裡へ隠

れける。三個の妖魔も、雲に乗りて赶上來りけるが、忽ち三尊の仏菩薩の空中に立ち給ふを見て、老魔二魔大いに驚き、「彼潑猴、怎麼して我々が主公を請じ來りしや」と急ぎ逃けんとする處を、文殊普賢の二尊御聲高く、「畜生怎麼歸り皈らざるぞ」と喝り給へば、兩個の妖魔器械を投捨て、身を揺すと見えたるが、忽ち本相を現し、老魔は青獅、二魔は白象と成りにけり。彼三魔は是をも恐れず、行者を捉へんと近著きけるを、如來手を舉げて指ざし給へば、他も終に本相現れ、一個の大鵬金翅鵝となり、一線の縷を翅に掛けられ、再度遠く飛ぶ事能はず。行者其時金光の裡より立出で、如來を拜して曰く、「仏爺々、今妖精を降伏し給ふ事權喜ばしと雖も、已に師父を妖精等に吃はれ、我今怎とも爲る事なし」大鵬牙を咬んで怒つて曰く、「爾潑猴、這樣的狼人を請來り、我々を困苦め、却て我々に師父を喰れたりと偽るや。爾が老和尚、現に今錦香亭の裏に在り。誰か敢て他を吃ひたるや」行者是を聞いて大いに權喜び、急ぎ如來に拜謝すれば、如來遂に、一菩薩と俱に三個の妖魔を引領れ、紫雲を放つて西天に飛去り給ふ。行者は直に城中に飛下りけるに、小妖等は、三個の妖魔降伏せられしを見て、大家四方に逃散り失せて、一個も止住り居る者なし。行者遂に八戒沙僧が索を解きて、三個とも後宮に入り、錦香亭に至り、鎖を穿ちて裡を見れば、果して三藏此處に居給ひけり。三個走り入つて、網縛

を解きて助け出し、四個個々懽懽にたへず。行者仔細に如來の妖精を降伏し給ひし由を語り、多時城中に在つて休息し、飯を安排へて個々吃し、然して亦城を出で、西方に向つて急がれり。

○比丘憐子遣陰神 金殿識魔談道德

三藏師徒は、獅駝國の難を遁れ、數月を経て又一座の城地に至る。市街最賑しき中に、家々の門毎に都て一個の鷲籠あり。皆五色の絹を以て上を遮幔ひたり。三藏是を見て、怎麼やらんと怪み給へば、行者、「我今見届け來るべし」と、忽ち蜜蜂兒と變じ、彼絹の裡に飛入りて、列ねて八九家を窺ひけるに、盡く五六歳計の孩兒を鷲籠の裡に入置きたり。行者頓て飛歸り來り、師父に此由語りけれども、是又何とも分たず。師徒四人彌怪み行く處に、遂に金亭驛館にいたる。三藏驛丞に見えて、朝に入つて關文を換へん事を求め給へば、驛丞曰く、「今日己に晩に及んで、朝に入り給ふ事能ず、明日を待つて入朝し給へ。今宵は此街門に宿し給ふべし」とて、客房に入れて歇ませけり。三藏深く拜謝して、其後驛丞に問うて曰く、「此城中に、見れば門毎に小兒を籠に入置きたり。彼は何の爲なるや」驛丞低言きて曰く、「長老是を問ひ給ふ

事なかれ。明朝急いで西に赴き給へ」三藏是を聞いて彌々怪み、再三仔細を問ひ給へば、驛丞則ち人を避け、怕々悄悄いて語つて曰く、「此國は原比丘國と號し候を、近比民間の謠言によつて、小子城とよぶなり。此三年前、一個の老者、一個の美女を伴ひ來り國王に獻す。國王此美女を深く寵愛し給ひ、遂に彼老者を國丈と稱し、彼女子を美公と號け給ふ。是より國王、晝夜歡樂を貪り酒色に溺れ、近き頃は精神疲れ苦み、大醫院の良法を進むれども更に驗なし。彼の國丈、我海上の仙方ありとて、十州三島に去て藥を求め來り、其藥引に千百十一個の小兒の心肝を用ひ、是を煎じて藥を服すれば、千年不老の功有りと國丈が教に任せ、國中へ命を傳へ、五六歳の孩兒を求め給ふ。彼籠の裡なる小兒は、則ち藥引に用ひん爲なり。人家の父母は、王法に懼れて表面に悲み歎かずと雖も、内心想計り給ふべし。依て此城を小子城と號け候。是國王無道の事なれば、長老明日入朝し給ふとも、管す漏し給ふ事なかれ」と仔細と告終りて驛丞は退きけり。三藏是を聞いて、「此國王、怎麼這樣に無道なる。許多の小兒の性命を斷つて其身一個の壽を延べんとするや」と只管涙を流し給へば、沙僧勸解めて曰く、「師父悲み給ふ事なかれ。極めて彼國丈、一個の妖邪にて、人の心肝を喰んと思ひ、法を設けて國王を欺きたらんも計りがたし」行者曰く、「悟淨が言大いに理あり。我明日形を變じ、師父に跟ひて朝に入



比丘國三藏
許多救小兒

り、彼國丈を窺ひ、若妖邪ならば、他を捉へて國王に示し、小兒等が命を救ふべし」三藏曰く、
 備若此小兒們が命を救ひ得ば、天大の功德なるべし。唯怕らくは、國王理非を察せず、却て我
 を罪せば奈何」行者曰く、「我自ら爲法あり。今宵且此小兒を外に匿し置き、明日其理の宜き
 に従ひ、事を計らふべし」と、行者直に半空に飛降り、一聲の唵淨法界を唱へ、城隍土地神、
 并に揭諦功曹等の諸神を呼集め、「此比丘國王、許多の小兒の心肝を取つて藥引と爲んとす。我
 が師父此小兒等を救はん事を思ひ給ふ。萬望は列位彼小兒等を山林に匿し、一兩日食を與へ
 て守護なし給はるべし。國王を正果に勸解めて後、皆々返し給はるべし」と央みければ、衆位
 の神輩都て許諾し、忽ち一陣の陰風を發し、滾々として城中に降り、彼小兒們を、籠と俱に盡
 く攝去り、行方も知らず成りにけり。行者則ち雲を降り、師父に斯と告げければ、三藏大いに
 權怡び、再三行者を賞謝しけり。
 其夜は個々安寐し、天曉に至り、三藏衣を整へて朝に入り給ふ。行者は蟪蛄と變じ、師父の
 毘盧帽子上に住り居り。三藏朝門外にて黃門官に見え、「貧僧は東土大唐より西天に至り經
 を取るの僧なり。今關文を換へん爲玉城に至れり」とて仔細に來歴を述べ給へば、黃門官
 入つて斯と報す。國王旨を傳へて、唐僧を殿上に宣登らせ、關文を見終り、寶印を用ひて三藏

に返し與へ給ふ。時に忽ち當駕官上前出て、「國丈爺々來り給へり」と奏すれば、國王急ぎ龍
 床を下り、身を射めて出迎ふ。三藏則ち一邊に座を避けて、密に國王を見給ふに、相貌疲衰
 へ、精神倦怠りて、纔に骸骨を住めたる形狀なり。不多時國丈殿上に至り、國王に禮をも爲さ
 ず、端然として繡墩の上に座し、頭を回して三藏を看、「此僧那國より來れるや」と問ふ。國
 王答へて曰く、「是は東土大唐より西天に至り經を求むるの僧なり。關文を換へん爲今爰に來
 れるなり」國丈笑つて曰く、「西方の道何の好處有つて那國に赴くや。自古來唯道獨稱尊と云
 へり。他が佛門寂滅の如きは、唯用なき功を費すのみ」三藏是を聞き給へども、敢て一句の應
 答も爲し給はず、國王に拜謝し、階下に歩み下り給へば、行者則ち師父の耳に飛入り悄悄に告
 げて曰く、「師父、彼國丈は妖怪なり。師父は且館驛に返り給へ。我爰に住居居て渠が消息を
 見るべし」と云捨て亦殿上に飛降り、翡翠屏の上に住り居る。三藏は直に朝門を出で、驛館に
 歸りて待ち給ふ。其時五城兵馬司、慌忙しく入朝し、國王の前に奏して曰く、「昨宵一陣の冷
 風吹來り、家々の小兒籠と俱に刮去り、一向に踪跡知れ候はず」と告しける。國王大に驚き、
 「今日午の剋に、彼小兒が心肝を取り、國丈が仙藥を服さんと思ひしに、計らずも冷風に刮去
 らるゝ事、是天より朕を滅し給ふ處なり」國丈笑つて曰く、「是天より陛下を滅するに非ず、

却て長生を與へ給ふ處なり。我今日一個の絶妙の藥引を見る。千百十一個の小兒の心肝より勝れる事萬々なり。陛下此引子を以て仙藥を服し給はば、壽を延る事天地と同からん」國王之を聞いて其故を問ひ給へば、國丈答へて曰く、「當今來りし東土の唐僧は、十世修行の眞體、元陽の氣未だ漏れず。小兒の心肝に比ぶれば萬倍の功あり。他今皈て驛館の裡に在るべし。陛下快く羽林衛官軍を遣し、彼の唐僧を捉へ、心肝を要め給へ。必ず脱し給ふべからず」國王滿心權喜、遂に是に従ひ、急ぎ旨を傳へ、羽林官を召し給ひ、此事を命じ給ふ。行者是を聞濟し、急に殿上より飛出で、驛館に飛駈り、本相を現し、「師父、亦禍發りたり」とて、今聞きたる動靜を件一に語りければ、三藏聞いて大いに驚き、戦々兢々として魂を失ひたる如く、呆々拵てぞ居たりける。行者曰く、「此難を脱れんと爲るには、師父を徒弟となし、徒弟を師父と爲さば、管ず何の患か有らん」三藏曰く、「爾果而我を救はば、何ぞ爾が徒弟と爲るを恨みんや」行者曰く、「然らば早く準備を爲すべし」と、且八戒に、「快く泥を些し取來れ」と云ひければ、八戒「心得たり」と釘鉈を取りて庭の土を突崩し、尿に交て和らけ持來りける。行者心中不平と雖も、急卒の間なれば、設奈何この泥を持って自己の面を撲作し、一個の猴の臉を印下け、夫を亦三藏の臉に撲ひ、「管ず辭を出し給ふ事勿れ」と、眞言を念へ一口の仙氣を吹濯け

ければ、三藏忽ち行者が像と變じたり。行者又其身を揺して三藏の模様と變じ、纔に準備整ひける時、卒然に近邊騒がしく、三千の羽林軍、早くも驛館を取圍み、驛丞が指引にて、一個の錦衣官客房に入來り、「唐長老、我が國王の請待し給ふ。疾々來れ」と呼びけり。此時行者の假唐僧出迎へ、「錦衣大人、最畏なくも降臨し給ふ。貧僧何の徳か有て、陛下の請待に逢る事、權喜何ぞ此上有らん。今大人と俱に入朝し、陛下を拜し奉らん」と直に客房を立出れば、羽林軍士等前後左右に圍繞して、急いで朝中に還りけり。

○尋洞求妖逢老壽 當朝正主救嬰兒

羽林軍士等、假唐僧を扯把れて朝中に駈り、殿前に至りければ、假唐僧階下に立つて高く呼つて曰く、「比丘王貧僧を請ひ給ふは、怎麼の要め給ふ事あるや」國王笑つて曰く、「朕偶一病を得て、久く愈えず。倖僥に國丈朕に一方を贈ひ、今長老の心肝を要めて引子となし、此藥を服せんと欲す。長老敢て是を賜はらば、長老の爲に祠堂を建立し、永く香華を國に傳ふべし」假唐僧曰く、「是甚易き事なり。貧僧原幾個の心肝あり。不知國王今何色の心肝を要め給ふや」國丈一邊より指定して曰く、「我只爾が胸中の黒心を要む」假唐僧曰く、「然らば早く刀を

取來り給へ。我今胸を割開き、若黒心有らば謹で奉らん」國王是を聞いて、當駕官に命じ、一把の短刀を取來らせ、唐僧に與へける。假唐僧刀を手に把り、衣服を解開き、刀を胸に剛的突立て、肚の皮割開き、五臟を擲んで扯出す。國王はじめ衆位の官人、是を見て個々色を失ひ、膽を冷し、面を背けて居たりける。假唐僧臟腑の中より幾個の心肝を取出し、衆官を呼んで點檢せしむるに、只是紅心、白心、利名心嫉妬心、我慢心杯は有れども、更に一個の黒心なし。假唐僧其心肝を取て原の如く肚の裡に收め、忽ち本相を現はし、庭上に立て呼つて曰く、「陛下全く眼有て球なし。彼國丈一個の黒心あり。何ぞ他が心肝を要めて藥引と爲し給はざるや」國丈行者が本相を看て大いに驚き、「儂は天宮を聞せし孫悟空ならずや」と云ふかと思へば、忽ち殿上より走り出て、内院に飛入り彼美公と諸俱に、一道の寒光と化して那里ともなく消失せけり。國王群臣是を見て、「諸は國丈は一個の妖精にて、却て此長老は眞の神僧にて有りけり」とて急ぎ行者を殿上に請登らせ、國王問うて曰く、「長老怎麼這樣に像を改め給ふや」行者笑つて曰く、「今朝來りしは、則ち我が師父、唐朝の御弟三藏法師。我は其徒弟孫悟空と云ふ者なり。尙兩個の徒弟、猪悟能沙悟淨、師父と俱に驛館にあり。嚮に陛下妖邪が言を信じ給ひ、吾師父の心肝を要め給ふ。此故に、我が師父の像に變じ來りて妖精を退けたり」國王是を聞き、

急ぎ衆位の官人に命じ、唐僧を請じ來らせ給ふ。衆官個々驛館に至り、師徒三個を迎來る。行者急ぎ殿を下り、師父の面に一口の仙氣を吹噴ければ、三藏忽ち眞の像に返り、師徒都て殿上に登り、國王に相見ゆ。行者國王に向ひ、「彼妖精が巢穴を知り給はずや」國王答へて曰く、「始他が來りし時、其住處を問ひたるに、此南七十里に一座の柳林坡あり。其裡の清花莊に住すと云へり。朕不才にして深く他に枉惑はされ、今日亦他に欺かれて、罪を法師老佛に得たり。萬望は神僧、大法力を顯し、後日の患を除き、彼妖怪を降伏し給はど、生々世々大恩を忘却るべからず」行者笑つて曰く、「我寔に陛下に告ぐべし。彼の鷲籠の裡の小兒は、我が師父の慈悲を以て我に匿しめ給ひしなり。陛下且師父と俱に少時爰に待ち給へ。我八戒と俱に那里に去き、妖精を捉へ來るべし」と、直に雲を發して空中に飛去りければ、八戒も扯續いて雲に駕り南を指して飛行きけり。國王群臣是を見て、「我們都て唐僧輩を異形の長老なりと怪みたりしが、諸は眞佛臨凡なり」と。一齊に空に向ひて拜しけり。

行者八戒は、七十里餘り趕り行き、雲を下りて見れば、一股の清溪あり。澗の一邊に千萬株の楊柳崖を挟みて排列し、却て清花莊は何處に在るを見ず。行者則ち唵字眞言を唱へ、當方の土地神を呼出し、「清花莊は那里に有りや」と尋ければ、土地神答へて曰く、「當方に清花莊と云

ふなし。唯一個の清花洞あり」行者曰く、「其清花洞は何里に有りや」土地神曰く、「大聖、南の岸に九叉頭に分れたる一顆の楊樹あり。其楊の下を左に三遍右に三遍轉りて、兩手を以て樹を撲つて、門を開くと三聲高く呼び給はば、則ち清花洞現れ出づべし」行者是を聞いて且土地神を皈し、八戒と俱に南岸に尋至れば、果的一顆の楊樹九條に分れたる有り。行者、土地神の教へしごとく、左に三遍右に三遍轉りて、手を以て彼楊樹を拍つて、「門を開け」と呼びければ、忽ち一聲の响ありて、兩扇の門現れ、門内の石屏の上に、「清花仙府」と四個の大字あり。行者徑に門を開いて石屏の後に至れば、彼妖精一個の美女を抱きて裡に座し居たるが、行者を見て大いに怒り、急に蟠龍拐杖を取つて行者を打たんとす。行者鐵棒を以て架住、兩個洞外に跳り出で、千變萬化して相戦ふ。八戒彼九叉の楊樹を押倒し、釘鉈を擧げて突碎きければ、鮮血滾々と迸り、嚶々として聲を發す。妖怪は行者と戦ひしが、終に力疲れ敵する事能はず、身を揺かして一道の寒光と變じ、東に向ひて逃去らんとす。時に忽ち空中に南極老人現れ給ひ、彼寒光を推住め、「大聖少時待ち給へ。天蓬趕ふ事を休めよ」八戒笑つて曰く、「肉頭兒寒光を罩住めたるぞ。極めて妖怪を捉へたらん」南極壽星曰く、「妖怪已に爰に在り。萬望は兩公他が命を饒し給へ」行者曰く、「南極壽星と相親むは怎麼なる譯ぞ」壽星笑つて曰く、「他は

原我家の白鹿なり。前日東華帝君我家に來り給ひ、我と棋を圍みて戯れしが、其間他を園中に放ち置きしに、他間を窺ひ、爰に來りて妖怪となれり。他出てより皈らざる事既に三日を過ぐ。天上の三日は下界の三年、我今漸々に尋ね得たり」行者曰く、「已に壽星の物ならば、我等敢て他を傷らじ。快く領れて皈り給へ」壽星是を聞いて兩個に拜謝し、寒光を放ち一聲を喝し給へば、遂に一隻の白鹿となる。壽星則ち此鹿に打跨り皈んとし給ふを、行者扯住めて曰く、「今比丘國王、此妖精に欺かれ、病を得て愈えず。萬望は彼國王が壽を延べ給へ」壽星曰く、「我鹿を尋ねに出し故、丹藥を持來らず。唯懷中に三個の棗兒あり。是を備に贈るべし。國王に與へて疾病を愈せよ」と取出して與へ給へば、行者是を受收め、遂に壽星に扯別れ、八戒と俱に又清花洞に皈り入れば、彼の美人戰々競々、外面に逃出んとするを、八戒跪り倚て一突につき殺せば、忽ち本相現れて、白面の狐と成りにけり。行者是を見て、「是國王の愛したる美后なれば、拿皈りて他に見すべし」とて死狐を手に扯著けて、八戒と俱に頓て比丘國に飛皈り、殿上に至り、國王三藏等に見え、壽星が妖精を收め給ひし事を語り、「彼國丈は一個の白鹿にて、此狐は則ち美后なり」とて見せければ、國王は大いに恥入り且懽喜、衆位の官人等感歎に不堪、忽ち東閣を開いて素宴を安排し、國王手親杯を捧けて三藏師徒に進め、妖怪を降し小

兒を救ふの恩を謝し給ふ。行者又壽星より給はりし棗兒を國王に贈り與へければ、國王大いに
 權喜、直に是を服し給へば、病立地に愈えて精神健固に成りけるにぞ、増々深く恩を謝し、只
 管四個を接待しけり。斯て三藏は、國王に辭語を告げて、西方へ進まん事を曰へば、國王止む
 事を得ず、唐僧を龍車に座せしめ、君臣后妃盡く城門を送り出ける時、忽ち空中に聲有りて、
 「大聖、前日央みに倚て、小兒等を預りおきたり。今日大聖功成て妖怪を平ぐ。依て今返し送
 るなり」と云ふかと思へば、破々落々と、千百十一個の小兒を、鸞籠と俱に城門の前に落しけ
 る。三個の徒弟是を見て、「城中の百姓ども、早く來つて小兒を受取れよ」と呼びけり。城
 中の百姓等、此事を聞くよりも、皆我先にと群り來り、個々我兒を尋取り、只管に權喜騒ぎ、
 笑ふも有れば舞ふも有り。是都て唐僧爺々の恩徳なりと、三藏の車を扯回し、亦徒弟等が異形
 なる姿をも恐れず、八戒を肩に駕せ、沙僧を手車に座せしめ、行者を頭に頂き、一個に二十人
 三十人づつ取著き、馬を牽き荷を擔ひ、城中に販り入る、其形勢言語に絶す。國王も是を制す
 る事能はず。三藏師徒、没奈何再度城中に回り入り、家々の供養を受け一月餘り逗留し、再三
 に辭退しつ、漸々に別を告げ、遂に西方に進み給ふ。

西遊記四編序

四大奇書者。小説之冠冕也。水滸西廂。最善摸寫人情。西遊之一書。雖
 事涉怪誕。熟讀來亦深有味。然世多有荔支龍眼連殼吞者。予有見於
 此。採先輩未譯者。續試譯之。如何原不覃象胥之學。加才短思不瞻。心
 有得筆不能言。數回譯來。皆隔靴搔痒。不甚中窠會。倦而自棄。長擱籠
 底。書肆某夙知之。竊挑出以附。欵颯。嗚呼我猶未甘心。看客可不堪閱。
 間挿繡像。欲喜兒輩耳。

天保六星秋八月浪華中島寓居多聞亭中誌之

岳亭五岳

此書百回百冊にもなさざれば、くほしく分解することあたはず。さるをわづかに四十巻をもて全うす。この故に、いふべき事をもいはでやみ、書くべきことをもらし、たゞ要とするところをのみ譯したり。看客よく心をそへてよみ給はらん事をこひねがひぬ。初二編に、八戒がくまでを、鹽やく翁のもちぬるものごとくゑがきたるは、大いなるあやまちなり。おのれが譯せし三四の編は、本文によりて是をたゞし、畫匠に誂へてかきあらたむ。見る人そのはじめに異なるをあやしみ給ふことなかれ。

四編 卷之一

○姪女育陽求配偶

心猿守主識妖邪

話表三藏師徒は、只管西に進みける處に、一時一派の黒松大林の中に入りて、半日餘り行けども未だ林を出る路を見ず。三藏則ち馬を止めて曰く、「此林中儂倅に閑雅なり。我少時馬を憩むべし。儂等齋を求めて來れ」行者、「領承りぬ」と應へて、且師父を馬より下し、松陰の下に座せしめ、自ら鉢盂を取りて、雲に打跨り空中に飛行きけり。八戒沙僧も、馬を繋ぎ擔兒を下し、林中を徘徊して其處爰遊び歩行きけり。三藏は、獨樹下に在りて多心經を念へて居給ひしが、忽ち聽く、彼處に人の叫ぶ聲して、「助け給へ」と呼ぶ事頻なり。三藏大に怪み、斯る深林の中に何人が在つて、斯様に叫びぬるや。是管す虎狼の類に出遇ひたる者ならん、と彼の聲を視的に尋行き給へば、果して一株の大樹の下に、一個の美貌女子、上半身を葛藤を以て松樹に細縛め、下半身を土裡に埋め置きたり。三藏是を見て大に歎じて曰く、「我家は爰を去る事二百餘里、事有りて斯く細縛められ給ふや」彼女子涙を流し、答へて曰く、「我家は爰を去る事二百餘里、

貧婆國と云へる處なり。此程清明の時節なれば、我が父母諸人と俱に野に出て遊びしに、乍ち一夥の強偷現れ來り、鎗刀を取て斬つて廻る。我が父母を上首諸人、我前にと逃去りぬ。我幼きに依りて、狼狽へて地に倒れ、遂に強盜に捉へられ、此山中に扯來り、他等個々我を妻にせんと云ひて、亦争ひを倣發し、因て我を斯く林中に捨置き、四散に別れ去つて往方を知らず。我爰に在る事已に五日五夜なり。萬望は老師父大慈悲を垂れ給ひ、我が一命を救ひ給はざ。九泉の下に在りても更に大恩を忘れ候はじ」三藏是を聞いて覺えず泪を流し、「徒弟等那處に在る」と呼び給へば、八戒沙僧是を聞著け、急ぎ師父の許に跪來る。三藏則ち八戒に命じて、彼女子が網縛を解放たしめんと爲給ふ處に、行者空中より是を看て、急ぎ林中に飛んで下り、早く八戒が耳を取て扯倒しければ、八戒驚き罵言つて曰く、「師父今我に命じて這女兒を救はしめ給ふを、爾怎麼我を引倒すや」行者曰く、「師父、此女子を解く事なかれ。他は一個の妖精にて、我を欺かん爲に來れるなり」三藏是を聞いて、「悟空が云ふ言生平に齟齬はず。既に其如くならば、我も亦是を不顧」とて畢に八戒を止めて立去り給へば、行者大いに歡喜び、急ぎ師父を扶けて馬に跨らせ、四個一齊に西を指して進みけり。

原來這女兒、行者が言ふに違はず、一個の妖精なりけるが、牙を咬んで行者を恨み、此幾年孫

行者が神通を聞傳へしが、果然虛ならず。彼唐僧は童身より修行し、一點の元陽を泄さず、他を拿て配合を倣し、太乙金仙と成らんと思しに、不期這猴孫に識破られたり、我再び法を設けて他を呼返へさん、と思ひ、「唐師父、那ぞ人の一命を救はざるぞ。這樣的薄情意を持ちながら、却て佛を拜せんと思ふは何事ぞや」と風に隨ひて兩三聲呼びけり。三藏遙に是を聞きて馬を住め、「悟空、爾彼女子が云ふ言を聞け。他がいふ處大いに理あり、人の一命を救ふ事七級の浮屠を造るより勝るとかや。我再び返りて彼女兒を救ふべし」と亦馬を轉廻し給へば、行者打笑ひ、「師父亦例の慈悲を發し給ふ。我も亦師父を治すべきの良藥なし。若強て是を住めば、師父亦我を怒り給はん。唯心に任せ給へ」とて個々原の處に立版り、三藏八戒に命じて、遂に彼女子が網縛を解きとらせ、釘鉈を取つて他が半身を穿出せば、彼女子大いに歡喜び、立上りて衣裳を整へ、三藏を禮拜しけり。三藏は此女子を同伴ひて亦西に向ひて林中を歩行出で給ひける時、悟空は只管に笑ひて止す。三藏の曰く、「這潑猴、怎生斯の若く笑ふや」行者が曰く、「師父今住人に逢ひ給ふ。今宵は好樂あらん」三藏是を聞いて怒つて曰く、「爾亂説を云ふ事なかれ」と。此時天色漸々晩に及び、松林の盡る處に一座の殿閣現れけるにぞ、三藏徒弟們を呼んで、「那里は管す一座の寺院と見えたり。我且那里に往きて宿を要むべし。爾們女菩薩を

介抱して靜に來れ」と三藏一個前に進み、山門に立入り、少時彷徨居給ふ時、寺中より色黒く筋骨露れ出たる道人走り出で、怪氣に三藏を顧り居たり。三藏是を見て暗に恐れ、「儂は妖精にあらずや。我は尋常の僧にあらず。東土大唐より爰に來れり。我が手下に降龍伏虎の徒弟あり。我を過ち拿へて却て儂が一命を亡ふ事なかれ」と曰へば、彼道人跪下いて曰く、「老爺々、我は管ず妖精にあらず。此寺は鎮海禪林寺と號し、我は則ち寺中の香華道人なり。爺々既に遠方より來り給ふ。且這方へ入らせ給へ」とて、二層の門内へ導引入れける時、亦一個の喇嘛僧走り出で、三藏の威儀堂々たるを見て大いに懽喜びたる光景にて、三藏の鼻を撫で耳を扯き、肩を按み背を撫でて、手を携へて方丈に伴ひ入れけり。是は喇嘛僧の人を親む禮なりとかや。三藏已に座に著き、東土大唐より西天に到り經を求るの緣由を仔細語り、今夜爰に一宿を過したき由を述べ給へば、喇嘛僧笑ひて曰く、「老師父偽りを云ふ事なかれ。東土より西天に至るに、幾萬里の山川を經、亦妖精邪鬼到る處都て多し。老師父一人怎生能く爰に到り給はんや」三藏の曰く、「我元來三個の徒弟あり。他等よく路を開き水を渡り、我を守護りて爰に來たり。唯今俱に門外に在り。貧僧一個怎麼爰に到る事を得ん」喇嘛僧大いに驚き、「我が此所、虎狼妖精多くして、夜に入りては絶えて人の往來なし。徒弟們快く唐長老の高徒を呼來れ」と云へ

ば、兩個の小喇嘛兒急いで門外に出でけるが、乍ち驚き走り廻りて曰ふ、「唐長老の高徒は門外に居給はず。却て三個の妖精、一疋の白馬を牽き、亦一個の女子一邊に在り。思ふに高徒は已に妖怪に吃はれ給ふならん」三藏打笑ひ、「其三個は則ち我が徒弟なり。管しも妖怪にあらず。一個の女子は、松林中にて一命を救ひ來れる者なり。他們都て怖るべき者にあらず。快く呼來り給へ」と曰へば、小喇嘛漸々に心を定め、又門外に立出で、不多時、三個の徒弟と彼女子を導引いて方丈に入來りけり。

○鎮海寺心猿知怪

黒松林三衆尋師

鎮海寺の衆僧等、東土より聖僧の來れる由を聞き、都て方丈に集り來りて三藏に相見え、急ぎ師徒に齋を進め、彼の女子を一邊に座せしめて相倍させつ、衆僧們、一つには三藏の説話を聞き、二つには彼の女子を暗に窺ひ、亦女子を救ひ來れる事などを聞き、已に三更の頃に及びて、彼女子は別に天王殿に臥さしめ、三藏師徒は其儘方丈に安寐せおき、衆僧個々退きけり。明旦に至りて、徒弟們已に馬を備へ、行李を收め、師父の起き給ふを待ちけれども、三藏只管沉睡して起出で給はねば、行者則ち師父の枕を揺し、兩三聲呼醒しけるとき、三藏僅に頭を擡げ、

「我何故といふ事を知ず、頭重く身中疼み、一向に一身動し難し」と曰へば、八戒急ぎ手を伸て師父の身上を摸でて曰く、「我能く此病を知れり。是昨宵、錢費ざる飯と見て、餘りに幾碗喰過して、食傷をし給ひたり」行者曰く、「爾慢に亂説を吐く事なけれ。師父既に不快ならば、且爰に住居して、平復を待つて路に出で給ふべし」とて、遂に此寺に滞留し、不期も兩三日を過しぬ。

一日三藏、頭を擡けて悟空を呼んで曰く、「此兩日、我病に困苦みて曾て問はざりし。彼松林にて救ひ來りし女菩薩に食を送る者有るや」と問ひ給へば、行者曰く、「師父、自己の病を愼み給へ。他が事を憂ひ給ふ事なけれ」三藏曰く、「爾少時我を扶け起して、紙筆を取出して我に與へよ」行者曰く、「師父紙筆を要めて何にし給ふや」三藏泪を流して曰く、「我今斯る病を得て、管ず爰に身を終るべし。今一封の書を寫めて、此旨を大唐皇帝に奏し、別に亦人を擇んで西天に到らしめんと欲す。爾我が爲に長安に登りて、皇帝に我が書を獻るべし」行者是を聞いて大いに笑ひて曰く、「師父今少しの病あり。忽ち這樣の尪弱き事を曰ふや。假令十分に疾重くとも、老孫冥府に打入り、十大閻王を捉住へて糾問せば、誰か師父の命を要る有らん」八戒曰く、「師兄斯の若く曰へども、人の性命は計り難し。我等且送葬の準備を爲さば可から

ん」行者曰く、「獸子亂話を云ふ事なけれ。爾原故を知らず。師父は如來第二個の徒弟、金蟬長老の轉世にて、師父前世のとき、如來の會下に在つて座睡をし、左の足にて一粒の米を踏み給へり。此罪に因りて、今生にて三日の病疾あり。今日過ぎば管ず快氣し給はん」三藏曰く、「誠に我が病、昨日に比すれば同じからず。今日は口裡渴きを生じ、冷水を得ん事を思ふ」行者曰く、「師父水を思ひ給はば、病已に除きたるなり。我快く水を取つて進せん」と、鉢盂を取つて寺中の香櫃厨に入りけるが、爰に衆僧都て一處に在り、個々泪を流して居たりけるにぞ、行者怪みて曰く、「爾等何を歎くや。我輩が幾日爰に滞留り、薪米を費すを憂るにはあらずや」衆僧曰く、「更に這樣の事にあらず。那里よりか妖怪來りて、前夜二個の小和尚を取られ、只衣服と骸骨後園に有り。次の夜亦二個の和尚を吃はれ、昨宵又二個を失ひたり。此三日已に六個の和尚を失ふ。爾の師父今病有るに因りて敢て是を告げず。我門此故に只管心を痛め歎くにて候なり」行者是を聞いて曰く、「是妖怪の處爲に疑ひなし。我原妖を降し怪を取るの術あり。爾等が爲に今宵彼妖怪を捉ふべし。管ず氣遣ふ事なけれ」衆僧此言を聞きて思へらく、他已に唐僧を守護し、幾萬里を経て爰に來る。極めて降龍伏虎の手列あらん、と思ひ、「長老此地方の爲に妖怪を除き給はらば、我輩が爲の再生の侍僮ならん」と云へば、彼の喇嘛僧が曰

禪室に悟空
大子蛇女と戦ふ



く、「爾等且其言を住れ。今唐師父病あり。長老若妖精と戦ひ給はば、或は唐師父の憂ひを成さん」行者曰く、「院主の言理なり。且師父に告げて商議を做すべし」と、頓て水を取つて方丈に行き、師父に贈り與れば、三藏只一飲に吃終り、忽ち神氣暢達し、亦兩碗の粥を進め、病勢頓に七分を減じけり。行者是を看て大いに歡喜び、夜に入りて師父の病いよく、快氣に見えければ、則ち、「此寺中に妖怪あり、我門爰に滞留る事既に三日、其間に六個の小和尚を捉られしとなり。我今宵他輩が爲に妖精を捉へんと思ひ候なり」と告げければ、三藏大いに驚き、「妖精已に寺内の僧を吃ひ殺す。我門も亦僧なり。兎死すれば狐歎むの道理なり。爾能く心を用ひて妖精を拿へ來れ」と曰へば、行者歡喜び、「唯一個佛殿に至り、十四五歳の小和尚と變じ、木魚を搗き經を念へ、妖精が來るを待居たり。已に三更の頃に至り、殘月僅に影さす頃、忽ち一陣の風颯と發り、蘭麝の香り鼻を穿ち、一個の美貌女子忽然と現れ來り、佛殿に上り、行者が手を取つて曰く、「小長老何の經を念み給ふや。少時後園に來り、我と共に交歡して樂みを成し給へ」と、行者が手を引き去かんとす。是を見て行者心中に想ふやう、諸は幾個の愚僧們、色欲に欺かれて性命を失ひたると思えたり。我今他を遁さんや、と急に彼女子が手を引住め、本相を現はし、鐵棒を把て打たんとす。妖精大いに驚き、急ぎ身を退き、兩口の劍を抜

出し、佛殿の前に在つて、兩個多時戦ひけるが、妖精忽ち身を轉じて、左の脚の鞋を脱ぎ、咒語を念へて自身の模様と變じさせ、兩口の劍を使ひて行者と戦はせ置き、眞の身は一陣の清風と化し、方丈に飛入り、三藏を攝將つて何地ともなく飛去りけり。行者は是に心著かず、只管彼女子と相戦ひ、遂に妖精を打倒し、亦一棒に打たんと爲る時、却て一隻の鞋と變じけるにぞ、行者是を見て首めて覺り、諸は他が計策に陥入りしか、口惜さよ、と急ぎ方丈に飯り入つて看ば、師父は既に居給はず、八戒と沙僧と二個、忙々然てぞ居たりける。行者曰く、「師父は何處へ去き給ひしぞ」八戒沙僧答へて曰く、「今一陣の風至ると思ひしに、忽然師父は見え給はず。是管ず妖怪の爲に捉られ給ひしならん」行者是を聞いて大いに怒り、「爾等守護して在りながら、何ぞ空然と妖怪に師父を奪れたるや。且爾們を打殺さん」と鐵棒を出しければ、八戒慌得驚き、頭を抱へて身を縮め、動き得ず。沙僧は却て、捲簾大將の臨凡にて、事に馴れたる者なれば、些しも騒がず、行者が前に跪下き、「師兄少時待ち給へ。今我門二個を打殺さんとし給ふは、再び師父を救はず、花果山に歸り去らんと思ひ給ふならん」行者罵つて曰く、「我那ぞ水簾洞に飯らんや。唐僧を守護して西天に至るなり」沙僧が曰く、「師兄慢ち給へり。若我兩個無んば、誰か能く馬を牽き、誰か荷を擔ひ、誰か又食を造り薪菜を拾はんや。師兄且

怒を止めて我々を免し、明朝三個同く力を合せて師父を尋ねば、亦却つて益有らん」行者是を聞きて、「理なり」と怒を収め、心を反し、「然らば明日、爾等と同く力を盡して師父を尋ねて救ふべし」と云ひけるにぞ、八戒大いに懽喜び、「此般の事は都て我身に懸りたる事なり。唯我々に任せ置き給へ」とて其夜は三個ともに方丈に夜を明し、翌旦個々急ぎ起出で、衆僧を呼びて昨宵の事を語り、又「前日携來りし女子を尋ぬるに、已に去方を知らざれば、諸は這女子妖怪にて師父を奪ひ去たるに疑ひなし」と云ひければ、衆僧等大いに驚き、「我等却て老師父の煩勞を做したり」とて、且三個に齋を侷めける。行者が輩三個は、遂に馬を牽き擔を荷ひ、「此妖精は、前日彼女子の居たりし松林中に往きて尋ねば、速に知るべし」とて亦東に向ひて轉廻し、彼松林中に至り、行者則ち咒語を念へて此地方の土地神を呼出し、「此地に妖精在りや」と尋ねれば、土地神答へていふ、「曾て妖精なし。然れども、此正南千里計り、陷空山無底洞と云ふ處あり。這洞中に一個の妖精住めり。他昨宵一陣の陰風と做りて此地方を過りたり。極て他洞中に廻りしならん」行者是を聞きて、且土地神を嘔し去らしめ、八戒沙僧と諸俱に、白馬を牽いて一齊に雲に打跨り、少時の間に南方千里に飛行き至り、一座の大山頭に住り、且八戒に分付けて洞府の有る地方を尋ねけり。

四編 卷之二

○姹女求陽 元神護道

八戒は山を下り、一條の小徑を求め、五六里餘り上前往きける處に、忽ち兩個の女怪あり、井の邊に水を汲居たり。八戒是を見て聲を發けて、「女怪々々」と喚びければ、彼兩個大いに怒り、「這和尚甚不禮なり。怎生我々を妖怪と喚ぶや」とて、釣桶の棹を把延べて、八戒が頭を連打に打ちたりける。八戒大いに驚き、頭を抱へて山上に走り返り、「長兄、此地方の妖精果して勇猛なり。彼山下に兩個の女怪あり。我一兩聲妖精々々と喚びたれば、他便ち棹を把つて我を打ちたり」行者是を聞いて笑つて曰く、「爾已に妖精と呼ばよ、他が怒るは理なり。爾今像を變じ、再び他等を伺ひ來れ」八戒曰く、「我今像を變じ行くとともに、亦他々に打たるべし」行者曰く、「爾他々を妖怪と呼ぶ事なかれ。他輩若我等と同じ年紀ならば、姑娘と呼び、若老いたらば奶々と呼ぶべし。然らば那ぞ打たる事有らんや」八戒是を聞いて、「我早く是を知らば、他々に打たれざりしを」とて遂に一個の黒胖和尚と變じ、再び山の坡下に走り往き、か

の女怪が水汲み在るところに到り、禮を施して、「姑娘、這樣に水を汲んで何にし給ふや」と云へば、兩個の女怪笑つて曰く、「長老來歴を知り給はず。我が家の老夫人、昨宵一個の唐僧を帶飯り給ひ、我々に命じて、陰陽交媾の好水を汲ませ、筵宴を安排けて唐僧と親を做さん要なり」八戒這事を聞畢り、急に又山上に跑返り、「師父は既に妖精と親を做し給ふ。沙僧疾く行囊を出せ。個々是を取分ちて古郷に皈るべし」と云へば、行者曰く、「獸子亦亂説を做すは那ぞや。然らば我々快く其女妖が後に從ひ往きて、他が洞中に至り、事の動靜を伺ひ來るべし」とて、夫より三個一齊に山を下りて、遙に見れば、彼兩個の女怪は水を汲終りて、南に向ひて歩行みゆく。行者が輩三個も、後に連いて行きけるが、一片の崖の邊にて、彼女怪を看失ひけり。三個急ぎ那里に至り、崖の前に轉り出づれば、果然一座の樓門有り。樓上に「陷空山無底洞」と云へる六個の大字を彫附けたり。門内却て房宇なく、一塊の大石十余里に跨る、石の正中に一箇の洞あり、底の深淺計り知るべからず。行者是を見て、「是管ず妖精が巢穴なり。爾等少時爰に在つて等つべし。我且裡に入りて動靜を伺ひ來らん」とて、身を揺はして洞中に飛入りけり。

斯て行者洞の裡に入つて看れば、却て明々朗々として、唯是一個の世界に出たる如く、日色風

聲、花草竹木、人間世界に異ならず。行々きて見れば、亦爰に樓臺房舍許多あり。行者忽ち一隻の蒼蠅と變じ、奥深く飛至り見れば、一箇の草亭の裡に、彼妖精絶色の美女と變じ、數多の女妖的等を會へ、筵宴の準備を做居たり。行者亦東の廊下へ飛行き看れば、三藏は一室の格子の鎖たる裡に座して、茫然として在したり。行者格子の裡に飛入り、三藏の頭の上に住り、「師父」と一聲呼びければ、三藏行者が聲を聞きつけ、「悟空、爾來れるか。疾く我を救ひ呉れよ」行者曰く、「妖精當今筵宴の準備を做し、師父と親事を做さんとす。我思ふに、師父は他と夫婦に成り、或は一男半女を生下給はど、却て師父の子孫を住め、和尚と成るに勝るべし」三藏牙を咬んで曰く、「爾這場に至りて尙我を欺かんと爲るや。我大唐を出しより以來、一毫の妄念を生ぜず。若此妖精に因て眞陽を亡はど、永世輪廻に墮入りて生々身を皈する事能はず」行者笑つて曰く、「師父恨み給ふ事なかれ。我計策を設けて救ふべし。今妖精酒を備へて師父に進せんとす。師父少時堪へて他が一鍾を喫み、師父又急に他に一鍾を斟ぎ、鍾中に一個の喜花を斟起て他に送り給へ。我其時蟻蜂と變じ、喜花の下に飛入り、他が肚の裡に吞下したる時、肚の裡に入りて心の儘に他を困苦め、降伏せしめ候はん」三藏是を聞いて大いに懼喜び、「我其如く做すべきなり」と曰ふ處へ、妖精快東廊に進み來り、鎖を開きて裡に入り、「唐長老、這